往直前、本分の工夫三昧に入られた。師言はんと欲して言ふ可き莫く、呈せんと欲して呈す可き莫く、進むことも得ず退くことも得ず、伎倆維れ谷まり、知見皆忘れ、怏々鬱々飲食味無く、形容憔悴して面色土の如しと傳記に書いてある。「人皆謂ひらく、拙公禪病革まる、必ず近日斃れんと、」斯う傍の人が評した位で、此處迄て行くには、容易なことでは至れぬ。大抵薄志の輩は、それ迄てに皆退いて仕舞ふ。そんな鹽梅であつたが、「愈々激して衰へず、苦屈の久しき一夜定中忽然として前後際斷す、」其苦しみに堪へ、其窮屈を忍び、さうして愈々益々勇氣を振つて、工夫三昧に這入つて居つた。一夜定中に忽然として前後際斷す、丁度鼠が牛の角を喰つて、其の末端迄て喰込んで、動くことが出來ぬといふ。さういふ狀態に至つて、時間も空間も物も我も何も個も一切皆な無くなつて仕舞つた。況んや誰でも一旦骨折つてやれば、此處迄て行くのてあります。「絕妙の佳境に入る」これは傳記に委しく書いてありますが、眼耳惺々として眼耳皆無なるが如く、須臾にして胸次豁然眞の眼耳を開く、何を見ても何を聞いても少しも障りがない。近頃精神統一といふ文字が流行りますが、即ち身心統一の極に達した時はさうてあります。「恰も大死底の如し」我々が疾に依て死ぬのは、これは小死て我々の方ては、此工夫三昧に入つた境界を大死と言ふ。滿身火の玉の塊まりの如くなつて仕舞つたのが、大死て、冷めたく死んて仕舞うのとは違ふ。斯うなつてくれば吾れ自身の五尺の身體も、目に入らぬ樣になつて仕舞つて、五官の働も腦神經の作用も、其儘大死の狀態となる。所謂身心脫落々々身心の境界や。「一切物我あることを覺えず」斯ういふ所へ這入らなければ眞個精神上の力は得られない。「只覺ゆ吾が腔內の一氣」腔內といふのは、足の先から頭の上に至る迄て之を腔といふと字書にある。通例は腹と讀んて居るが、腹計りてない、全身に滿ち〳〵たる一氣ぢや。此の氣はどんな氣かと、外から見ても見られぬ、前に言ふ前後際斷の境涯に至らねばならぬ。さうして其腔內の一氣が。「十方世界に彌滿し光曜無量」我々が肉眼を以て天體を眺めて太陽の光を見るが如く、腔內の一氣が十方世界に彌滿して、何處も彼も光の及ばぬ所はなくなつて、眼も鼻も手も足も、前も後も何處も彼も赫々たる一の太陽の樣な有樣になつて、榮西祖師の所謂日月の光は踰ゆ可らず、而かも心は日月光明の表に出づと云はれた通りてある。「須臾にして蘇息する者の如し」此處迄て行くと、今迄は知覺といふものは全くないが固地一聲ふつと氣が附いて見ると、忽ち蘇つた樣な有樣になる。「視聽言動豁然として平日に異なり」これは傳記を見ると、胸次豁然眞の眼耳を開き大好事を見、大好聲を聞き、自知自得、恰も甘露を飲むが如く、從前の疑團、從前の學碍一時に徹底雪解氷釋すと、斯ういふ工合に書いてある。「是に於て試に天下の至理妙義を求むるに、頭々上に明に、物々上に顯はる」一旦此の境界を經來ると今迄て分らなかつた天下の道理、不可思議の義理合も、皷に頭々上に明かに、物々上に顯はれて來る。今迄では外へ向つて求め探して分らぬことが、今度はそれが其れ自身に目の前に現はれてくる。古人の所謂格物一變して、物格となる境界である。こつちから向ふを求めるのでない、向ふのものが自ら

我が前に來り顯はれるといふ有樣で、これは多少骨折つた人は大なり小なり矢張り此の味ひは得て居るに違ひない。それは人々の骨折に依て程度は違ふ。斯ういふ有樣であるから。「歡喜の餘、自ら手の舞ひ足の踏むを忘れ」それから斯ういふことを覺えず叫んだ。「即ち忙に連叫して曰く」何の考もなく、其儘斯ういふことを叫び出した「百萬の典經日下の燈、また太だ奇なりまた太だ奇なり」傳記には、モツと委しく書いてある。吾れ神悟せり。百萬の典經、典經と言つても、丸る呑にしてはならぬ。我が佛敎には、五千四十餘卷の經文あり『傳灯』には千七百則の公案といふものがある。其他諸子百家澤山の典籍があるが。其の典經も日下の燈て、太陽の下に電燈を點けて置くやうなもので、何の役にも立たぬ、又甚だ奇なりと覺えず叫び出した。「乃ち小偈を打して曰く」それから暫くして斯ういふことを口吟まれた「疎濶孔夫子、相逢阿堵中」阿堵といふ字は、俗語に這箇といふ意味と同じて、此處とか其處とかいふ丈けに過ぎない。先師は元と孔門から這入つたから、孔夫子が引合に出る。孔子といふ人は、殆ど三千年前に歿くなつたと思つて居たが、現在此の座敷に生き〳〵してドン坐つて居るといふことが分つて來た。疎濶なり孔夫子、如何にもお久しいことて、孔夫子に親しくお目に掛ることが出來た。「憑藉多謝去好媒主人公」今迄の恩德を誰の紹介で、御禮を申上げたものであらうか。今は早や誰も紹介者は入らない、悟らぬ先きは紹介者がなければ、孔子にも遇うことも出來ぬ、分際てあつたのである。凡べて古い宗敎には、俗人が直ちに神に接することは出來ぬ樣に、敎へて居つた、どうしても坊さんの手を借りなければならぬ。今でも耶蘇の舊敎抔にはさういふことがある、佛敎には大體さういふ隔りはない、皆直接で、自身が即ち媒介者だ。今直附けに孔子にお目に掛ることが出來たのは、實に有難い、感謝に餘りありといふ。斯ういふ偈を得て、それから「直ちに走つて老漢の室を敲き所見を呈す」直ちに鬼大拙和尙の居間を敲いて、さうして自分の得た所見を呈した所が、「老漢莞爾として休す」今迄ては何か言はうとすると、忽ち鐵拳を振舞ふといふ有樣で、迚も近づくことは出來なかつたが、此時始めて、鬼大拙と言はれた和尙が、一つニッタリと笑はれた丈けて、別段に賞めもせなんだ。「余曰く某曾て禪に妙悟ありと聞く、今日始めて古人の我を欺かざるを知る」悟りといふ者の味は、今日始めて知りました。古人も下士は道を聞いて大に笑ひ、中士は之を聞いて半ば疑ひ半ば信ずる、上士は之を聞て大に樂しむと云うた。今先師は、今日始めて古人の我を欺かざるを知る、實に御禮の申樣が御座らぬと述べられた。「時に天保辛丑の歲四月二十七日の夕」てあつたのである。此時大拙和尙が先師に向つて言はれるに、倆〳〵、一旦の慶快を以て是と爲す莫く、今より四句の誓願輪に鞭つて無量の妙慧を煥發し、無數の因緣を透過して、末後別に生涯あることを識得すべし。慧無きの定坐は邪定也、愼んて無念無心に了る勿れ。其餘諄々として涙を呑んて警囑す、昏時より初更に至ると、傳記に書いてある。さういふ樣な有樣で「是よりして天下の老和尙の舌頭に瞞せられず」一旦此の境界を得て、始めて天下の老和尙が如何なることを言はうと、其の口先に附廻されない、どんな學

者が、どんなことを言うても、其の言葉尻に取附くといふやうなことは斷じて無いといふ力を得た。これも先師が生涯大切にして持て居られたが、其時分鬼大拙が、臨危不變眞丈夫と半切に認めて先師に與へられた、「半生を慶快し了す」これから毎日快く其日を送ることが出來た。其翌年の秋八月に、淀川を下つて故郷の大阪に父母を省ねられた。途中に、斯ういふ詩があります。

去年大息扣レ舷人、豈計今爲ニ不老身一、十里秋光親送レ我、蘆光風穩浪花濱。

去年は舷を叩いて泣きの涙で京都へ上つた人が、豈圖らんや今は不老不死の此世ながらに佛の身となつた、此樣な喜ばしいことはない。淀川の秋の景色も皆な我身の成功をめづるかの如く思はれて、コンナ床しいことはない。「是に於て更に望上心を激發し、天涯海角を奔走し、諸名老に咨參する十有餘年」それから有ゆる善知識に參得せられて、前後二十年も雲水の有樣でやられた。「日用行事の間に於て、存養省察」存養省察といふことを約めて言へば精神的修養であります。只居室に引籠つて坐禪する時斗りでない、日用行事の間に於て實地に修養をして、「愈々了すれば愈々求む」只一旦の悟を得て小成に安んじては居らぬ。「百切千瑳、之を琢し之を磨し、日に新に日々に新たなり」皆言葉は據り所がある、日用苟も無意味に日を送つたことはない。「前後十五六年間、空過の光陰無く竟に蘊奥を備の棲梧老漢の處に罄し、吾が志を成就す」棲梧老漢といふのは、號は儀山、字は善來、又棲梧軒凡鳥ともいふ。私も丁度十七の時に、此の棲梧老漢の御側に一年斗りお給仕して居たことがある。これは私の本師越溪和尚の命を受けて、さうして御隨從をして居たのでありますが、今から思ふと實に有難い。先師は此の棲梧老漢の處で宗旨の蘊奥を極められた。大拙和尚が本師であつて、傳法の師家が即ち此の棲梧老漢である。法系から言ひますと、棲梧老漢、儀山和尚は、太元和尚の法を嗣がれ太元和尚は隱山和尚の法を嗣がれ、隱山和尚は、峨山和尚の法を嗣がれた。峨山和尚といふのは有名な白隱和尚の一番終の弟子で亦一番勝れた人であつた。

儀山和尚―白隱和尚―峨山和尚―隱山和尚―太元和尚―儀山和尚―(棲梧老漢)―洪川和尚

而して先師洪川和尚は孝明天皇樣から佛國興盛禪師といふ徽號を頂戴して居られた。明治十一年の三月二十八日に歿せられまして、其のお葬式が濟んでから私は吾妻下りをして、始て鎌倉の土を踐んだのであります。先師は其の棲梧老漢の所の志を成就された。以上は先師の略歴談でありますが斯ういふ所はあなた方が聞いて御座つて眞味の程はどうでせうか、私共は實際に其人に見えて、法乳の御恩を蒙つて居る故に誠に有難く感ずるのであります。

第十八講　緒言（其六）

於是。把墳典驗之。孔子陰含見性一乘深味。陽吐天下萬古規言。其隨時任緣。橫說竪說。如與吾釋老合符節。寔知儒佛同原。事理一致

矣。於乎道則高矣峻矣。自非志鋒剛毅。心底確正者。其孰能究了焉。孔子曰、君子憂道不憂貧。又曰謀道不謀食。孟軻曰。以身殉道。看哉聖賢之於道也。如是其純。如是其急。而今之儒士。醉心詞藻。糊口佔俾。而無憂道之大志者。是亡論忘却他洪恩。反釀殃蕭牆之內者也。孔子其不惡之哉。必言。非吾徒也。小子鳴鼓而攻之可也。愚也雖道不同不可相爲謀。然初志之發憤。一簣子儒門。是以難忍坐視孔門之心法不行於世。將盡力以扶持其道。翻眞風乎已墜。回大浪乎既倒。不是釣名射聲。唯欲補儒門一大缺典。以報幼來洪澤之一滴耳。孔子不以杞宋徵三代禮者。文獻不足故也。雖杞宋實繼夏殷。當時文獻不足。則禮猶不徵。況於道乎。如今雖儒門文學不乏。獻德實絕矣。我禪門。明道見性之眞傳。迦葉以來。聖人君子。的々相承。以至于今。不因師證。則爲虛構。故愚今欲取大道之徵于此。以及于彼也。蓋孔子鍛煉學者。正有三等級位在。後學忘本走末。故不知所以用之。等閑看過焉。今設之。初等名入德位。中等名上堂位。上等名入室位。且加愚意。置實學位爲四等。取之雖曰未學吾必謂之學之語。此位爲初一步。蓋初學堅立辨道志。黽勉於日用行事間。欲暫時不打失。謂之實學位人。刻苦用力之久。而工夫漸漸純熟。忽然見得本有自性。謂之入德位人。法財無量。轉見得轉求覓。而洞究大道體用。詳識衆物妙理。謂之上堂位人。尙鑽研不罷。透過向上重重智關。運出明暗雙雙機用。謂之入室位人。然後復依實學位。長養聖胎。潛行密用。不生怠惰心。死而后已。是荀卿所謂百姓積善而全盡。謂之聖人者也。

和訓 是に於て墳典を把て之を驗するに、孔子は陰に見性一乘の深味を含み、陽に天下萬古の規言を吐く。其時に隨ひ、緣に任せて、横說縱說、吾が釋老と符節を合するが如し、寔に知る儒佛同原事理一致なることを。於乎道は即ち高く峻し、志鋒剛毅心底確正の者に非るよりは、其れ孰れか能く究了せん。孔子曰く、君子は道を憂ひて貧を憂ひず、又曰く道を謀つて食を謀らずと。孟軻曰く、身を以て道に殉ずと。看よや、聖賢の道に於けるや、是の如く其れ純、是の如く其れ急、而るに今の儒士、心を詞藻に醉はしめ、口を佔俾に糊し、而も道を憂ふる大志無き者、是れ他の洪恩を忘却するに論亡

く、反て殃を蕭牆の内に釀す者なり。孔子其れ之を惡まざらんや、必ず言はん、吾が徒に非るなり小子鼓を鳴らして之を攻めて可なり。愚や道同からず、相爲に謀る可からずと雖も、然も初志の發憤儒門に一簣す。是を以て孔門の心法世に行はれざるを坐視するに忍び難し、將に力を盡して以て其道を扶持せんとし、眞風を已に墜るに翻し、大浪を既に倒るゝに回す、是れ名を釣り聲を射ず、唯儒門の一大缺典を補ひ、以て幼來洪澤の一滴を報ぜんと欲する耳、孔子杞宋を以て三代の禮を徵せざる者は、文獻足らざるが故なり、杞宋實に夏殷を繼ぐと雖も、當時の文獻足らざれば即ち禮猶徵せず、況や道に於てをや。如今儒門文學乏しからずと雖も、獻德實に絕ゆ。我が禪門、道を明め、性を見るの眞傳、迦葉以來聖人君子、的的相承け、以て今に至る。師證に因らざれば即ち虛構なり。故に愚今大道の徵を此に取り、以て彼に及ぼさんと欲するなり。蓋し孔子學者を煆煉するに、正に三等級位の在る有り、後學本を忘れて末に走る、故に之を用ゆる所以を知らず、等閑に看過す。今之を設けて、初等を入德位と名づけ、中等を上堂位と名づけ、上等を入室位と名づく。且らく愚意を加へて實學位を置いて四等と爲し、之を未だ學ばずと曰ふと雖も、吾必ず之を學びたりと謂はんの語に取り、此位を初一歩と爲す。蓋し初學堅く辨道の志を立て、日用行事の間に黽勉す、漸次も打失せざらんと欲す之を實學位の人と謂ふ。刻苦力を用ゆること久うして、工夫漸々に純熟し、忽然本有の自性を見得す、之を入德位の人と謂ふ。法財無量、轉た見得すれば轉た求覓し、而して洞かに大道の體用を究め詳かに衆物の妙理を識る。之を上堂位の人と謂ふ。尙ほ鑽研罷まず、向上重々の智關を透通し、明暗雙々の機用を運出す、之を入室位の人と謂ふ。然る後に復實學位に依て聖胎を長養し、潛行密用、怠惰心を生せず、死して後已む。是れ苟卿の謂ゆる百姓善を積んで全く盡す。之を聖人と謂ふ者なり。

【講話】これより第七段目で、こゝに至つて漸く本意を現はされた。「是に於て墳典を把て之を驗するに」この三墳五典のことは、前にも一言したことがありますから、今日は諄どゝ言はぬても宜い。凡そ儒者の經典は、三墳五典とすれば、それで包まつて居る、其の三墳五典を把て之を驗し、我が禪門に於て力を得て後に更に三墳五典を把て之を驗すると、大に前日見た所とは樣子が違ふ。それは「孔子は陰に見性一乘の深味を含み陽に天下萬古の規言を吐く」。孔子の言はれた中には、直指人心見性成佛、轉迷開悟、とかいふ言葉はないが、陰々の中に、見性一乘の味ひを含んで居る。此の一乘二乘三乘抔といふことは、これは佛法の學問上の言葉で一乘といふは、大乘といふも同じである。併し只大乘と云うても、其の中には、實大乘と權大乘とあまりすが、こゝて一乘といふのは、實大乘を指して居る。陰には見性一乘の深味を含んで居るが、表向は、天下萬古の規言を吐く、君臣、父子、夫婦昆弟、朋友とか、或は仁義禮智信とか、斯ういふ萬古の規言を吐いた。所謂俗諦であるが、其孔子の內容を見ると、我が見性の深味と同じてある。「其の時に隨ひ緣に任せて橫說竪說で。「孔子は一代不遇であつたけれども、時に隨ひ緣に任せて、橫に說き竪に說いた有樣といふものは、「吾が釋老と符節を

合するが如し」、吾が釋迦牟尼佛が一生說法せられたのと割符を合せた樣に同じ樣である。「寔に知る儒佛同原事理一致なることを」儒も佛も元は同原、事と理は一致である。儒者は現在に於ける一世の風敎を重もに說いたが、佛法は過去現在未來に涉つて、幽玄高尙な道理を說いた、詰り事と理とは一致である。「於乎道は則ち高し峻し」、是に至つて儒も佛も無い。只一乘の大道といふものは、實に顏回が言はれた通り、「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し」といふ有樣「志鋒剛毅心底確正の者に非るよりは、斯ういふ鹽梅てあるから、一知半解を以てしては到底之を究める事は出來ない。苟も此の大道を明らめ樣といふ輩ならば、志が剛毅でなければならぬ。さうして心底の最も確かなる者に非れば「其れ孰れか能く究了せん」、大道を究めることは出來ない。「孔子曰く、君子は道を憂ひて貧を憂ひず、これも『論語』に出て居る。『論語』の衞靈公篇に「耕すや餒其中に在り、學ぶや祿其中に在り、君子は道を憂ひて貧を憂ひずと」、斯うある。斯の道を求むるの君子といふ者は、只道のみを憂ひて貧を憂ひず、其例は顏回の例を擧げて見ても、其他の例に依て見てもさうで、貧を少しも憂ひない、併し之は故さらに貧を良しとするのではない。假令ひ身は貧に處して居つても更に頓着しない。「又曰く道を謀つて食を謀らず」、道の爲に大に心を勞するけれども、食の爲には心を勞しない。これは我が佛法の祖師方の傳記抔を見ると、其中に皆現はれて居る。古人の語に道心の中に衣食有り、衣食の中に道心無しなどゝ云うてある。「孟軻曰く身を以て道に殉す」、道の爲には此の身體を投出すので、釋迦如來が修行をして道を求むる間には、鬼の爲に此の身體を供養された。或は在る仙人の爲に身體を供養したといふことが數限りもなく傳記に書いてある。其他祖師方は何れも身を以て道に殉した。二祖慧可大師の如きは自分の腕を切斷して迄でも道を求むる熱誠を表された。「看よや聖賢の道に於けるや是の如く其れ純、是の如く其れ急、而るに今の儒士」、斯ういふ有樣であつたに拘らず、現今の儒者と言はれて居る人々はどうかと言へば、「心を詞藻に醉はしめ」其の儒の道といふものは、早く無くなつた。詞藻といつて色々の詩を賦したり、文を作つたり、さういふこと計りやつて居る。「口を佔俙に糊す」、これは『禮』の學記に出て居る言葉で、「今の敎ゆる者其佔俙を呻す」、とある。其註釋を見ると、佔は視せ、俙は簡也、只視る所の簡牘を吟諷して、其の蘊奧に通ずること能はざる也、さういふ註釋がある只色々の事を記憶して詩を作つたり文章を拵へたりする丈けを以て、儒者だと言つて居る。「而も道を憂ふるの大志無き者」、さうして眞の道の爲に心配するといふ者は一人も居らぬ。「是れ佗の洪恩を忘却するに論亡く」、佗といふは孔子を指して居る、孔子の洪大なる恩を忘るゝ計りでない。「反て殃を蕭牆の內に釀す者也」。これも『論語』に出て居る言葉で、『論語』の季氏の章に、「吾れ恐くは季孫の憂顓臾に在らずして、蕭牆の內に在らん」とある。季氏が顓臾を征伐しやうとした時分に、孔子の弟子の冉有と季路の二人が、孔子に見えて言ふに、「季子將に顓臾に事あらんとす」、近頃顓臾を征伐しやうとするまだ此間に言葉がありますが略して其末の所に、「今由と求とは夫子を相けて遠人服せずして來す能は

ざる也、邦分崩離析して守ること能はざる也、而て干戈を邦内に動かさんことを謀る、吾れ恐らくは季孫の憂顓臾に在らずして蕭牆の内に在らん」。殃は遠方ではない、敵國に殃が起るてあらうといふ意味、殃を蕭牆〳〵の内に釀す者てある。「孔子其れ之を惡まざらんや」如何に孔子でもさういふ僻輩は大に惡まるゝであらう。「必ず言はん吾が徒に非る也、小子鼓を鳴らして之を攻めて可也」、これも矢張り言葉は『論語』から來て居る。先進の篇に「季氏周公より富めり、而て求也之が爲に聚斂して之を附益す。子曰く吾が徒に非る也、小子鼓を鳴らして之を攻めて可也」といふ言葉から來た。小子鼓を鳴らして之を攻めて可なりと言はれるてあらう。「愚や道同じからず相爲に謀る可らずと雖も」、即ち先師洪川和尚が、私は儒を捨て禪に這入つた者てある。佛者が儒道のことを議するのは、訝しく聞えるてあらう。相爲に謀る可らずてあるが、「然れども初志の發憤儒門に一簣す」、一簣といふ字も矢張り『論語』から出て居る。或時孔子が、「譬へば山を爲るが如し、未だ一簣を成さずして止むは吾が止む也、譬へば平地の如し。一簣を覆ふと雖も進むは吾が往く也」、斯ういふ言葉がある。只一畚丈けても置いたならば、矢張それ丈けは進んて居る。一畚丈けても休んだならば、それ丈け退いて居る。其通り私の初志の奮發は、儒門に一簣して、それから這入つて居る。「是を以て孔門の心法世に行はれざるを坐視するに忍び難し」、如何にも袖手傍觀して居るに忍びない。それ故に「將に力を盡して以て其道を扶持せんとす」私は見るに忍びんから、一臂の力を添へたい。「眞風を已に墜るに翻し、大浪を既に倒るゝに回す」といふ志である、「是れ名を釣り聲を射るならず」、或る者は議するてあらう。洪川が儒を捨て禪に這入つたが、俗臭未だ盡きずして、自分の名聲を馳せ襟とする。さういふ野心から來たのだらうといふ輩もあるか知らぬけれども、それは思ひも依らぬ寃罪てある。「唯儒門の一大缺典を補ひ以て幼來洪澤の一滴を報ぜんと欲する耳」。詰り現今に於て儒門に一番必要の事が缺けて居るのは、補うて、以て子供の内から御恩になつた、其の御恩の一滴丈けても報じやうといふに過ぎない。「孔子杞宋を以て三代の禮を徵せざる者は文獻足らざるが故也」、これも『論語』の八佾の篇にある。孔子が或時言はれるに、夏の禮、吾れ能く之を言へども、杞徵するに足らざる也、殷の禮吾れ能く之を言へども、宋徵するに足らざる也、文獻足らざるが故也、足らば則ち吾れ能く之を徵せん」。杞といふのは、夏の後、宋といふのは、殷の後を引いて居る。けれども孔子が杞の國宋の國を以て、夏殷周三代の禮樂を徵せられなんだといふはどうかと言へば、文獻足らざるが故てある。文は典籍、獻は賢といふことて、「杞宋實に夏殷を繼ぐと雖も、當時の文獻足らざれば則ち禮猶ほ徵せず」。杞や宋が夏の國殷の國を繼いて居る。けれども當時の文獻足らざるが爲に、今日の禮儀作法にそれを徵されなかつた。「況や道に於てをや」、それ故に「如今儒門文學乏しからずと雖も獻德實に絶ゆ」。今儒門の方を眺めると、文學の方は中々行はれて居る。併し乍ら眞の賢人、眞の德者といふ者を求めんとすれば、殆と寥々として曉天の星の如し。「我が禪門道を明らめ性を見るの眞傳」、然るに我が禪門の方はどうかと言へば、道を明らめ性

を見るの眞傳は、「迦葉以來聖人君子的々相承け以て今に至る」。釋迦牟尼佛以來、聖人君子相承け來つて、現今の私等に至る迄で傳つて來た、これについて玆に一つ面白い話がある。それは後深草天皇の時分、其當時の儒者の家といふは、從三位菅原爲長といふ人てある。菅原家は儒者の家としてある。丁度其時分に我が佛敎の方には、聖一國師といふ名僧があつた。京都東福寺の開山で、藤原の道家公の歸依者て、あの東福寺が出來た。所が關白藤原の道家公の所へ、菅原三位と聖一國師と出會はれたことがある。其時分に道家が二人の前で言はれるに、兩雄相遇ふ一戰なかる可けんや、一人は佛敎家の英雄、一人は儒道の英雄ぢやから、兩雄で、それが今日は偶然此處に出會はれたのだから、一と戰さなくてはならぬ。道の戰さをして貰ひたいと言つた。時に、聖一國師が言はれるに、豫て聞及んて居るが、菅原家ては儒道を世襲にして居るといふが是なりや否やと念を押した、さうしたら菅原公は色を嚴そかにして言ふに、然り。それは問はれる迄も無いことである、遠からん者は音にも聞けといつたやうな鹽梅。そこて聖一國師が言はれるに、然らばお尋ねするが、我が禪門の授受、師匠が授け弟子が受けて、祖師より五十五世お釋迦さんから、段々算へて、我れ聖一に至る迄は五十五世、若し達磨から算えるならば二十七世、ズッと綿々として我れ迄で傳へて來て居る、强弩の末の誠の力なき弓の如き勢であるが、忝じけなくも釋氏と稱するとを得て居る。私が方は左樣てあるが、若し釋を以て儒に例せば、當さに然るべし。こんな鹽梅に儒者の方をお尋ねして見るが、菅原家も孔子からズッと斯の如く明に授受の系統が分つて居りますか、どうか、多分分つて居るだらうが知らず孔子に於て幾世ぞや、貴方に至る迄で孔子から全體何代目になりますかと問はれたらば、菅原の爲長は答ふること能はず、それて事は終つたが、其の座敷を退いてから、菅原公が人に言はれるに、我れ道を以て相角せんと期す、今日は何ても道理を以て一つ相爭はうとして居たつのに、圖らざりき彼れ俗套を以て我れを論ず、思ひ掛けない通俗的の事を以て我れを困らした、何でもないことて今日は一本やられたと言はれた、といふ樣なことが、書物の中に書いてある。そんな樣な有樣て、的々相承けて以て今に至る、誠にそこは明かて、「師證に因らずんば則ち虛構爲り」、自分免許ては通らぬ、我れは悟つたとか、道を得たとかと言つても、自分免許てはいかぬ。こちらでは、何處迄も一器の水を一器に移す如く、師匠から弟子に傳へ、弟子から又弟子に傳へて行く。若しそれに因らなければ虛構とする、何ぼ悟つたと言つても許さぬ、「故に愚今大道の徵を此に取り以て彼れに及ぼさんと欲する也」、故に私は大道の徵を儒門の方に取りたいが、道が絕えて居るから我が禪門に徵を取て、彼れ儒門の方に及ぼさうといふのだ。

「蓋し孔子學者を鍛練す、」これは文章の上から言ふと八段目になる。八段目に、孔門鍛練の實を述べられた。孔子が學者を鍛練せらるゝに、「正に三等級位の在る有り」三等の級位がある。然るに「後學本を忘れ末に走る、故に之を用ゆる所以を知らず」私が見ると、孔子が、學者を取扱ふ等級が立派に

出來て居る。それを今の儒者は、「等閑に看過して」居る。それで私が、「今之を設けん」其の等級の位を設けて見ると、「初等は入德位と名づく。」入德といふ字も、先師が臆斷に附けられたのでない『大學』の初めに程明道が、「大學は孔子の遺書にして、初學德に入るの門也」と申した、そこを根據として、初等を入德の位と名づけ。「中等は上堂位と名づけ、上等は入室位と名づく。」これは御存じの通り『論語』の先進の篇に出て居る「由也堂に昇る、未だ室に入らざる也」自ら等級を立て居る。同じ道を得たと言つても、其處の溜り座敷迄で來た輩もある、奥座敷迄で來た輩もある。初等、中等、上等とあるが、「且らく愚意を加へ」先師の意見よりして、「實學位を置いて四等と爲す、」モウ一つ實學位といふものを置いて見る、之を合せて四等としたら宜からう。それは何處から持て來たかと言へば、矢張り『論語』にある言葉で、學而の篇に出て居る。「子夏曰く賢を賢として色に易へ父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致し、朋友と交るに、言て信あらば未だ學ばずと曰ふと雖も吾れは必ず之を學びたりと謂はん」そこから持て來た。「之を未だ學ばずと曰ふと雖も、吾れは必ず之を學びたりと謂はんの語に取る。」此語を取て實學位といふものを設けた。詰り學校的學問はしないても、實地に於て其の學問の味ひ丈けを知て居る、其の人達を指して實學位の人といふ。「此位を初一歩と爲す、」これを初めとする、「蓋し初學堅く辨道の志を立て、日用行事の間に黽勉す、」先づ道に志して、此の力を得やうといふ輩は、堅く辨道の志を立てなければならぬ。孔子一代に於てもさうだ、吾れ十有五にして學に志す、學といふことに志が定まつた。三十にして立つといふのは、即ち志を立つた。四十にして、惑はずといふのは、即ち志を疑ひ惑ひの無くなつたので。五十にして天命を知るといふのは、志と天と相通じた。六十にして耳順といふのは、微妙悠遠の道理を知つたので、それから七十にして心の欲する所に從て、矩を踰えずといふ所に至つて、始めて一擧手一投足も皆道に適ふといふ所迄で行つた。然し其實、志の一つを以てズットと貫いた、志といふものは、大變大切なものである。故に堅く辨道の志を立て、日用行事の間に黽勉して、「暫時も打失せざらんと欲す、」暫くも怠りなき樣にするのを、「之を實學位の人と謂ふ。」最初道に這入る人は斯ういふ心掛て行かなければならぬ、それを私は實學位の人と謂ふ。「刻苦力を用ゆること久うして工夫漸々に純熟し、忽然本有の自性を見得す、」段々骨折つて工夫を積んで行て、本有の自性を見得す、即ち悟りの開ける時節が到來する。これを白隱禪師は、八識田に一刀を下すと云はれた。つまり心心と云うて居る其物の根源を打ち破つて來る、すると其處に大圓鏡智の寶光が立ち所に煥發する、本地の風光本來の面目が顯露する。「之を入德位の人と謂ふ、」そこで悟りの道が開けて、益々進んでやらうと、「法財無量、轉た見得すれば轉た求覓す、」悟つたら又捨て仕舞ひ、悟つたら又捨て仕舞ひ、解脫的に修行して行く。「而して洞かに大道の體用を究め詳かに衆物の妙理を識る」といふ所へ行く、「之を上堂位の人と謂ふ。」これが五位て言ふと、偏中正の一位にあたる、智慧が段々に進んで居る。「尙ほ鑽研罷むず、」それから尙ほ澤山爲

すべきことが、我が室内にもある。それを「向上重々の智關」といふ。それを一々透過して、「明暗雙々の機用を運出す、」明暗といふのは、明中に暗あり、暗中に明あり、これは幾重にも廣げることが出來る。悟中に迷あり、迷中に悟ありと言つてもよい。これを五位の上でいふと糅しく正中來の一位に入り、兼ねて兼中至の眞修に依て、明暗雙々底の機用を得るので、「之を入室位の人と謂ふ。」それから是位迄てせり上げた上、又始めへ立返つて、「然る後に復實學位に依て聖胎を長養す」聖胎長養といふことは、古人が大層重んじて居る。悟つた境界を今日事實の上に煉り立て行くのを聖胎長養といふ。關山國師は修行成就の後、飄然跡を美濃國伊深の山中に晦まして牛飼をなしつゝ、其聖胎長養に力められた。又大德寺の開山大燈國師が、五條橋下の乞食の群に入り、光を韜み跡を晦まして居られたのも、亦此聖胎を長養せんが爲めてあつた。此の如き事蹟は此外にも澤山ある。斯ういふのを、長養聖胎といふ。「潛行密用」我れは悟りを開いたといふことを人に覗はれても恥かしい。それ故に眞の長養聖胎は、潛行密用て、密に行ふのである。迷を去り悟りを開き、悟りを忘れて殆と悟らざるが如き境界に至らなければならぬ。即ち悟了同未悟てなければならぬ、未だ悟らざる時は、山は是れ山、水は是れ水なり、既に悟れば山は山に非ず水は水に非ず、併しつひに悟了すれば山は是れ山、水は是れ水てある。禪宗に於ては、いつ迄も悟つたといふ痕跡が殘つて居る樣ては、本當の悟りてない。それを忘れて仕舞つた所の境界に至らなければならぬ。孔子の所謂心の欲する所に從へとも矩を踰えずと云ふ、境界、其處まて到らねばならぬ。「怠惰の心を生ぜず、死して後已む」死して後已むといふことも孔子の言葉だ。「是れ苟卿の謂ゆる百姓善を積んて全く盡す」有ゆる善き事を仕盡して、善き事迄も忘れて仕舞ふ、「之を聖人と謂ふ也」こゝまて進まねば究竟して居らぬ。

第十九講　緒言（其七）

竊意。古先聖王。審察人之造詣此境。一言以授道統。令化育生民也。允執其中。惟精惟一。道心常存等是也。外之莫有聖學也。孔子創建聖學。以立儒門。傳道統於曾顏。以至孟軻。其旨歸于此。是固不誣之說也。孔子復起。必不易吾言。伏惟。高見正識士。熟覽此書。察余鄙言。俾忘言而契道。果能知佛道與儒道。竝用而不悖。然後依此篇。大有開悟。便再扶起孔門之眞風。決無難矣。

周惇頤。自靜入道者也。程顥。自事入道者也。朱熹。自窮理入道者也。陸九淵。自疑情入道者也。王守仁。自研究入道者也。雖各自有所見。惜儒門無無量之法財。只固滯一旦之見處。無由用磨煉之術。故有

到有不到也。誰知吾門墻中至向上。有希有之法財妙密之伎倆哉。是以。僅食吾園椹。不知好音。動成反噬之說者。往々有之。可憐愍哉。大智見人一出。則如明鏡高擡權衡正懸。知見之娟媛。不可逃矣。識力之輕重。自難欺焉。

吾朝有皇極之道。是　天祖神明之大道。而王者之正教也。其授受之悠久也。神孫一統。不交他姓。唯邃古鴻荒之世。年紀邈遠。且措不論。自　神武天皇繼述。以還。雖年代近三千。未嘗有一人敢簒奪天位紊亂神系者。　皇家之威德巍巍焉。是所以吾　王道特絕乎萬國也。抑　皇孫之君臨四海也。以　天祖心爲叡慮。天道也。地道也。人道也。貫三才而一之。權衡中正。而統御天下。敬事　天祖天神。以保安萬民。謂之皇極之道也。

和訓 竊に意ふ、古先聖王、人の此境に造詣するを審察し、一言以て道統を授け、生民を化育せしむ。允に其中を執り、惟精惟一、道心常に存する等是なり、之を外にして聖學あること莫し。孔子聖學を創建し、以て儒門を立て、道統を曾顏に傳へ、以て孟軻に至る、其旨此に歸す。是れ固より誑がざるの說なり。孔子復起つとも、必ず吾が言を易へず。伏して惟みれば高見正識の士、此書を熟覽して、余が鄙言を察し言を忘れて道に契はしめ、果して能く佛道と儒道と、並び用ひて悖らざるを知らん。然る後此篇に依つて大に開悟あり、便ち再び孔門の眞風を扶起すること決して難きこと無し。

周惇頤は靜より道に入る者なり、程顥は事より道に入る者なり、朱起は窮理より道に入る者なり、陸九淵は疑情より道に入る者なり、王守仁は研究より道に入る者なり。各自の見る所有りと雖も、惜むらくは儒門無量の法財無し、只一旦の見處に固滯して、磨煉の術を用ふるに由なし、故に到有り不到あり。誰か吾が門墻中、向上に至り希有の法財、妙密の伎倆あるを知らんや。是を以て僅に吾が園の椹を食うて好音を知らず、動もすれば反噬の說を成す者、往々これあり、憐愍すべき哉。大智見の人一たび出づれば則ち明鏡高く擡げ、權衡正しく懸るが如く、智見の娟媛逃るべからず、識力の輕重自ら欺き難し。

吾朝皇極の道あり、是れ　天祖神明の大道にして、王者の正教なり。其授受の悠久なるや、神孫一統、他性を交へず、唯邃古鴻荒の世、年紀邈遠且らく措いて論ぜず。神武天皇、繼述より以還、年代三千に近しと雖も、未だ嘗て一人も敢て天位を簒奪し、神系を紊亂する者あらず　皇家の威德巍々焉たり、是れ吾が　王道の萬國に特絕する所以なり。抑も　皇孫の四海に君臨するや　天祖の心を以

て叡慮と爲し給ふ。天道や地道や人道や、三才を貫いて之を一にす、中正を權衡して、天下を統御し、天祖天神に敬事し以て萬民を保安す、之を皇極の道と謂ふ。

【講話】此の文は第九段目で、古の先王の言葉を擧げて、初めに言うた所を一々證據立る樣な有樣「竊に意ふに古先聖王人の此境に造詣するを審察し」支那で古先聖王と言へば、堯舜禹湯文武周公、或る場合には孔子をも加へるのであります。それ等の聖王方が大抵天下を讓るのと、此の道統を授けるのとは一つで、昔は政事も宗教も亦教育も殆と同じ樣に傳へて來た。其傳へると云つても此心に屬する、即ち其人か聖賢の境に至つたといふ所を見て、「一言以て道統を授け」此の道統を授けるのに、多くの言葉は用ひない、只一言半句て道統を授受するのである、「生民を化育せしむ」一般生民を治めしむるといふ有樣て、一寸其例を擧げるならば、「允に其中を執れ」たつたこれ丈けて、これは堯帝が舜帝に道統を傳へられた即ち天下を讓られた時の言葉で、これは『書經』の言葉でありますけれども『論語』にもこれは出て居る。精しく曰ふと、「堯曰く咨爾ぢ舜、天の曆數爾ぢが躬に在り、允に其中を執れ、四海困窮せば、天祿永く終へん」斯ういふ樣な言葉が『論語』には加へてある。允に其中を執れといふ、唯これ丈けの言葉を以て道を傳へた、それが舜帝が、夏の禹王に天下を讓る時には、又言葉が加はつた、「人心惟危く、道心惟微惟精惟一、允に其中を執れ」斯ういふ言葉になつて居る。そんな鹽梅で、言葉から言ふと、誠に單簡な明瞭なもので、「惟精惟一道心常に存す等是也」斯樣な譯で「之を外にして聖學あること莫し」此の道統を傳へて來たといふことを取除いて、別に聖學といふものがある譯でない、「孔子聖學を創建し以て儒門を立つ、道統を曾顏に傳へ、以て孟軻に至る、其旨此に歸す」古先聖王は斯の如くにして傳へて來たものを之を孔子の世に至つて、始めて聖學といふ。一つの稍々組織した所のものを創建して、さうして儒門といふものが出來た、さうして道統を曾子並に顏回に傳へた、顏回は蚤世したから殆と曾子一人に傳へた。曾子から孔伋、それから子思、孟子と、斯ういふ樣に傳はつた、其旨は之に外ならぬ、「是れ固より誑ざるの說也」誑ざるの說である、「孔子復起つとも必ず吾言を易へず」孔子が今再び此處に現はれ出た所がこれを易へられまい、間違ひはないこれが第九段目の結びてある。それから第十段目に至つて、今迄の事を結ぶので、「伏て惟みれば高見正識の士」此處は敢て辯を附ける迄もないことて、高見正識の士ならば、「此書を熟覽して」此の『禪海一瀾』を熟覽して、「余が鄙言を察し言を忘れて道に契はしめ」此の書物に依て言うた言葉といふものは入れ物てあります入れ物を忘れて中に這入つて居る物計りを取て與れたならば、「果して能く佛道と儒道と竝び用ひて悖らざるを知らん」佛道に於て說く所の意味も、儒道に於て說く所の意味も決して悖つて居らぬ、相並びて助けて行くものてあるといふことを知るてあらう、「然る後に此篇に依て大に開悟するあらば」更に進んて一つ自分の心に開悟することがあつたならば、「便ち再び孔門の眞風を扶起すること難きこと決して無し」孔門の眞風が墜ちて土の如くなつて居るが、其孔門の眞風を再び扶起

することは、決して難きことではない、これで此の十段を結んだ。

又段を改めて、「周惇頤は靜より道に入る者也」周惇頤のことは初めにも言うたが、又後にも時々出てくるが、濂溪先生字は茂叔といふ人で、其傳記は宋史四百二十七列傳に委しく出て居る、此人は學問を龍圖閣の學士鄭向といふ人に受けたが、師に依らず默して道體に契ふと言つて自悟の人だ。それ故に朱子は周子の學は由る所を知らずと言つて居る又古人曰く周氏は無欲純一を宗とす或は云く濂溪主靜の說は畢竟禪學なりと故に靜より道に入ると先師は云はれた。「程顥は事より道に入る者也」程顥即ち明道先生は持敬の說を主張した所謂內直所謂主一、所謂戒愼恭懼皆謂二之敬一視聽言動行住坐臥茶裡飯裡守二主心一則自然不レ加二安排一而心身肅然表裡如レ一といふことを敎へた、さうして之を實行さした。それ故に先師は程顥は事相から道に入つたと云はれた。朱起はどうかと言へば、「朱起は窮理より道に入る者也」朱起の言うたことは色々あるが、曰く無極而大極是無形之中有二極至之理一と云のが朱子の持論である、それ故に窮理から道に入つた。「陸九淵は疑情より道に入る者也」陸九淵卽ち陸象山先生の學風は、心を主として大極を標せず別に理氣を論ぜずといふのが陸九淵の學風である。即ち心とは何ぞやと疑つて道に這入つたのである、王守仁卽ち王陽明先生はどうかと言へば、「王守仁は研究より道に入る者也、」陽明先生は初め朱子の格物究理の學を究めたが其の煩に苦んで竟に老佛の學を究はめた。陽明致良知の三字は實に萬死一生の中より研究體悟し來つたのである、夫故に陽明の學問は、只疊の上の推論とは違う、實地の學問を試みたのである、さういふ樣な鹽梅だから、王守仁は研究より道に入つた者である、「各自の見る所有りと雖も」斯ういふ風に各々特色がある、梅は梅の特色があり櫻は櫻の特色があるが如く學者も各〻特色を備へて居つて道に入つた動機は皆違が、「惜むらくは、儒門無量の法財無し」初めは斯の如くにして道へ這入つたけれども、儒敎の方では、無量の法財に乏しいのである。そこに至ると色々實例を擧げぬと分りませぬが、佛敎の如く法財が豐富でない。佛敎の中でも禪抔は、一知半解を得たからと言つて行ける筈でない。今白隱門下でも一旦豁然貫通の境界を經て其から法身、機關、言詮、難透、難解、五位、十重禁、向上抔と言つて種々無量の法財が積んである、それを一々透過せねばならぬ。儒敎には其樣な法財がないから、「只一旦の見處に固滯し、磨煉の術を用ふるに由なし」各々皆一旦の見處はあるが、それに滯つて居るが爲に遂に煉磨の術を用ふることが出來ない、誠に惜むべきである。「故に到あり不到あり」今擧げた人でも、大に到つた者もあり到らぬ者もある、「誰か吾が門墻中向上に至り希有の法財妙密の伎倆あるを知らん」誰も吾が門墻の中に向上に至る所の希有の法財、妙密の伎倆があることを知らない、「是を以て僅に吾が園の椹を食うて好音を知らず」椹は桑の實のことで『詩經』衞風氓篇に、「桑之未レ落其葉沃若、于嗟鳩兮無レ食二桑葚一」といふ言葉がある。文字はそれから出て來た『寒山詩』にも魂兮飯去來、食二吾家園葚一と出て居るが、出處は『詩經』から出た。吾が園の椹を食つたけれども、少し嘗めたが、本當の味は分らぬ、「動もす

れば反噬の說を成す者往々これあり、憐愍す可き哉」就中朱子の如きはさうである、少しは禪に入て見たが本當の好音を知らぬから、反噬の說をなして餌犬が主人の手を噬む樣なことを言つて居る、其他さういふ者が往々あるのは憐む可きことである、「大智見の人一たび出づれば則ち明鏡高く擡げ、權衡正しく懸かるが如く」然るに若し大智見の人が玆に現はれたとするならば、例へば明鏡の高く擡げるが如く、權衡を正しく懸けて居る樣で、其人の學問の知見のうるはしきか、見憎きかは、「知見の娟媸逃る可らず」逃ることは出來ない、「識力の輕重自ら欺き難し」又當人の識力の輕いか重いかは欺くことは出來ない。斯ういふ有樣それ故に今擧げた人の中にも、朱子抔はまだ不到の所が大にあるといふ意味を含んで居る。

「吾朝皇極の道あり」、今迄ズッと儒敎の事から述べて來たが、始めて神道の事を此處で言ふので、吾が日本に於ては皇極の道がある。皇極といふ文字は矢張り儒書から出て居る。例を擧れば『書經』の洪範の九疇の中第五に出て居る。曰建ニ用皇極ニと、其註に皇極とは、君の極を建る所以也。人君天下を治むるの法、是れ誰か之に加ふるあらんやとある。又其疏に人君は民の主たり、大に自ら其有中の道を立つとある。朱子曰く蓋し皇は君の稱なり、極は至極の義、標準の名、常に物の中央にありて四外之を望みて以て正を取る者なりと、又集傳には斯うも言つてある。言うは人、君當に人倫の至を盡すべし。父子を語るときは其親を極はむ、而して天下の父子たる者、是に於て則を取る。君臣を語るときは其義を極はむ、而して天下の君臣たる者に於て則を取る。極は福の本、福は極の效、極の建つ所は福の集る所なり。人君福を上に集む。其身を厚うするに非ず、其福を敷いて、以て庶民に與へ、人々をして觀て感じて化せしむ、所謂敷錫なり、斯ういふ風に文字は解釋して居る。今吾が日本國には、初めより皇極の道といふものが、ちやんと定まつて居る。「是れ天祖神明の大道にして王者の正敎也」、天祖は、天照大神を言ふことは言ふ迄もない、天祖を初めとして其他神明の大道て、さうして王者、王者と言へば、我國では神武天皇から算へて宜しい。天祖神明の大道で、王者の正敎てある。「其の授受の悠久なるや神孫一統、他姓を交へず」、これが各國と大に異つて居る國體てあつて、苟も吾帝國臣民たる者は之を是と言ひ非と言うて論議すべき限でない。縱令理屈は何でも、此正氣て以て國が出來た國體は是に於て確として定まつて居る、神孫一統して、他姓を交へない。「唯邃古鴻荒の世年紀邈遠」、天神七代とか、地神五代とかいふことが、古典には書いてあるが、何分神世のことは、鴻荒の世て、鴻荒といふのは物の姿の未だ分れざることを言ふので、其時代のことは茫莫として分らぬから、「且らく措いて論ぜず」、論じない、「神武天皇繼述より以還」、神武天皇が道統を繼述されて以來は「年代三千に近しと雖も」、一口に三千年と言ひますが、委しく言ふと、二千六百年程になります。先づ年代は三千年に垂んとして居るが、「未だ嘗て一人も敢て天位を簒奪し、神系を紊亂する者あらず」、これは委しく歷史を見ると、中には不軌を企つた者も多少ある、絕無とは言はれないが、それ等の非望

を遂げた者はない。さういふ者が偶々現はれ樣としても皆亡びて仕舞つた。「皇家の威德巍巍焉たり」獨り萬國に卓絕して居る。「是れ吾が王道の萬國に特絕する所以也」、兎に角これあるが爲に日本は今日がある。今日のみならず此國體は千世萬世を貫かねばならぬ。若し此獨立の觀念が國民になくなつて仕舞つた時は、日本の生命は殆ど亡ぶる時代であらう。

此處で一段を切て、「抑も皇孫の四海に君臨するや天祖の心を以て叡慮と爲し給ふ」、是等も委しく言ふと限がありませんが、例へば『日本書紀』に依て見ると、天照大神が手づから寶鏡を持して天忍穗耳尊に授けられた。其時に斯ういふ詔を賜つた。吾兒視ニ此寶鏡一當猶レ視吾、可ニ與同床共殿以爲ニ齋鏡一と斯ういふお言葉がある。それから今度皇孫瓊々杵尊に勅して仰せられたお言葉は、これは我々は誰でも知て居らなければならぬ言葉である。「葦原の千五百秋の瑞穗の國は是れ我が子孫王たる可きの地也、宜しく汝皇孫就て治む可し、行け寶祚の隆なることは當に天壤と窮り無かるべし」、これが國體の淵源です。これは我が國民としては須臾も忘るゝことが出來ない言葉なるのみならず、此二つの神訓の初めのお言葉は、即ち父子の親を厚うし、さうして祭祠の義を重んぜられたのである。後の皇孫に仰せられたお言葉は、即ち建國の大本を固ため、君臣の大義を定められたのであります。是が吾天祖四海を統御し玉ふ中極の大道であつて、之を神明の道とも皇極の道とも云ふのである。『伊勢古今名所集』に凡そ神道は即ち王道なり、是故に聖天子は天照大神の御心を以て叡慮とし中極の道を立て天下を統御し玉ふとある、實に然うである、夫であるから我が皇室は表面から言へば君であつて、それを內容から眺めると親であるのだから、彼の外國の歐米は勿論支那の例も朝鮮の例も、決して日本へは適用することは出來ないと言つて宜い。『道や天道や地道や人三才を貫いて之を一にす、中正を權衡して天下を統御し、天祖天神に敬事し以て萬民を保安す、之を皇極の道と謂ふ也』。斯ういふ鹽梅で、天道地道人道と、三才を分けたので、これも矢張り文字は大に據る所があつて、『書經』から矢張り來て居る。『書經』の洪範九疇の中に四の五紀と云つて一に歲と曰ひ、二に月と曰ひ、三に日と曰ひ、四に星辰と曰ひ、五に曆數と曰ふ。註に歲は四時を序ず、月は晦朔を定む、日は躔度を正す、星は經星緯星なり、辰は月日會する所の十二次なり。疏に曆數は占步の法、藏、月、日、星、辰を紀する所所なり。經星は天に貼して動かす、凡そ內官外官二十八の宿みな是なり、緯星は天に麗て行く杼の帛を緯するか如し。水火木金土の五星是なり。詰り天道といふ文字の起りは此處から來て居る。それから地道といふのは矢張り九疇の中に三に八政といふことがあつて、一に食、二に貨、三に祀、四に司空、五に司從、六に司冠、七に賓、八に師、斯ういふ工合に分けた。註に食貨は生を養ふ所以なり。祀は本に報ゆる所以なり、司空は土を掌どり、司從は敎を掌どり、司冠は禁を掌どり、賓は諸侯遠人を禮す往來交際する所以なり、師は殘を除き暴を禁するなり、斯ういふ鹽梅に八通りの政があるこれが地道である。それから人道といふことも矢張り九疇の中二に、五事といふことがあ

る。一に貌、二言、三に視、四に聽、五に思、斯う五つに分けてある。其註を見ると、貌は恭儉ならんことを欲し、言は善順ならんことを欲し、視は明ならんことを欲し、聽は聰ならんことを欲し、思は叡ならんことを欲す、斯ういふ工合に分けてある。これが天道、地道、人道の據る所であります。此の天道、地道、人道三才一致、さうして始めて中正といふ。此の中正の大道といふものを權衡して、それを手本にして、天下を統御し、さうして上は天祖天神に敬事し、下は萬民を保守する。これが取も直さず我が日本帝國の皇極の道といふものであると、先師洪川和尚は解釋せられた。斯ういふことはまだ〳〵委しく言はぬと意味が明かならぬ場合もありますが、今回はこれ位なことにして置いて次に移らうと思ひます。

第二十講　緒言（其八）

以來聖子神孫歷々經綸其天業。以迨今上天皇。可謂盛矣。若夫天道不中正則日月星辰不明。風雨霜雪不時。五行錯繆。萬物不生。地道不中正則山嶽丘陵于崩。河水溪流于溢。地脈騫裂。百實不成。人道不中正則性情相亂。內作狂妄。外作禍害。蓋皇極也者。三才固有中正之大理也。故　天皇失皇極之道則天地之變從之。惟吾天祖以天人合一之德。先生民而得皇極之道。照臨下土。以治天職。竟授天位皇孫。然後傳之悠久。即所以有寶祚齋鏡之垂訓。以明確君臣之大義父子之至恩于後世也。是吾神國。皇家一系。萬古不易之大基礎矣。詩曰。淑人君子正是國人。正是國人。胡不萬年。其斯之謂與。降而迄人皇三十世。其中間。禮樂未興。文物不明。綱政不振。或有背叛。而皇極之道漸萎爾。當此時。有皇子厩戸者出。生而能言。既長聰敏。有叡智。達諸學。及壯。輔佐推古天皇。攝大政。八人奏語。十人訟言。一時聽。而不失聽。故曰豐聰太子。始定冠位。製服飾。興禮樂。撰憲法。大隆敬神之道。扶之以仁義之教。潤之以慈善之法。專施文明之化。於是。皇極之道再盛矣。太子曰。神也教人之始。儒也教人之中。佛也教人之終。三道互相扶。成乎一个道德之大樹。又曰。政者非學不至。學之本神儒佛也。然好一者。各惡其二。而嫉其存。欲其亡。我所知以爲理。不知以爲非。故操政者。宜通三不好一矣。若好一則枉政。枉政

則王道廢云云。先賢曰。厩戸之功。可謂制作之聖。謚曰聖德。亦非虛名也。鎌足內府公。欽慕太子高躅。竝用三道。專恢張皇極之道。遂勦絕兇逆。以置君於泰山之安矣。其盛德偉勳。布在方策。愚固不喜老教。常以三道鼎立而論者。蓋基于此。菅相公曰。凡國學之所要。自非有和魂漢才。不能闚其閫奧矣。愚亦謂。吾　皇國男子大丈夫者。先堅立火不能燒水不能溺底之倭魂眞柱於肚內。加之以漢籍之才。然後更用力見性之術。以一旦豁然貫通。則其於權衡乎皇極之道也。亦無間然矣。

和訓　以來聖子神孫、歷々其天業を經綸し、以て今上天皇に迨る、盛なりと謂つ可し。若し夫れ天道中正ならざれば則ち日月星辰明かならず。風雨霜雪時ならず、五行錯繆萬物生ぜず、地道中正ならざれば則ち山嶽丘陵于に崩れ、河水溪流、于に溢れ、地脈騫裂し、百實成らず。人道中正ならざるときは則ち性情相亂れ、內狂妄を作し、外禍害を作す、蓋し皇極なる者は、三才固有中正の大理なり。故に天皇、皇極の道を失すれば則ち天地の變之に從ふ。惟吾が天祖天人合一の德を以て、生民に先だち

て皇極の道を得、下士に照臨して以て天職を治め、竟に天位を皇孫に授け、然る後之を悠久に傳ふ。即ち寶祚齋鏡の垂訓あつて、以て君臣の大義、父子の至恩を後世に明確にする所以也。是れ吾が神國皇家一系萬古不易の大基礎なり。詩に曰く淑人君子是の國人を正し、是の國人を正す胡ぞ萬年ならざらんと、其れ斯れの謂か。降て人皇三十世に迨る其中間禮樂未だ興らず、文物明かならず、政綱振はず、或は背判ありて皇極の道漸く萎爾す。此時に當りて、皇子厩戸なる者出づるあり、生れて能く言ひ、既に長じて聰敏叡智ありて諸學に達す。壯なるに及んで、推古天皇を輔佐して大政を攝す、八人の奏語、十人の訟言、一時に聽いて聽を失はず、故に豊聰太子といふ。始めて冠位を定め、服飾を製し、禮樂を起し、憲法を撰び大に敬神の道を隆にし、之を扶くるに、仁義の教を以てし、之を潤すに慈善の法を以てし、專ら文明の化を施す。之に於て皇極の道、再び盛なり。太子曰く、神は人の始を敎へ、儒は人の中を敎へ、佛は人の終を敎ふ、三道互に相ひ扶けて、一个道德の大樹を成ずと。又曰く、政は學に非れば至らず、學の本は神儒佛なり。然るに一を好む者は、各其二を惡んで其存を嫉み、其亡を欲す、我が知る所、以て理と爲し知らざるを以て非となす。故に政を操る者は宜しく三に通じて、一を好まざるべし、若し一を好めば則ち政を枉ぐ、政を枉ぐれば則ち王道廢ると云云。先賢曰く、厩戸の功、制作の聖と謂ふ可し、謚して聖德といふ、亦虛名に非るなり。鎌足內府公、太子の高躅を欽慕し、三道を竝用して、專ら皇極の道を恢張し、遂に兇逆を勦絕し以て君を泰山の安き

に置く、其盛德偉勳布いて方策にあり。愚固より老敎を喜ばず、常に三道を以て鼎立して論ずる者、蓋し此に基す。蓍相公曰く、凡そ國家の要する所、和魂漢才に非るよりは、其閫奥を闚ふ能はずと。愚も亦謂ふ、吾が皇國の男子大丈夫たる者は、先づ火も燒く能はず、水も溺らす能はざる底の倭魂の眞柱を肚内に堅立し、之に加ふるに漢籍の才を以てす。然して後更に力を見性の術に用ひ、以て一旦豁然貫通すれば、則ち其皇極の道を權衡するに於て、亦問然することなし。

【講話】以來聖子神孫、歷々其の天業を經綸し、以て今上天皇に迨る、盛なりと謂つ可し。前回に直く引き續きて、我が國は神孫より以後神武天皇の人皇に至り、歷代の聖天子は、何れも其の神勅によりてその建極に隨つて天下を治め給ひし故に、いよ〳〵益々榮え來りて國家の隆盛なること天壤と窮なからんの實を現はして居る、「若夫れ天道中正ならざるときは日月星辰明かならず」先づ今の學問の上から見るならば、我々人間の道德と、或は天文若くは地理上のことは、何の關係も無い樣てあるてすけれども、昔の時代に在ては、政敎一致で、政事も宗敎も學問も皆一致で、學問が即ち道德なり、政治が直に宗敎を兼て居るといふ樣な有樣てある。さういふ立場から眺めて見ると、今茲に申す事柄も大いに意味があるので、今日のやうに只科學と言つて、一科一科の學問から眺めて見ると、斯ういふことは殆ど言ふに足りないやうに思はれるのですけれども、さう一概に言ふことは出來ぬのてあります。それて天道中正ならざるときに於ては、日月星辰も明かならす、これは讀んで文字の通り、「風雨霜雪時ならず、五行錯繆」木火土金水の五行も錯繆して紊れて仕舞つて、「萬物生ぜず」斯ういふ有樣。それから、「地道中正ならざれば則ち、山嶽丘陵于に崩れ、河水溪流于に溢る」山嶽も丘陵も悉く崩れ、河水も溪流も皆溢れて、「地脈窮裂す」或は大地震があつたり、或は大噴火があつて、「百實成らず」一切の五穀も稔らぬ、「人道中正ならざるときは則ち性情相亂れ」此の人道即ち倫理の道を失ふ時に於ては、性と情と相亂れて、「內狂妄を作し外禍害を作す」人間の精神が極めて狂妄になつて仕舞つて、外かには色々樣々の禍を釀すといふ樣になる、「蓋し皇極也矣」初めから言うて來た此の皇極の大道といふのは、「三才固有中正の大理也」天地人三才の固有中正の大理てある。所謂天地の大經にして萬世不易の倫理である、「故に天皇皇極の道を失ふ時は、天地の變之に從ふ」今日は色々の政體に分れて居ますが、殆と昔に在ては、何れの國でも皆君主專制の時代である。君主が國家國民を代表して居る、故に天皇が若し皇極の道を失へば天地の變が之に從ふたのてある。「惟吾が天祖天人合一の德を以て生民に先だちて皇極の道を得」然るに我が日本の天祖天照大神は、天人合一の德を以て、一切の萬民に先だつて、さうして皇極の道を得て、「下土を照臨して以て天職を治む」これは前段に於て委しいことを一通り言うた積りでありますから此處ては言ひませぬ。「竟に天位を皇孫に授け」皇孫瓊々杵尊に天位を授けてくれた、其時の敕も確か前回に申した。「然る後之を悠久に傳ふ、則ち寶祚齋鏡の垂訓があつて、是に於て日本以て君臣の大義父子の至恩を後世に明確にする所以也」此の寶祚齋鏡の垂訓があつて、

の君臣の大義名分に定まつて居る同時に父子の至恩を表したものである、「是れ吾が神國、皇家一系萬古不易の大基礎なり矣」之は世界萬國に卓絶して居る所で、萬古不易の大基礎である。「詩に曰く淑人君子是の國人を正す、是の國人を正す胡ぞ萬年ならざらん」これは『詩經』の國風の鳲鳩の篇にあります。淑人君子は、斯ういふ場合には一國の國王を指して言ふ、淑人君子是の國人を正す、是の國人を正す、胡ぞ萬年ならざらん、其實祚の盛なることは萬々年であると、斯ういふ風に『詩經』に言うて居る。「其れ斯れの謂歟」これを言うたのであらう。「降て人皇三十世に至る、其中間禮樂未だ興らず文物明かならず。」此處で文章の一段が切れて居る、初めから言うと三段目で、三段目に至つて、皇極の道が少しく衰へて又再び盛になつたといふことをこゝに述べるのであります。人皇三十代は、即ち敏達天皇になるのであります。其中間禮樂未だ興らず、文物明かならず、綱政振はず。此の三十世の間といふものは、立派な禮法も或は音樂の如きも、今日から見て殆ど則る可きものが少い、從て文物憲章といふものが今日の如く明かでなかつた。さうして政の大綱、即ち治國の紀綱たる所の政も振はなかつた。それが爲に、「或は背叛あり」叛逆をする者があつて、「皇極の道漸く萎爾す」これは丁度崇神天皇から應神天皇仁德天皇あたり迄は盛であつたが？、反正天皇から萎靡して仕舞つた。殊に武烈天皇に至つては、皇極の大道が餘程萎靡不振の狀態になつた、これは歴史が證明する所である。其間には反逆を企つた者がある、「此時に當つて皇子厩戸なる者出るある」此時といふのは、丁度欽明天皇の時分に當つて、皇子厩戸なる者が出た。これは用明天皇様の第一の王子即ち聖德太子のことであります。此の聖德太子の傳も近頃段々に出たものもありますが、古い書物に書いてあるのを少し斗り擧げて見ますと。支那の『宋史』四百九十一卷に斯ういふ樣なことも書いてある。用明天皇に子あり、聖德太子といふ、年三歲にして十人の語を聞て同時に解す。七歲にして佛法を悟る、菩提寺に於て『勝蔓經』を講す、天花を雨ふらして讃す、此土隋の開皇中に當つて、使を遣はし、海に泛んで中國に至り『法華經』を求めしむ云々。斯ういふ樣なことが、向ふの宋史に迄現はれて居る。古い太子の傳には『聖皇本紀』並に『三朝傳』といふ樣な物がある。それから後に出來たものも澤山あります。兎に角用明天皇第一の王子で、御母は穴穗部の間人皇女と申上げた。欽明天皇の三十二年正月朔日の夜に、皇女即ち用明帝の皇后が、妙な夢を見られた。金色の身體をした坊さんが、其皇后に斯ういふことを言うた願はくは后の腹に托せん。后は妙なことを言はれるが、あなたは誰かと問うたら、我れは是れ救世の菩薩、家は西方にあり、斯ういふことを言つた。后曰く、妾が腹は垢穢なり、あなたの樣な聖人のお這入りになる所ではない。曰く我れは穢を厭はず只救濟を欲すと言ひ終つて、躍つて口中に入る。覺めて後物を呑むが如し、妊まれてから八月目に胎中にて物言ふ聲外に聞ゆ。十二箇月胎內に居られた。敏達天皇二年正月一日厩の側に於てお生れになつたが、此のお生れになる時分に赤黃の氣西より來つて、宮中の嬪御驚き抱きて殿に上ほす、四月にして乃ち言ひ、能く人の擧止を知る。軀體はなはだ香

ばしく懐抱の人奇覩衣を染めて數月滅せずと傳に記してある。これは一端丈け擧げたのでありますが澤山今言うた樣なことが書いてある。斯ういふことを近頃の歴史家は皆抹殺する方でありませう、單純なる世間の歴史家は抹殺しやうが少しく宗教眼を以て見ると、さういふことも等閑に附し去ることは出來ぬ。斯ういふ夢物語の中に、何か教へて居る所がある。それから推古天皇樣をお輔けになつて攝政の位に登り、前古未曾有の治績を揚げられました。後ち推古天皇の二十八年二月五日のことであります。太子、妃膳氏に語つて言はれるに、我れ震旦に在つて『法華』を持し、今日域の副貳となり、佛法を流傳し一乘を弘宣す、吾か能事了れり、久しく五濁に居るを樂まず、我今夕去らん、子伴ふべし。乃ち沐浴衣を新にし玉ふ、妃も亦然り、二人共寢に入り長逝す。太子年四十九、喪歛の夕、容貌生けるが如く、身體薫郁、兩屍輕きこと、只其衣の重さのみ、薨するの夕、天地變多し、王臣百姓、水醬口に入らず、天下父母を失ふが如く、哭泣の聲道路に盈つとある。之を一端丈け、書物から拔出したのでありますが、兎に角さういふ優れたお方であります。「生れて能く言ひ、既に長じて聰敏、叡智あり、諸學に達す一博士覺哿といふ人を迎へられて、經史を研究し、それから高麗の僧を招きて、佛教を習修し、有ゆる諸學に達した。「壯なるに及んで推古天皇を輔佐して大政を攝す」事蹟は歴史の通りである、「八の奏語、十人の訟言一時に聽いて聽を失はず」こゝらは文章の通りて宜しからう。「故に豐聰太子と曰ふ」或は俗に八耳の太子と申して居る。「始めて冠位を定め」推古帝の十一年に冠位を定むる、凡そ十二階、分つてそれを諸侯に賜はるといふ樣に、歴史に書いてある。「服飾を製し」服制もお拵へになつた。「禮樂を興し憲法を撰び」日本と外國と制度を折衷されて、禮を興し、樂を興された。それから憲法といふは、丁度推古天皇の十二年に、有名な十七憲法といふものを御制定になつた。「大に敬神の道を隆にし、之を扶くるに仁義の教を以てし、之を潤すに慈善の法を以てす」推古帝の十五年に詔があつて、神祇を祭祀することを奬勵する、其詔の略に、斯ういふことがある。「朕聞く皇祖天皇敦く神祇を禮し、周ねく山川を祀る、是を以て陰陽調和す、今朕が世に當つて、豈に祭祀を怠るべけんや云々。これは一寸一端であります、さうして之を扶くるに、仁義の教を以てした。仁義の教とは、いふまでもなく儒教で、之を潤すに慈善の法を以てす、慈善の法を言換れば、佛教といふ意味であります。「專ら文明の化を施す」さうして專ら文明の政化を布かれた、「是に於て皇極の道再び盛なり矣」再び盛になつた。これから第四段目であります、第四段目に至つて、此太子の說を此處に引いて述べた。「太子曰く神は人の始を教へ、儒は人の中を教へ、佛は人の終を教ふ」神儒佛道をちやんと鼎の三足の如くにして用ひられた。此の聖德太子の手腕といふものは、實に大なる調和力を具へてをる。神道は吾邦固有のも、實は其神道も神道らしく、稍々組織的のものに成つたのは、太子の力である。其外儒教にしても、佛教にしても、外來のものである。其外來のものを、日本の精神に同化させたいといふのは、それは聖德太子の大手腕大氣魄である。此公平無私のやり方で、各々分業的に其

仕事を配致せられた、神道は所謂神ながらて、人の始を敎へるものてある。儒敎は人の中間即ち一世の風敎を正すものてある。佛敎は人の終り、則ち安心立命を敎へる所のものである。「三道互に相扶け、一个道德の大樹を成す」一个道德の大樹、大樹は本幹てあります。こんな鹽梅にして、三道互に相扶けて、一个道德の大樹といふものを大成したいといふのてある。此處は實に聖德太子の、空前絶後世に、優れたる所であります。「又曰く」聖德太子のお言葉に、「政は學に非れば至らず、學の本は、神儒佛也」初めに一寸一言申しましたが、此時分は道德が即ち學問である、敎育と宗敎は、範圍を論ずれば、別か知らぬが、相隣つたものである。如何に世が進んでも、學問の本は、神なり儒なり佛なり、據る所が無くては、只忠と言つても、孝と言つても、意義の淺いものである。其忠なり孝なりの感情の、自然に因て起る所を見定めなければ、到底根本問題には觸れない。さういふことは一種の議論て今言ふ限りでない。此說が古い所でない、此時分の聖德太子の言はれたのが、本當の學問の眞意義を現はして居る。政は學に非れば至らず、學の本は神儒佛である。勿論此時代はこれ丈けの宗敎しかなかつた。「然るに一を好む者は各々其二を惡んで其存を嫉み其亡を欲す」これは人間のどうも淺ましい所で、何でも自分の氣に入つたものはいつ迄もあれかし、氣に入らぬものは亡くなれかしといふので「我が知る所以て理と爲し、知らざるを以て非と爲す」こんな鹽梅である、「故に政を操る者は」一般人民の人情といふものは、それ位淺墓なものであるから其上に立て政を操る所の者は、「宜しく三に通じて一を好まざるべし、若し一を好む時は政を枉く、政を枉れば則ち王道廢る」云々。これは皆太子樣のお言葉で、斯ういふ樣な鹽梅で、三道を奬勵されたそうである。これは十七憲法の意味を皆取て居る。「先賢曰く」これは太宰春臺の言つた道葉、「厩戸の功、制作の聖と謂ふ可し」制作の聖である と。成程此の程聖德太子に依て、有ゆることが、此處で出來上つた樣なものてあります。而も外國の良き事を持て來て、日本の精神てそれを嚙分けたといふ所が、最も良い所で、「諡して聖德と曰ふ、亦虛名に非る也」虛名でない。「鎌足內府公」これは後に至つて、皇極天皇の時代に、大臣が大に政權を弄して、私福を營み、王道が又地に墜ちるといふ樣な有樣で、それから三十八代の天子樣、即ち史家が中宗とも稱して居る所の、天智天皇樣、此の天智天皇樣を扶けて、あゝいふ立派な政治を爲されたのが、大織冠鎌足公である。其鎌足內府公が、「太子の高躅を欽慕し、三道を竝用す」聖德太子のやられたことを慕はれてさうして、三道の公平に採用して、「專ら皇極の道を恢張して、遂に兇逆を勦絶す」三十六代皇極天皇の時に、蘇我蝦夷が、入鹿と共に大に政を專にして、さうして皇孫たる所の山背王を弑して、大に不軌の振舞をやつたことがある。それを鎌足公が中大兄王子と一所に討滅されたさうして、「以て君を泰山の安きに置く、其の盛德偉勳布いて方策に在り」其盛德と言ひ、偉勳といふものは、委しく書物に出て居る。「愚固より老敎を喜ばず」先師は、老子敎を喜ばれぬ、といふのは老子敎は恬淡無爲、世の中を隱居して、仕舞つて、只虛とか玄々とかを樂しんで居るといふのてあるか

ら、今日の時世を經營するには、殆と沒交渉で、丁度我が佛敎の中の、二乘聲聞に類した敎であるから、先師は老敎を喜ばぬ。「常に三道を以て鼎立して論する者蓋し此に基す」老子敎の代りに、神道を取つて、夫れに儒と佛の二道を加へ鼎立させるのは蓋し之に本づいて居る。詰り大纓冠鎌足公が、三道を竝用したといふことに本づいてやつた。「菅相公曰く」菅原の道實公が斯ういふ格言を言はれて居る。「凡そ國學の要する所、和魂漢才あるに非るよりは、其の閫奧を闚ふ能はず」和魂漢才といふのは、精神は何處迄も日本的精神、併し其才を養ひ、智を磨くは、廣く之を外に待べしてある、此時分には重もに漢を本にして居つたから、斯う云うたので、今日は廣く門戸を洞開して、所謂開國進取、良きものは、世界各國のものを採て用ひる。漢才だけに止つて居らぬが、精神は何處迄も、我が國粹的でなければならぬ。所謂和魂漢才といふものがあるに非るよりは、其の閫奧、即ち奧深き皇極の大道は、伺うことが出來ぬと言はれた。「愚も亦謂ふ、吾が皇國の男子大丈夫たる者は、先づ火も燒く能はず水も溺らす能はざる底の倭魂眞柱を肚內に堅立し」即ち日本的精神の大國柱を、吾が肚の中に堅立して、さうして、「之に加ふるに漢籍の才を以てす」漢籍の才を以てする。今では、漢籍に止つて居らぬ、廣い各國の智識を持て來て、「然して後更に力を見性の術に用ひ」頭を拵へるには、學問、腹を拵へるには見性の術、即ち鬼に鐵棒を提げさせて、「以て一道豁然貫通すれば即ち」これはといふ徹底の境涯を得た場合には、「其の皇極の道を權衡するに於て」皇極の道を取扱ふ上に於て、「亦閒然することなし」申分はないのであります。

第二十一講　緒言　（其九）

大法。獨絕而曠邈。妙道。不變而精微。槪之曰禪。可以理尋。難以事詰。矣。老子曰。上士聞道。勤而行之。中士聞道。如存如亡。下士聞道。大笑之。孔子曰。中人以上。可以語上也。中人以下。不可以語上也。達磨大士曰。諸佛無上妙道。曠劫難行能行。難忍能忍。豈以小德小智輕心慢心。欲冀眞乘。徒勞勤苦。嗚呼大道之難。三聖者言可徵也。故古來聖者之垂敎。皆自卑而上高。從淺以至深。要之莫不出于俾生民捨惡趣善去僞歸眞除苦就樂之切情矣。及其至也。妙萬物而爲言。能盡性命幽明之眞理。是以出處誠異。而指歸則同。

和訓　大法は獨絕にして曠邈、妙道は不變にして精微、之を槪して禪と曰ふ。理を以て尋ぬ可く事を以て詰り難し。老子曰く、上士は道を聞いて勤めて之を行ひ、中士は道を聞いて存するが如く、亡ずるが如し、下士は道を聞いて大に之を笑ふ。孔子曰く、中人以上は以て上を語るべく、中人以下は以

て上を語るべからずと。達磨大士曰く、諸佛無上の妙道は、曠劫に行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍ぶ、豈に小德小智、輕心慢心を以て、眞乘を冀はんと欲す、徒に勤苦を勞するのみ。嗚呼大道の難き三聖者の言、鑑すべきなり。故に古來聖者の敎を垂る、皆卑きよりして高きに上り、淺きよりして以て深きに至る。之を要するに、生民をして惡を捨てゝ善に趣き、僞を去て眞に歸し、苦を除いて樂に就かしむるの切情に出てざるは莫し。其至れるに及んでや、萬物に妙にして言を爲す、能く姓命幽明の眞理を盡す。是を以て出處誠に異にして指歸則ち同じ。

【講話】　大法は獨絕にして曠邈、妙法は不變にして精微、之を概して禪といふ。前段に於て、神儒佛三道互に相俟て、其大いなるを爲す譯を說いた。今端を改めて、大法は獨絕にして曠邈なりといふ。獨絕といふことに就て、少しく經文の言葉を擧げて見ると澤山ありますが、例へば獨絕といふ言葉の意味を『維摩經』には、斯う言うてある。「法は比ひあること無し、故に相待つこと無し。」即ち獨絕の意味で、それを肇法師は、註を加へて、「諸法は相待よりして生ず、猶ほ長短比んで形あるが如し」斯う云ふやうな鹽梅に、相待を解釋して居る。又「絕相二待」とは、謂はく、大機關を具し、渠をして直に了して成佛せしむ、是れ絕對の法なり、一善と一惡と、待對以て盡すにあらず、一決一切了なり」と、馬祖の水潦を接した如き例を見るがよろしい。其外經文の言葉を擧げれば限も無いが、獨絕といふ意味はさういふ意味で、十方法界唯だ獨りて、他に肩を比べる者の無い有樣、獨絕にして曠邈なり、曠い曠大、邈は渺邈、殆んど際限も無く廣くはるかなるをいふ。妙道とは大法と同じてある、名は違つて居るけれど、指す所は固より同一である。其妙道といふものは、どう云ふものかと言ふに、不變にして精微てある。不變とは圭峯禪師の言に、「一切諸法は、唯だ妄念に因りて差別あり若し心念を離るれば即ち一切境界の相なし、又曰く心性常に無念故に名けて不變と云ふ。六祖大師曰く、我此の法門從上以來先づ無念を立て、宗となし無相を體となし無住を本となす。無念とは念に於て無念なり、無相とは相に於て無相なり無住とは諸法の上に於て念々住せざれば無縛なり、是を以て無住を本となすなり。」つまり不變といふのは、無念の替名として置けば宜い。不變にして精微、誠に精靈微妙なる所のものてある。其の精靈微妙なる所の不變と、獨絕にして曠邈なる所の大法を概括して何と言ふならば、「之を禪と曰ふ。」禪とは梵語、具には禪那と曰ひ、此には正思惟と云ふ、畢竟直示單傳の意に外ならぬ。今其一つ二つの證據を擧げて見ると、初祖達磨大士の『血脈論』に性は即ち是れ心、心は即ち是れ佛、佛は即ち是れ道、道は即ち是れ禪、禪の一字は凡聖の測る所にあらず、直に本性を見る之を名けて禪となす、若し本性を見ずんば禪にあらず假令千經萬論を說得るも、若し本性を見ずんば唯だ是れ凡夫。又『禪說』に曰く、若し頓悟すれば自心本來淸淨、元と煩惱なく、無漏の智性本自から具足す、此心即佛、畢竟異なることなし、是の如く修するもの是れ最上乘の禪、亦如來淸淨禪と名づけ亦一行三昧と名づけ、亦眞如三昧と名く、此は是れ一切三昧の根本なり達磨門下展轉して相傳ふ是

れ此の禪なり云々。禪は到底眞參實修でなくては分かるものでない。又儒者の側で言うた禪の解釋も面白いのが澤山あるが、今は宋朝の有名な眞西山の言を一つ紹介しやう『續文章正宗』に載す曰く宋の曾文昭公（曾子開のこと）曰く、佛の道、名相文字を出て一言にして盡すべきものあり、禪と曰ふ。其說に以謂らく、直指人心見性成佛。學者心を以て心に傳ふ、必ずしも外に求めず、其術を操る甚だ約にして、其功を收むる甚だ速なり、他學の次第階級あるが如きにあらず云々。其他色々ありますけれども、最も適切な解釋の一二を今擧げて見たのであります。「理を以て尋ぬ可くして事を以て詰り難し」此處で理といふのは心といふ程の意味で、此處で事といふのは形といふ程の意味である。禪の眞意義に徹底しやうといふならば、形から這入らうとしては迚も入ることは出來ぬ。文字であるとか、言句であるとか、何等かの形から入らうとしては必ず分らぬ。初めから直覺的にズッと心から這入る、即ち理から這入つて行く、理を以て尋ぬ可く、事を以て詰り難し。これが先師洪川和尙の解釋だ。「老子曰く」此處へ老子と孔子とさうして達磨の三聖人の事を擧げて、證明をした。「上士は道を聞いて勤めて之を行ふ、中士は道を聞いて存するが如く亡するが如し、下士は道を聞いて大に之を笑ふ」是は中々面白い言葉であります、老子の所說には澤山面白いことがあるけれども、今其一を擧げて見ると「物あり混成して天地に先だつて生ず寂たり寥たり獨立して改まらず吾れ其名を知らず之を名けて道と云ふ强ひて之が爲に名けて大と云ふ」と先師洪川和尙は「我亦强ひて之を名けて妙と云ふ」と云はれた

扨て老子は斯ういふ立場から眺めて本文に引てある如く上士は道を聞て勤めて之を行ふと云はれた。勤るとは聞て直に信ずるのである。孔子の朝に道を聞て夕に死すとも可なりと云はれたも同じことぢや。中子は道を聞て存するが如く亡するが如して、一個的實の見處なく半信半疑の有樣である。下士は道を聞て大に之を笑ふ、笑ふのも尤もである井戸の蛙には大海は分からぬ。又曰く笑はずんば以て道とするに足らずと老子は仲々振つた剛いことを言うてをらるゝ、心ある人は是等の言葉を幾度か能く味つてみるが宜い、「孔子曰く」是は『論語』の雍也篇に出て居る、「中人以上は以て上を語る可き也、中人以下は以て上を語る可らざる也」此の上といふことは色々解釋があるのでありますが、詰り大道の替名として置いて宜い。古人の解釋に依ると、蔡虛齋曰く、上とは理の精深の處、性天一貫の如き是なり、斯ういふ解釋である。此上の字は「上中下」の上といふ樣な意味とは違ふ、それで孔子は、中人以上の者には、此大道を語ることが出來るけれども、中以下の人間に至つては、お話は出來ぬと、斯ういふ風に道を見て居られる。それから、「達磨大士曰く」我が禪の祖師たる達磨大士の言葉を擧げた、達磨大士の傳も何等かの序でに委しくお話をしたいと思ふが、今は略して、只一節丈けを擧げておく。『傳燈』初祖の章に「大士面壁終日、默然人之を測る莫し、之を壁觀婆羅門と言ふ」終日默坐して居るから樣子が分らぬので、時の人が壁觀婆羅門と申した。婆羅門といふことは、これは印度に於ては、國王よりも上に置いてある所の種姓で、詰り神樣と人間との仲介者で、一種の神權を持て居る

種族としてある。即ち婆羅門、刹帝利、毘遮、須陀といふ様な四つの階級がある。其の婆羅門である「時に神光なる者あり久しく伊洛に居つて博く群書を覽、善く玄理を談ず、毎に歎じて曰く、孔老の教は禮術風規莊易の書は未だ妙理を盡さず、近頃聞く達磨大士、少林に住止すと、至人遙ならず當さに玄境に詣るべし、即ち往いて晨夕參承す、師常に端坐面壁して誨勵を聞くこと莫し。何か教を聞かうと思つて參つたけれども、達磨大士は常に端坐面壁してをられて何も聞くことが出來ぬ、振返つても見ない。そこで「神光自ら思ひらくは、昔人の道を求むる骨を敲き髓を取り、血を刺し饑を濟ふ、古すら尚ほ斯の如し、我又何人ぞ。其年十二月九日の夜、天大に雪降る。神光堅く立つて動かず。夜の明るころおい、積雪膝を過ぐ、師憫んで問うて曰く、汝久しく雪中に立つて何事を求む。神光悲泣して曰く、惟願はくは和尚、慈悲甘露門を開いて、廣く群品を度し給へ、實に一字一言皆肺腑から出た所の言葉である。其時に達磨大士が言はれたことが、此本文に載せてある言葉である。「諸佛無上の妙道は曠劫に行し難きを能く行し難きを能く忍ぶ豈に小德小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲す徒に勤苦を勞するのみ」斯ういふことを始めて言うて下さつた。諸佛無上の妙道、佛敎では佛は一人ではない、三千の諸佛がある、其諸佛無上の妙道は、曠劫に精勤して、行し難きを能く行し、忍び難きを能く忍ぶのだ。豈に小德小智、輕心慢心を以て、僅か斗りの蠡貝の様な德を以て、滿足し、僅か斗り螢の光の様な智慧を以て誇りとし、さうして輕卒な心驕慢の心を以て眞乘を冀はんと欲するも、徒らに勤苦に勞す。眞乘といふことは世間では使はぬ言葉でありますが、佛敎では、總て道の事を乘物に喩へて居る。即ち佛の圓頓實大乘の法を指していつも眞乘と言ふ、即ち唯有一乘の法であります。其眞乘を冀はんとしても、徒に勤苦を勞するのみで、及びもないことである。斯ういふ工合に示された所が、其一言を聞いて神光が覺えず、利刀を拔いて自分の臂を斷て、達磨大士の前に差出して、熱烈なる求道の精神を丸る出しにした。そこで始めて達磨大士が其法器なることを知りて、續いて斯う言はれた、「諸佛最初道を求め法の爲に形を忘る、汝今臂を斷つて吾が前に求むるも亦可なることあり。」そこで神光が續いて言ふに「諸佛の法印得て聞く可きや」達磨大士の言はれるに、「諸佛の法印は人に從て得るに非ず」禪宗ではいつてもさういふ様な鹽梅で、人から貰う譯でも何でもない。所謂門より入るものは家珍にあらずぢや、斯う言はれたから、神光は「我心未だ安からず、乞ふ師安心し給へ」誠に深切な問であります。銘々顧みれば此通りであらう。スルト磨曰く「心を將ち來れ」眞に無造作な言ひ方で、丁度其處の土瓶を持て來いと言ふ様な安排にやられた。神光の曰く、「心を覓むるに了不可得なり」不可得とは、不可知、不可解抔と言うて、是は世間的に言へば、失望の如く解するが、失望所ではない、道の至極した所に至れば、畢竟不可得である。此不可得が徹底手に入ればモーぺたものぢやが、仲々是が吾物にならぬ。『金剛經』には過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得とある、今神光が心を覓むるに不可得なり、心を持て來いと仰つしやるが、何分自分の心

捕まへ様としても不可得てありますと斯う申したら、達磨大士が、「我汝が爲に安心し覓れり。」これは大に工夫を要するが、此達磨大士の接得の仕方は、痛處に一針を下した様なやりかたである。其時に汝が智慧可なりと言ふ意で、慧可といふ名を授けられた、二祖慧可大師はそれであります。さういふ鹽梅で、老子と言ひ、孔子と言ひ、達磨大士と言ひ、「嗚呼大道の難き、三聖者の言微す可き也」微は證也、證據立ることの意味である。「故に古來聖者の敎を垂る皆卑きよりて高きに上り淺きよりして以て深きに至る」皆大抵さうであります是は獨り釋迦牟尼如來斗りではない。古の聖人の敎の立て方は何でも卑い所から高い所、淺い所から深い所に至らしむるといふのが當り前で、佛樣が說法をされたのも矢張りさうであります、佛が最初鹿野苑に於て說法された時には、卑近の事から徐々として敎へられた。それが、阿含、方等般若法華と、梯子段を傳うて行く樣に、一段々々づゝ進んで參つた。小乘から大乘、俗諦より眞諦、世間門より出世間門といふ樣な有樣で、それであるから最初は五戒十善さういふ所からせり上げて、四諦十二因緣、乃至六度萬行と悟りを開かしめられたのであります。「之を要するに生民をして惡を捨てゝ善に趣き僞を去て眞に歸し苦を除いて樂に就かしむるの切情に出ざるは莫し」凡そ佛敎を三方面から眺めて見ると、一つは道德的方面から眺めることが出來る。道德的方面から眺めると、惡を捨て善に趣くといふのであります。それから僞を去て眞に歸するといふのが今時の言葉で言へば、哲學的方面で、苦を除き樂に就くといふのは、是れ純粹の宗敎的方面でありま

す。此三つの目的を達する爲に、佛は戒定慧の三學を立て、其機根の宜きに隨つて、四十九年三百餘會を重ねて、横說竪說せられたのである。「其の至れるに及んでや萬物に妙にして言を爲す」文字言句で何とも言ひ難い所を妙と言ふ。さうして、「能く姓命幽明の眞理を盡す」先づ幽と明と二つに分けると、幽は未來、明は現在。未來と現在を一貫して居る眞理、我々の性命即ち萬物の根本を貫く所の眞理を盡して居る、「是を以て出處誠に異にして指歸は則ち同じ」と斯う結んだ。老子の言ふ所も、孔子の言ふ所も、達磨の言ふ所も、出處といふは、施設といふ字に變へて見ても宜い。即ち其やり方は色々違つて居るが、歸着する所は皆同じものだ。初めから始終其意味の事を先師が繰返し、繰返し言うて居られますが、神儒佛道、諸流派も玄に至つては各々皆眞理てふ一大海に歸するのである。此處て文章は一段附いて居る。これから次第に神儒佛の三道が互に相扶け合つて、一つの眞理を圓かにするといふことを說くのであります。

第二十二講　緒言（其十）

蓋老子之垂敎也。屬周道陵夷之運。民俗浮僞。而莫之從也。孔子出。其間。修詩書。定禮樂。唱三綱五常之敎。以捄世弊。不幸忽及戰國。橫議盛。覇術行。未嘗遑言及玄妙之典。當其澆季難捄。釋敎東流。顯說

善惡報應。而警戒生民。推而廣之以性命之理。和而敎之以慈善之行。大化益天下焉。迨其根機漸熟。而后達磨大士西來。始唱敎外別傳之宗旨。以諸洩諸佛頂上之祕機焉。然則吾釋敎之翊王度。補治道。而有功天下後世。豈小補云乎哉。當時若無吾敎之補翊。便仁孝忠信之敎。或幾乎熄矣。由是觀之。佛敎之與儒敎。發致施設雖殊。其所期者同然耳。某嘗禪餘。遊目乎四書六經中。間有忘踏舞者。故拔鈔往々一二章。聊發管見之祕。以充學者公案。欲使天下後世知孔子立敎中有禪。禪中有名敎之至理也。熟按。孔子爲釋子地。釋子爲孔子地。兩敎互影響。以發輝大道。既昭昭然矣。看者審之。

和訓　蓋し老子の敎を垂るゝや、周道陵夷の運に屬し、民俗浮僞にして、之に從ふ莫し。孔子其の間に出て、詩書を修め、禮樂を定め、三綱五常の敎を唱ひ、以て世弊を救ふ。不幸にして、忽ち戰國に及び、橫議盛にして、覇術行はれ、未だ嘗て玄妙の典を言及するに遑あらず。其澆季救ひ難きに當りて、釋敎東流し、善惡報應を顯說して生民を警戒し、推して之を廣むるに、性命の理を以てす、和して之を敎ゆるに慈善の行を以てし、大に天下を化益す。其の根機漸く熟するに迨んで、而して後達磨大士西來し始て敎外別傳の宗旨を唱ひ、以て諸佛頂上の祕機を洩す。然れば則ち吾が釋敎の王度を翊け、治道を補ひ、天下後世に功ある、豈小補と云はんや。當時若し吾が敎の補翊無く、便ち仁孝忠信の敎、或は熄むに幾かあらん。是に由りて之を觀るに、佛敎の儒敎と發致施設殊なりと雖も、其期する所の者同然のみ。某嘗て禪餘、目を四書六經の上に遊ばし、間々蹈舞を忘るゝ者あり。故に往々一二章を拔鈔し、聊か管見の祕を發き、以て學者の公案に充てゝ、天下後世孔子立敎中禪あり、禪中名敎の至理あることを知らしめんと欲す。熟按ずるに、孔子は釋子の地となり、釋子は孔子の地となり、兩敎互に影響し以て大道を發輝す、既に昭々然たり、看る者之を審かにせよ。

【講話】「蓋し老子の敎を垂るゝや、周道陵夷の運に屬す、」丁度老子の出られたのが周の末であります。其の老子の出られた時分といふものはまだ孔子の敎が世に現はれぬ時で、所謂禹湯文武周公の道なるものは大に陵夷して日晡下りになつた時分であります。それ故に「民俗浮僞にして之に從ふ莫し」兎角人情風俗といふものが輕佻浮薄に流れて居る時代であつた。さういふ民俗であるから、老子の如き高尙な敎を說いても、之に從ふ者は無かつた。老子の言葉は實に味へば味はう程、面白いのであります。ですが、一ッ二ッ擧げて見ると、斯ういふことがある。「道の道とす可きは常道に非ず、名の名とす可きは常名に非ず」といふ樣な丸で調子が違つて居る、迚も今の民俗浮僞になつた人は到底斯ういふこ

とを伺ひ知ることは出來ぬ。或は又「罪は欲す可きより大なるは莫く禍は足るを知らざるより大なるは莫し」。或は又「其心を虛にし其腹を實にす」これも善い言葉であります、僅に六字でありますけれども、修養上に取ては實に立派なものであります。扨て我々の心は中々虛とは言へぬ。色々のものが腹の中に横たはつて居るが、老子の言ふ所は、心を虛しくせよ、心を虛しくすると同時に其腹を實にする、精神の力はいつも充實せしめて居らなければならぬ、斯ういふ言ひ方である。或は又「大成は缺けたるが若く、大盈は沖きが若し」斯ういふ樣な言葉が段々ありますが、長くなるから一々辯は附けませぬ。さういふ敎であるから、此の浮僞なる所の民俗は、到底斯ういふ言葉に從ふことは出來ない。それ故に老子一代といふものは、殆と世の中から省かれた樣な有樣であつたが、それに繼いて起つて來たのが孔子であります。「孔子其の間に出で孔子が其の周道陵夷の間に出て「詩書を修め禮樂を定め、三綱五常の敎を唱ひ、以て世弊を救ふ。『詩書』は即ち『詩經』と『書經』之を修め、又『禮記』といふものを作り『樂記』といふものを拵へた、三綱とは、君臣と父子と夫婦、凡そ人倫はこれから始まる。君臣父子夫婦の敎へが正しければ、昆弟、朋友、國家。社會に及んで能く平和を保つて行く。五常は言ふ迄も無く、仁義禮智信であります。孔子は其の三綱五常の敎を唱へたのであります、之に反して老子の敎は哲學としては優れて居るが、倫理上の敎としては餘りに遠い。孔子に至ると倫理本位で述べられ、さうして世弊を救はれたが、如何せん「不幸にして忽ち戰國に及び」周の末から戰國となつた。戰國となると、禮樂も征伐も皆諸侯より出るといふ樣な有樣で元來天子から出る筈のものが禮樂も征伐も皆諸侯が命ずるといふ樣なことになつた。我が日本でも鎌倉幕府の昔は且らく置き、德川氏の中葉からは、取り分け皆さういふ樣な風になつて、大名小名が諸方に割據して將軍を仰いで、天子は殆ど忘れられた如き有樣になつた。到底王道抔を說いて居つても、そんな迂遠なことは、人が耳を傾けないといふのが、周の末の世の有樣であつた。孔子が天下を歩いて、初めから算へて見ると七十二侯といふ、それ位主取りをせられたが、何れも皆本當に用ひられなかつた。トウ〳〵後洙泗の畔へ退いて、さうして大に詩書禮樂を修められた。そんな有樣で、戰國に及んでは「横議盛にして覇術行はれ」横議といふのは正しからざる道で、色々の異說が盛に行はれ、王道は廢れて覇術のみ行はれるといふ有樣「未だ嘗て玄妙の典を言及するに遑あらず」孔子は哲學的の事は餘り仰つしやてござらぬのは、治術に忙はしくて其遑がなかつたのであらう。それ故に或時は孔子が嘆息された、「鳳鳥至らず河圖を出さず、吾れ已ぬる矣夫」と言はれた、それでモウ仕方がないから自ら退いて魯の十二公を擧げて、春秋の筆法を以て、大に文武の道を唱へられた樣な譯である。其春秋と言ふものが、遂に獲麟といふ麒麟を獲て、始めて筆を收めて仕舞うた。それでトウ〳〵玄々微妙なる所の眞の哲學とか、眞の宗敎とかいふことを說いて居られる遑がなかつた。「其澆季救ひ難きに當つて釋敎東流ず」所が幸にしてこれが孔子樣から五百四十餘年の後即ち後漢の明帝、或は顯宗皇帝とも云ふ是は人が

二人の樣でありますが、實は一人であります。其時に至つて始めて天竺に使を遣はして、佛教を迎へた。それを少し委しく言うて見ませう、後漢の明帝といふ人は、十歳にして春秋に通ずるといふ樣な人で、三十にして位に即かれて、大に儒教を興された。それから冠冕車服といふ樣な色々の禮儀作法を定められた。さうして即位の四年永平の辛酉の年に、一夜明帝が夢を見られた。昔の人の傳には往々夢物語が出て居るが、馬鹿にならぬ。今の者は其れを一笑に附して仕舞うが、夢といふものは、其人が感じたので、他の人には何の關係もない、理窟の上には夢識などはないものでありまけれども一種の信仰の上には必ず感應あることであります。其明帝が一夜夢を見た所が、其夢に金身丈六と言て黄金の體にして身長一丈六尺もある人が首には日輪を帶びて居る、飛んで殿庭に入るといふ夢を見られた。明日に至つて羣臣を集めて、さうして夢みたことを占はしめられた、其時に通士の傅毅といふ者が奏して曰ふに、臣按するに『周書異記』に昭王廿四年甲寅四月八日平旦暴風忽ち起り、宮殿人舍震動して、夜る五色の光あり入つて太微を貫ぬき、四方に徧うして盡とく青紅の色をなす。王太史蘇由に問ふ。是れ何の祥ぞ、對へて曰く、西方に大聖人ありて生まる。王曰く天下に於て如何。對て曰く此時他なし後ち一千年聲教此土に被及せん、王石に鐫つて之を記せしむ。埋んで南郊天祀前に在り年を以て之を計るに、今辛酉に至つて一千一十年なり。陛下夢みるところ將た必ず是ならんか。帝以て然りとなし、即ち中郎將蔡愔博士王遵秦景等十有八人を遣はし西の方其道を訪ふ。大月氏國に至り、

果して迦葉摩騰竺法蘭が優塡王第四造の白氈像並に『四十二章經』等を持して來るに逢ひ、奉迎して洛に飯る事は『後漢書』『西域論』に見えたり。而して此『四十二章經』が佛教經典の支那に來た一番始まりであります。其の澆季捄ひ難く、老子教も世に行はれず、孔子教も人の耳に入らぬ、如何せば可ならんといふ。誠に思想上の危險の時代に、丁度此の佛教が西の方より傳つた。其釋教の教といふものは、言ふ迄もない「善惡報應を顯說す」これは一端丈けでは盡すことが出來ぬのでありますが、因果應報の道理といふものは、佛教各宗一般に教へる所で、善因あれば善果を得、惡因あれば惡果を得る。我々人類間の貧富貴賤、壽夭禍福を精しく眺めて見ると、限もない複雜な狀態で、皆其因が違ひ其果が違う。それは神が授けた、佛が命じたといふことではない。神の權威も佛の萬德も因果の理法に干涉することは出來ぬ。自分が善因を作れば善果が生じ、惡因を作れば惡果が現はれる、佛教は決して濫に禍福を祈るといふ宗教ではない、善惡報應を顯說してさうして生民を警戒し、推して之を擴ひるに生命の理を以てす」佛教は一通り言ふと、大體世間教と出世間教とに分けることが出來るが、世間教でも出世間教でも、其說く所に大小廣狹の別はあるが、其心を以て經とし因果を以て緯とする所は決して相ひ換はらぬのである。但し世間教としては、今言ふ因果應報の道理を根柢として、善を勸め惡を懲すのが趣意である。出世間教としては、最早純宗教に這入つて居る。其れを淨土門で言へば往生淨土と云ひ聖道門では轉迷開悟と云ふ、それが即ち性命の理である。それで只世間教丈けならば

儒教で澤山だ。儒教で言ふ仁義禮智信といふのと、佛教で言ふ五戒十善と言ふのと、意味に於て同じてある。其大安心を得て、現在、未來に渉つて少しも變ぜず動ぜざる所の精神に活力を與へるのが眞の宗教てあります。さういふ悟の道を以てして更に「和らげて之を教ゆるに慈善の行を以てす、これは即ち六度萬行とて慈善をせよ、紀律を保て、忍耐をせよ、努力なれ、心を修めよ智力を味ますな即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、これを六度と言ふ。一切の萬行は皆此中に籠つて居る。「大に天下を化益し、こんな鹽梅にして「其の根機漸く熟するに迨んで、段々淺きよりして深きに至り卑きより高きに導ひて、モウ此處て宜いといふ總ての人の根機が漸く熟したといふ時に臨んて、「而して後達磨大士西來す。即ち梁の武帝の時に、達磨大士が印度より出て來た。此武帝と云ひ其太子昭明と云ひ、親子共に勝れた人物てあつた。詳しき噺は他日に讓つておく。」始めて教外別傳の宗旨を唱ひ以て諸佛頂上の祕機を洩す」禪といふことも色々ありて、外道禪、凡夫禪、聲聞禪、菩薩禪などゝ云ふ中に、一番終ひの名が、諸佛頂上の祕機といふ。斯ういふ名が附いた。約めて言へば、直指人心見性成佛て、即ち古佛の眞髓を直示したものである。「然れば則ち吾が釋教の王度を翊け治道を補ひ天下後世に功ある豈小補と云はんや」一寸したことてはない。全く當時の支那の精神界を廓然したのてある。「當時若し吾が教の補翊無く」佛教の補翊といふものがなかつたならば「便ち仁孝忠信の教或は熄むに幾からん」仁孝忠信の教即ち約めて言へば儒教てある、我々は普通の場合儒教といふものと、孔子教といふものを一所に稱へてをる。此間服部博士の書いた物を見ましたらば、孔子教といふものと、儒教といふものを分けて、論じて居りますが、其等の事は、今は別問題てあります。其儒教の教の足らざる處を、佛教を以て補はなかつたならば、儒教は殆ど絶えて仕舞つたであらう、「是に由て之を觀れば、佛教と儒教と發致施設殊なりと雖も、其期する所の者同然のみ」さういふ鹽梅て、儒教は現在に重きを置き、佛教は、現在及未來に重きを置いて、其範圍の廣狹長短の違ひはあるが、其發致施設、發致といふのは教へ方と言ても宜い、施設といふは模樣取りと言つて宜い、詰り其形式なり、型なりは、違つて居るけれども、其期する所の改過遷善といふことは同じてある「某嘗て禪餘」此の洪川が嘗て禪餘に目を四書六經の上に遊ばして間蹈舞を忘るゝ者あり、屢々手の舞ひ足の踏むを忘るゝ境界を得た。即ち禪の力を以て、儒教を究めて、右の如き愉快の境界を得たことは屢々てあつた「故に往々一二章を拔抄し」四書なり六經なりの中から、格言を引拔いて來て「聊か管見の祕を發す」管を以て天を覗う樣な私の小さい說てはあらうけれども、併し自分の大に得る所の祕訣がある。それを此處に持出して「以て學者の公案に充つ」平生世間ては考案といふ字を用ひてをるが、禪宗て用ひる公案といふのは、元公府の案牘といふ字から出て居る。今ならば國家の憲法といふ樣なものてある。それを昔の言葉ては、公府の案牘と言うたそれを假用して禪宗ては學者の公案と言ふ、其學者の公案に充てた。さうして「天下後世孔子立教中禪あり、禪中名教の至理あるを知らしめんと欲

する也」。我が微意は何處にあるかと言へば、天下後世をして孔子教の中にも禪があり、禪の中にも名教の至理があることを知らしめんと欲するのである。禪といふものは、只禪宗に限られた譯ではない孔子六經の中にも立派に禪がある。それは下卷の三十則の中に明に現はれてくるから、今は言ひませぬ。孔子教は名を正すといふことが主であるから、名教とも言ふ。名教の至理が禪の中にもある。兩方互に渉入して居るといふことを發見した。「熟ら按ずるに孔子は釋子の地となり、釋子は孔子の地となる」要するに兩方を研究して見ると、孔子教といふものは、詰り佛教の素地をする樣なものである、又佛教といふものは孔子教の素地を作つて居る樣な有樣である。互に相助けて居る。「兩教互に影響し」此の佛教と儒教といふものは、影の形に從うが如く、響の聲に應ずるが如く、どうしても離れないものである。「以て大道を發輝す」儒教と佛教と相俟て、一個の大道といふものを其處へ現はすのである。大道といふものを我物にして見れば、儒といふもの、佛といふもの、境も取れて仕舞ふ。「既に昭々然たり」其事はこれから下卷に入て明かに辨ずるから「看る者之を審かにせよ」下卷は至つて詳知すべしぢや。

第二十三講　緒言（其十一）

○雲臥紀談載。古德曰。由堯迄武王。佛未誕生。有以也。成康既沒。佛於是顯跡。然而未被中華。以俟聖人生於魯。集大成於古帝王之教也甚矣。聖人困於魯衞陳宋。或欲居九夷。或欲乘桴浮海。當此時。以外數萬里之教加于中國。天子諸侯疇聽之哉。佛法不苟傳。非顯宗感而求諸遠。恐未能速應耳。

○大惠武庫載。宋王荆國公。一日問張文定公。曰。去孔子百年。有孟軻。此後迨孔孟者。爲誰。何吾道之寥々乎。文定曰。豈無人。亦有過孔孟者。曰誰耶。文定曰。江西馬大師。坦然禪師。汾陽無業禪師。雪峰。岩頭。丹霞。雲門等諸禪師。孔孟之教。轡勒不住。皆歸釋氏焉。荆公深肯之。後張無相公聞之。撫几嘆賞曰。達人之論也。

○枯崖漫錄載。張文定公曰。儒道淡薄。一時聖賢。盡歸釋氏。而關洛諸公。亦必玩味釋氏之言。而后能接續洙泗不傳之祕。其裨助世教。要非小補矣。

天地包羅乎陰陽。而易識者。以其有象也。陰陽混處乎天地。而難窮

者。以其無形也。象之顯也可徵。儒也資以爲則。形之潛也難覩。老也資以爲則。於是。老以儒而厚。儒以老而全。孔老以佛而徹。佛以孔老而助。雖然。孔老二教。智通一世。但利生民。未及異生。如吾佛大乘悲智。通于六道四生過現未。皆悉及之。無物不利。無事不達。如其智眼。有象之與無形。有情之與非情。其性無一。無二之性即實相。住塵勞而不亂。居禪定而不寂。其爲物也。不來不去。不空不常。兼內兼外。性相如如。本自不生。豈又有滅。眞淨明妙。卓爾無對待者也。姑號之曰佛。

和訓　○雲臥紀談に載す、古德曰く、堯より武王に至る佛未だ誕生せず、以有るなり。成康餌に沒し、佛是に於て跡を顯す、然り而して未だ中華に被らず。以て聖人魯に生れて、古帝王の敎を集大成するを俟つや甚だし。聖人魯衛陳宋に困しみ、或は九夷に居らんと欲し、或は桴に乘じて海に浮ばんと欲す。此の時に當つて、外數萬里の敎を以て中國に加へ、天子諸侯疇か之を聽かんや。佛法苟も傳らず、顯宗感じて、之を遠きに來ひるに非ざれば、恐らくは未だ速に應ずる能はざるのみ。

○大惠武庫に載す、宋王荊國公、一日張文定公に問うて曰く、孔子を去る百年にして孟軻あり、此後孔孟に迫ぶ者誰とかなす、何ぞ吾道の寥々たるや。文定曰く、豈人無からんや、亦孔孟に過ぎたる者あり。曰く誰ぞや。文定曰く、江西の馬大師、坦然禪師、汾陽の無業禪師、雪峰、岩頭、丹霞、雲門等の諸禪師なり、孔孟の敎轡勒住せず、皆釋氏に歸す。荊公深く之を肯がう。後張無盡相公之を聞いて、几を撫し、嘆賞して曰く、達人の論なりと。

○枯崖漫錄に載す、張文定公曰く、儒道は淡薄、一時聖賢盡く釋氏に歸す、而して關洛諸侯、亦必ず釋氏の言を玩味し、能く洙泗不傳の祕を接續し、其世敎を裨助すること要ず小補に非ざるなり。

天地陰陽を包羅す、而して識り易き者は、其象あるを以てなり、陰陽天地に混處して窮め難き者は、其形なきを以てなり。象の顯るゝや、徵すべし儒や資け以て則と爲す。形の潛むや、視ること難し、老や資て以て則と爲す。是に於て老は儒を以て厚く、儒は老を以て全し、孔老は佛を以て徹し、佛は孔老を以て助く。然りと雖も、孔老二敎は、智一世に通じ、但だ生民を利し、未だ異生に及ばず。吾が大乘悲智の如きは、六道四生過現未に通じ、皆悉く之に及び、物として利せざるは無く、事として達せざるは無し。其智眼の如きは、有象と無形と、有情と非情と、其性無一、無二の性即ち實相、塵勞に住して亂れず、禪定に居て寂ならず。其物たるや、不來不去、不空不常、內を兼ね、外を兼ね、性相如々、本より不生、豈又滅あらんや。眞淨妙明、卓爾として對待無き者なり、姑く之を號して

佛と曰ふ。

【講話】『雲臥紀談』といふは、一小冊子でありますが、私共子供の時に、一遍素讀したことがあります。其の、「雲臥紀談に載す古德曰く」これは黃龍の死心禪師の法を嗣がれた所の潭州上封祖秀禪師の言はれた所の言葉を引かれた。「堯より武王に至る佛未だ誕生せず」堯より武王迄は、丁度堯舜禹湯文王を經て、其間數百年、佛はまだ其間は世に出られなんだといふに就ては、「以有る也」譯がある。「成康既に沒して」成王、康王、これは武王の後であるが、其の成王康王になつた後に、「佛是に於て跡を顯はす」始めて佛が中印度の摩迦陀國に於て誕生せられた。丁度佛が生れられたのが、周の昭王二十四年辛寅四月八日に、光五色あり、紫徹を貫く、印度に生れた佛の祥瑞が、支那迄影響したといふ有樣で、昭王の四十四年二月八日に城を出て、妻子眷族を捨て、山に入り難行苦行をされ、穆王の五十三年壬申の二月十五日に、又此の奇瑞があつた。白虹十二通、南北を貫通して連宵滅せず、山河大地六種に震動するといふ有樣である。其時分に大史の官をして居つた扈多といふ人に、穆王が問うて言はれるに、是何の兆ぞ。答て言ふ西方に大聖人あり、滅度す云々。昭王の辛寅の年から穆王の壬申に至る迄が、丁度七十九年、佛は八十にして入滅とありますが、其間が七十九年、丁度其入滅が日本の方て言ふと、天神七代地神五代といふ地神の鷓鴣草萠不合尊の時代に當る。今から言ふと、殆と二千九百年に近いさういふ有樣て佛は跡を顯しはた、「然り而して未だ中華に被らす」中華は支那て、佛は生れたが、未だ支那に及ばなかつた。其の中華に道が傳らぬといふに就ても、多少の因緣があつて、「聖人魯に生れて古帝王の敎を集大成するを俟つや甚だし」此處て聖人といふものは孔子を指すのてある。これは周の二十三代の靈王の時て、魯の國ては、襄公二十二年庚戌の歲十一月庚子に、魯の昌平鄕陬邑に生れた。さうして古帝王の敎、即ち堯、舜、禹、湯、文、武、周公等の敎を集めて大成せられたのてある。集めて大成するといふ言は能く今日でも普通に申しますが、これは孟子の萬章に、「伯夷は聖の淸なる者也、伊尹は聖の任なる者也、柳下惠は聖の和なる者也孔子は聖の時なる者也、孔子は集めて大成すと謂ふ。集めて大成すとは金聲で、玉之を振る也」といふ言葉がある、金聲玉振といふことを、モウ些つと委しく言へば、支那の音律には、八音といふのがある、八音といふのは、金石絲竹匏土革木、さういふ八種の音があつてそれを樂に奏する。いつも其始まりは、金聲である。金といふ字は鐘の字の意味で、それから終ひには玉て納める、玉といふのは磬といふ樣なものて、それて樂が一段落附くのてあります、さういふことは文字上のことてありますが、其の古帝王の敎を集めて大成するのを俟つて居つた樣である。「聖人魯衞陳宋に困しみ」これは『史記』の世家の中にも言うてあるが、孔子樣が一代の間、道を說いて歩かれたが、其一代の間には、盛りにならなかつた。大抵皆さうてありますが、其人一代といふ者は、多くは事業に失敗して居る。其代りに精神的には成功して居る。大宗敎家でも大學者でも、一代の內には、寧ろ事業に失敗して居る。然し精神的、人格的、には成功

して居る。孔子も魯を去つて齊に行つたら退けられて、衛に行き、陳に行き、宋に行き蔡に行つたが、蔡の國あたりでは、殆と振返つて見る者もなかつた。遂に又魯の國へ歸つて來た、そこで終ひには嘆息して、「或は九夷に居らんと欲し、或は桴に乘て海に浮ばんと欲す」迚も我道は中國に行はれぬから、夷に行かうか或は桴に乘て海外へ行かうかと迄て思はれた。『論語』にも、時々嘆息された言葉が出て居る。「此時に當つて、外數萬里の教を以て中國に加ふ、中國即ち支那からは、佛の生れた印度までは數萬里ある。其數萬里の異域の教を中國へ持て來ても、孔子の道さへ行はれぬ位だから、佛教を持て來た所が、「天子諸侯嘘かゝ之を聽かんや」到底さういふことに耳を貸さないであらうと、其時機を待て居つた樣である。「佛法は苟も傳らず、顯宗感じて之を遠きに求むるに非れば、恐らくは未だ速に應ずる能はざる耳」顯宗は、即ち後漢の明帝で、此明帝が夢に感じたことは、此前に言うたが、夢に感じて、態々之を遠方に求めた。即ち明帝が佛教といふものを求むるために使を遣はされた。それがなかつたならば、佛法はまだ速にこちらへ傳らなかつたらうといふことが『雲臥紀談』に載せてある。又『大惠武庫』といふ書物に、「宋の王荆國公」これは有名な王安石といふ人で、此人が、「一日張文定公に問うて曰く」これは張方平と稱した人で、其の傳は初めに言うたと思ふが、有名なる儒者であります。此の張文定公に問うて、「孔子を去る百年にして孟軻あり」孔子から曾子、孔伋、子思、孟子、斯ういふ工合に傳つて來た、其事も初めに言ひました。孔子を去る百年にして孟子が出た、「此後孔孟に

迫ぶ者誰とかなす、何ぞ吾道の寥々たる乎」其後孔子孟子に及ぶ樣な人は無いてはないかと嘆息したら、文定が言ふに、「豈人無からんや」人が無いことはない。「亦孔孟に過ぎたる者あり」孔孟よりも過ぎたる者がある、誰であるといふならば、少しく形は變つて居るが、「江西の馬大師、坦然禪師、汾陽の無業禪師、雪峰、岩頭、丹霞、雲門」等の諸禪師是等の人の傳記は『傳燈錄』に出て居るが、長くなりますから略して、「孔孟の教轡勒住まはず」是等の優れた人々は、迚も孔孟の教を以て繫ぐことは出來なかつた、孔孟の教の狹い中には止らなかつた。「皆釋氏に歸す」佛教の方に歸して仕舞つたと答へた。「荆公深く之を肯がう」後に至つて宋の當時の宰相張無盡が此話を聞いて、成程己もそこには氣が附かなんだと、「几を撫して嘆賞して曰く、達人の論也」斯ういふこともある。

又『枯崖漫錄』に載せてあるが、張文定公が言ふに、「儒道は淡薄、一時聖賢盡く釋氏に歸す」悉く釋氏に歸して仕舞ふ。而して關洛諸公此の都に居る所の儒者先生方も、「亦必ず釋氏の言を玩味して後能く洙泗不傳の祕を接續す」釋氏の言を玩味して、洙泗不傳の祕、洙泗といふのは、魯の國にある有名な河の名で、洙泗とは魯の國に在る川の名にて、孔子其のほとりにて弟子に道を教へたるに、洙泗といふ時は、孔子教を意味して居る。其孔子不傳の祕を接續し「其世教を裨助し」聖道人心を助くることは、「要するに小補に非ず」小さいことではない、大に世を感化したといふ。斯ういふ例證を一つ二つ擧げた。

それから又筆を改めて、「天地陰陽を包羅す、而して識り易き者は其象あるを以て也」『易』抔には、此事が能く書いてありますが、つまり陰と陽といふものを本にして、天地の本は陰陽、陰陽の本は太極でありますが、其陰陽の形の分れた所を言ふと、天と地と分れ、山と川と分れ、日と月と分れ、夜と晝と分れ、男と女と分れ、白と黑と分れる。それで易の序卦傳に、「天地有て然る後に萬物あり、萬物ありて然る後に男女あり、男女ありて然る後に夫婦あり、夫婦ありて然る後に父子あり、父子ありて然る後に君臣あり、君臣ありて然る後に上下あり、上下ありて然る後に禮儀措く所あり、夫婦の道は以て久からざる可らざる也」といふことがある、斯ういふ工合に分れて居る、天地は陰陽を包羅して居る。さうして「識り易き者は其象あるを以て也」此の形に顯はれたものは、今日言ふ科學的に色々の方面からしてそれを研究することが出來るのは、其象あるを以てゞある、所が陰陽は目以て見る可らざる所のもので、天地に混處して居る、總ての物の內容に含まれて居る。「而て窮め難き者は其形なきを以て也」故に陰陽を極めるといふことは中々難い。斯う兩面から言うた、今の言葉に言ひ換へれば、唯物とか唯心とか、色々言ひ方があるが、中々漢文では巧く言へぬから、斯ういふ風に言つた。「象の顯るゝや徵す可し」形無き物と雖も形を此處に顯はした以上は、一々皆實驗すべきもので、即ち徵す可き所のものである。「儒や資て以て則と爲す」儒教といふものは、形の上から此教を設けたる所のものである。それ故に先づ五倫五常、即ち君臣とか、父子とか夫婦とか昆弟とか朋友とか、さういふ語に依て天地陰陽に則つて設けられた。それから、「形の潛むや視難し」形の潛んで居るのは、目以て見る可らず、耳以て聞く可らざる所の眞理を發見して、「老や資て以て則と爲す」それ故に老子の教は、虛無といふので、大體の教は虛無の姿を主として此教を設けた、「是に於て老は姿を以て厚く、儒は老を以て全し」さういふ樣に一面に於ては、有形上から教を立て、一面に於ては、無形上から教を立た。故に老は儒を以て厚くて、老子教は儒教といふものを待たなければならぬ。又儒教の如き有形上の組織から設けたものは、老教の教を得て始めて完全する。又老教は儒教を得て始めて厚くなる。然らざれば一種の純哲學的のものになつて仕舞ふ。又それと同時に、儒教は老教を借らなければ、淺近淡薄てある。老子教を得て儒教といふものが、始めて全くなるので、各々其一方だけに偏して居つては未だ全からぬ、又「孔老は佛を以て徹し佛は孔老を以て助く」同時に、孔子教、老子教といふ此二つは佛教といふものを以て始めて徹する。此の徹するといふ字は、先師が字眼だと言はれた。孔老二教が佛を以て徹するといふことは『原人論』にも「二教は唯權、佛は權實を兼ね、理を窮め性を盡し、本源に至ることは佛教まさに決了を爲す」といふやうに委しく論じて居る。併しながら佛教は、また獨りでは十分と言はれぬ。孔子教、老子教の樣なものを以て助ける、即ち佛教て助道品と言ひますが、佛は二教を以て助く、斯ういふ樣に論じて來た。孔老は佛を以て研究しなければ、徹底しない、佛は孔老を以て助けとする。今孔老佛三教を、斯う融通して見たが、「然りと雖も、孔老二教は、智一世に

通じ」時間から言ふならば、現在一世に重きを置て居る。さうして教の及ぶ所は、「但生民を利す」人類の利益幸福を進めるといふに過ぎぬ。「未だ異生に及ばず」まだ人類以下の動物、有機物、無機物には及んで居らぬ。「吾が佛の大乘悲智の如きは」吾が佛教には、大乘と小乘とあるが、其大乘は一面は慈悲、一面は智慧を主とする、多くの宗教は、只慈悲を以て根據として居る。智慧の方を取らぬ、佛教は一面は慈慈、一面は智慧といふ、斯ういふ樣な有樣で我が禪に於ては、陰陽に渡らずして而もまた陰陽を離れず、直に我心を主人公と見る。それ故に禪宗では、見性というて直ちに見性を論じて、陰陽造化を論ぜず。見性成佛といふ、斯ういふ宗旨を立てた。天地といふものも陰陽といふものも、我より割出したもので、短刀直入的に、心の根源に溯つて、如何と觀る、これは寧ろ智的であります。慈悲といふと、初め佛が出家せられる時に、四つの誓を立られたことがある。一つには衆生の困厄を救はんことを願ふ、二つには衆生の迷惑を除かんことを願ふ。三には、衆生をして此衆生の邪見を斷ぜんことを願ふ。四には一切衆生の苦輪、即ち苦の根源を斷ち切てやらうといふ誓願を立てられた、これは即ち慈悲の方面である。「吾佛大乘悲智の如きは、六道四生過現未に通ず」只現在の生民を利益する丈けに止らぬのである。六道といふのは、天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界、乃ち六種の世界で四生といふのは濕胎卵化と言つて、濕生、胎生、卵生、化生、つまり一種の化學的作用に依て生れ出る所のものがある。例へば化生といふのは、人間の上で言へば、丁稚が主人になる、人間が天上の境界を得る、餓鬼が人間の境界を得るといふやうな鹽梅。其六道なり四生なりは、之を横樣に言うたのであるが之れを縱樣に言ふと、現在なり過去なり未來なり、過現未に通じて、「皆悉く之に及ぶ」佛の慈悲といふものは、獨り人類に止らぬ、「物として利せざるなく事として達せざるなし」といふ有樣。「其智眼の如きは有象と無形と有情と非情と其性無二」形有る所の物も、形無き所の物も、物質的のものも精神的のものも、有情も非情も、金石の如き、土芥の如き皆非情であるが、それ等の物の本性は皆無二である。動物と植物と根本の違ひはない、有情と無情と決して二つはない。「無二の性即ち實相」其無二の性、本性が即ち佛法て言ふ眞實相、實相というても決してさういふ或る一つの形相があるといふのてはない、眞實圓滿の現はれといふので、無二の性即ち實相である。こゝの所を會得すれば、「塵勞に住して亂れず」塵まみれの中に在ても、心の本性を取違へぬ、又「禪定に居て寂ならず」禪定の中に在ても決して寂寞てない。「其物たるや不來不去不空不常」此處ては物と言つた元來心と言つても、佛と言ても、神と言ても皆後から附けた名である。今は名を附けぬで只物と言つた。其物たるや不來不去、何とも名の附け樣がない。空しくもない、又いつ迄も常あるものてもない、畢竟無始無終、不生不滅てある、「內を兼ね外を兼ね性相如々」如々といふのは、不動不變、一つてもなければ二つてもない、さういう意味を現はす時に、佛法ては如々と言ふ。一と言つてもそれに形を現はす、一に非ずと言ても姿が殘るから、一といふ字や二といふ字を用ひず、性と相と如々て、「本より

不生、豈又滅有らんや」元來生れたといふ沙汰がないのぢやから、死ぬといふ沙汰もない。眞理といふものは、何千年、何萬年前に出來たといふのでもない、佛がこしらへたといふのでもない。之を世相から見れば物事みな進歩し變化するので、進歩のある處には變化があるが、併し幾度變化しても、實相といふ所に至つては毫も變ることはない、不生不滅である。そこを大に研究して見れば「眞淨明妙卓爾として對待なき者也」喩へ樣のないもので、物が十分で、モウ何とも言ひ樣がない、所謂絶對であります。併し名前がないと、取附き樣がないから、「姑らく之を號して佛と曰ふ」佛といふことの意味は、さういふ意味のものである。此無二の相の一つの現はれとして此世に現はれたのが、釋迦牟尼佛で、只釋迦牟尼佛が眞理を生んだのでなくして、釋迦牟尼佛が此の眞理中より生れたる者であるといふので、姑らく之を號して佛と曰ふ。これは六ケしい所でありますが、六ケしいと同時に、先師の力を用ひられた所であります。

第二十四講　緒言（其十二）

其爲妙用也。宏濟萬物。典御十方。視一切衆生如吾子。無所不至也。論大則寬廓於宇宙之外。論細則寂寥於毫釐之末。而與人子言必依於孝。與人臣言必依於忠。五常三綱之敎。治國平天下之道。無一缺矣。是所以古來稱無上妙道也矣。

吾禪海。波瀾洪大。無嫌底法。又無著底法。如孔老二道。亦皆兼在于波瀾中。故山野深愛傅大士之履踐也。梁武帝。因大士被衲戴冠靴履朝見。帝問。是僧邪。士以手指冠。帝曰。是老邪。士以手指履。帝曰。是儒邪。士以手指冠衣蓋學大道者。以大士心爲心。則庶乎其不差矣。凡欲知大道。先須見性。若未見性。則不可讀佛祖書。多駭而怪者。因槩謂異端。其爲誣也亦甚矣是村犬吠堯之論也。何則以其所常見者野服。而未嘗見向上之形容也山野常言達磨大士之殊勳。但在主張見性一著爲是故也。

和訓　其妙用たるや、萬物を宏濟し、十方を典御し、一切衆生を視ること吾が子の如く、至らざる所なし。大を論ずれば則ち宇宙の外に寬廓たり。細を論ずれば則ち毫釐の末に寂寥たり。人の子と言ふときは必ず孝に依り。人の臣と言ふときは必ず忠に依る。五常三綱の敎、治國平天下の道一として缺くる無し、是れ古來無上の妙道と稱する所以なり。

吾が禪海、波瀾廣大、嫌ふ底の法なく、又著する底の法なし。孔老二道の如き、亦皆兼て波瀾中に在り、山野深く傅大士の履踐を愛するなり。梁の武帝因みに大士衲を被り、冠を戴き、履を報きて朝見す。帝問ふ、是れ僧か、士手を以て冠を指す。帝曰く、是れ老か、士手を以て履を指す。帝曰く、是れ儒か、士手を以て衲衣を指す。蓋し大道を學ぶ者、大士の心を以て心と爲さば、則ち其の差はざるに庶からん。

凡そ大道を知らんと欲せば、先づ須らく見性すべし。若し未だ見性せずんば則ち、佛祖の書を讀むべからず、駭いて怪む者多からん、因て槩を異端と謂ふ、其誣たるや亦甚し、是れ村犬堯に吠ゆるの論なり。何となれば則ち其常に見る所の者は、野服にして、未だ嘗て、向上の形容を見ざるを以てなり、山野常に達磨大士の殊勳、但だ見性の一著を主張するに在りと言ふは、是が爲の故なり。

【講話】前段には、先づ自利を說いた、「之を號して佛と曰ふ」たが、こゝには利他を述べた。初めが體ならば、これからは用である。「其妙用たるや萬物を宏濟す」其佛の道の働きは、如何なることであるといふならば、萬物を宏濟する。佛敎では萬物といふ中に、四生六凡といふ樣なことが皆籠って居る。四生六凡といふ樣なことも、委しく說明せねば、一寸分りませぬが、それは略して置きませう。兎に角一切萬物を宏濟するので、「十方を典御す」十方とは、東北南北、四維上下で、有ゆる空間を典御する。『宗鏡錄』の言葉に、一切の萬法萬行を統御するが故に、稱して法王と爲すとある。佛樣のことを法王といふのは、其意味で、斯ういふ宏大な働きであるから、「一切衆生を視ること吾子の如く、至らざる所なし」これも據り所を言ふならば『法華經』の中に、今此の三界は皆是れ吾有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なりとある、佛の慈悲の目を以て見ると、殆ど吾子ならざる者はない、古人の歌に慈悲の眼に、憎しと思ふものぞなき、罪ある身こそなほ憐れなれ、といふ有難い歌がある。善人よりも寧ろ惡人は尙ほ憫であるといふのが、佛の慈悲の本體で、一切衆生を視る吾が子の如く至らざる所無し。斯ういふ有樣であるから、若し大と細とに分けて、其の廣大なる點を言ふ時には、「大を論ずれば即ち宇宙の外に寬廓たり」宇宙といふ字は、宇義から言ふと、天地四方は、宇といふ字に屬す、古往今來それを宙といふ、詰り時間の上から眺め空間の上から眺めて凡そ一切の物は之を宇宙の二字に含められて居る。廣大な點から言ふと殆どモウ不可思議、不可稱量といふ經文の如くて、宇宙の外に廣く朗かに行渡つて居る。又細を論ずれば即ち、「毫釐の末に寂寥たり」極細かい兎の毛の先、厘毛の末にひッそりとして居る。大の又大、小の又小なるもの、どちらにしても絕對的大、絕對的小これが即ち佛の心とする所である。併しながらそれと同時に又、「人の子と言ふときには、必ず孝に依り、人の臣と言ふときには必ず忠に依る」儒敎でも此通りでありますが、佛敎はどう云ふ所に依て居るかといふに、それは中々一ッや二ッではないけれども、其の主なるものを擧ぐれば、『善生經』或は『王法政論經』等の經文の中抔にある。「五戒を守れば仁惻にして殺さず、淸讓にして盜まず、貞潔にして淫

せず守信にして欺かず、孝順にして醉はず」これが丁度五戒に當る。君と爲ては即ち仁を以て民を養ふ、臣と爲ては義を以て國を守る、親は慈に子は孝、夫は正に婦は貞に、兄は愛し弟は敬ふ、九族和睦し、撲使恭順し、潤澤遠く被り、含血恩を受く、十方の諸佛、天龍鬼神、有道の君、忠平の臣、黎庶萬世、敬愛せざるなく、祐けて之を安んず、佛遊履する所、國邑丘衆化を蒙らざるなし、天下和順、日月清明、風雨時を以てし、災厲起らず國豐かに、民安くして兵戈用ふることなく、德を崇め仁を起し、務めて禮讓を修む云々。これは今『王法政論經』の一節を一寸擧げたのでありますが、こういふ有樣で、佛敎といふものは、決して悟りだとか、涅槃に入るとか、いふ斗りでない。世間に臨む時には『善生經』の如く『王法政論經』の如く敎へて居る。儒道で言ふ五倫五常と些つとも變りがない。「五常三綱の敎」五常は、仁義禮智信、三綱は、君臣父子夫婦、それから大學にある、「治國平天下の道」といふものも、佛敎の中に於て決して。「一も缺くる無し」佛敎といふものは決して世の中を捨て一種の悟りを開くといふことではない、少しも世間道といふものを忘れて居らぬ。「是古來無上の妙道と稱する所以也」古よりして佛法を無上の妙道と稱したといふのは、世間に入り、又出世間に入り、眞諦にも入り又俗諦にも入り、餘さず漏さず物に依りて敎を立てゝ居るからである。「吾が禪海、波瀾廣大、嫌ふ底の法無く、又著する底の法なし」斯ういふ樣な有樣であるから、我が此の禪宗を海に譬へたならば、其の波瀾といふものは洪大である。嫌ふ底の法無し、これも一つ據り所を擧げて見ると、我が臨濟宗の祖師の說法を輯錄した書物に『臨濟錄』といふものがあるが、其中の一語を擧げて見ると、斯ういふことがある。唯道流、目前現今聽法底の人のみあつて火に入ても燒けず、水に入ても溺れず、三塗地獄に入ることは園觀に遊ぶが如く、餓鬼畜生に入て報を受けず、何によつて此の如くなる、嫌ふ底の法なければなり云々。隨分『臨濟錄』といふものには、キビ〳〵したことが言つてある。皆さんも暇があつたら素讀てもされたら、必ず益がある。吾が禪海は波瀾洪大だから何一つ嫌ふ底のことなし。佛も嫌はず、魔も嫌はず、天上界も嫌はず、同時に地獄界も嫌はず、又一切の物を嫌はず、即ち淸濁併せ呑むといふ有樣。そんならばと言つて、同時に又何かに執着するかと言へばさうでない、どういふことがあつてもそれに執着することがない。口ではさう言ひますが、斯ういうことは實際修養の上から得來つたものでなければ本當の用を爲すことは出來ぬ。「孔老二道の如き亦皆兼て波瀾中に在り」それ故に此點から眺めて見ると、孔子敎でも老子敎でも皆籠つて居る。今ならば、耶蘇敎でもマホメット敎でも矢張り佛敎中の或點には其通りある。道理は皆こちらにあるから、皆兼て我が波瀾中にある。こゝに一つの例を擧げて見ると、張無盡居士が斯ういふことを言つて居る。老孔道無しとは謂はず、亦淺奧の同じからざるのみ、然りと雖も三敎の書、各其道を以て世を善くし俗を礪く、猶鼎足の一をも缺く可らざるが如し。斯ういふ立場からして、「山野深く傅大士の履踐を愛する也」傅大士といふ人はズッと前に紹介したか知りませぬが、一寸言うて置きます。大士姓は傅、

名は翁、善慧と號す。字は玄風年十六にして劉氏の女妙光を納れて室となし、二子普建、普成を生む。西域の沙門嵩頭陀、大士を見て曰く、吾と汝と毘婆尸佛の所に於て同じく誓を發しき、今兜率宮に衣鉢現在せり、何れの日か當さに歸るべきと、因て命じて水に臨んで其影を觀るに圓光寶蓋を見る。大士笑て之に謂て曰く、爐鞴の處鈍鐵多く、良醫の門病人足る、度生を急となす、何ぞ彼の樂みを思はんやと、遂に田宅を捨て妻子を賣り、錢五萬を得て以て法施會を設く。松山の頂に於て雙樹に因りて菴を創し、名づけて雙林といふ。蔬菓を種植し人の爲めに傭作す、自ら號して雙林樹下、當來解脱善慧大士といふ斯ういふ工合に傳に書いてあります、殆ど一種の大豫言者の樣な有樣である。陳の宣帝大建元年四月二十四日に涅槃に入た、壽七十三、中々樣子の變つた人である。此傳大士は常に道冠儒履、佛袈裟というて丸で、假裝會にても現はれる樣な風をして居る、中々面白い、「梁の武帝因みに大士衲を披し」衲といふのは佛敎の袈裟法衣で、袈裟法衣を着て、「冠を戴き」老子敎の冠を戴き、「履を靸き」儒者の履を穿いて朝見した。梁の武帝が問はれるに、お前は僧であるか、「士手を以て冠を指す」別に口で彼是と答へずして、手を以て冠を指した、イヤ佛敎者では御座らぬ。さうすると梁の武帝が「是れ老か」老子敎を奉じて居る者かと問うたら、さうでもないといふ有樣で、「手を以て履を指す」儒者の穿く履を指した。帝曰くそんならお前は儒者かといふと、さうでもないと言ふが如く「士手を以て衲衣を指す」斯ういふ有樣。儒者か、儒者でもない。道者か、道者でもない。佛者か、佛者でもない。同時に或點は佛者である、或點は道者である、或點は儒者である面白いですな。であるから佛印禪師が傅大士の畫像に斯ういふ賛をされたことがある。

道冠儒履佛袈裟、和二合三家一作一一家一忘二却率陀天上路一、雙林痴坐待二龍華一。

「蓋し大道を學ぶ者、大士の心を以て心と爲さば則ち其の差はざるに庶からん」苟も大道を學ばうと言へば、今擧げた傅大士の心を以て、我が心としたならば、稍道に入ることが出來るだらう。中々人間といふ者はさういふ風にいけぬもので、初めから名に依て大にそこに隔を爲す。佛者は儒者を嫌ひ、儒者は佛者を嫌ふ。耶蘇敎者は佛敎者を嫌ひ、佛敎者は耶蘇敎者を嫌ふ。名に依て初めから城壁を築いてくる。元來佛が現はれぬ前、耶蘇が生れざる以前、孔子の生れざる以前、老子の生れざる以前、其時には道がなかつたかと言へばさうでもない、大道といふものは、昔から存在して居る、無限の時間に亘り無限の空間に渉つて居る、けれども多くは直に名に捕はれて仕舞ふ。

「凡そ大道を知らんと欲せば、先づ須らく見性すべし」見性の二字が骨子である。これを言ひたい爲に、老子敎の事を說き、儒敎の事を說き、さうして其實見性の意を明にしやうとして居る。凡そ大道を知らうといふには須らく見性しなければ話が出來ない、心を見るといふことが出來なければいかぬ、これは禪宗の本旨でありますが、世間的に言ふと、中々注目すべき文字でありませう。心を知るとか、

心を究むるとか、心を學ぶとかいふことは言ふてあらうが、見性というて、物質を手に乘せてアリアリと見るが如くに我心を見るのが見性で『血脈論』には、「若し佛を覓めんと欲せば須らく見性すべし」とある。又「菩薩の人は眼に佛性を見る」などともある。斯ういふことは出來得られないと思ふのは、我々が意識的に考て居るので、モウ一層其上に出て來ると、此の物質を見る如く明に見ることが出來る。大乘佛敎の本領禪宗の眞髓はそこにある。「若し未だ見性せずんば則ち佛祖の書を讀むべからず、駭いて怪む者多からん」若し未だ見性が出來ないといふ以上は、餘り佛祖の書を讀まぬが宜しい。何ぜ讀まぬ方が宜いかと言へば、駭いて怪む者が多いからである。佛敎は寂滅の敎であると、大抵の者はさう思ふ。一種の空言的の樣なものであると思つて居る、中々そんな譯のものでない。其點に至ると、西洋の優れた學者は、卓越した者で、カアーライルの言うたことがある。例へば今私が小さな腕を擴げて、其外に一萬二千倍して居る所の空間に掛つて居る太陽をズッと捉み得ることが出來る、と言つたら大抵の輩は、そんな馬鹿なことはない、それこそ眞の大法螺と思ふ輩が多いだらう、或はそれが一種の神祕の如く思ふだらうが、私に言はせると、神祕でも不可思議でも何でもない。それよりも今私が手に持て居る筆で紙の上に思想を現はしてくるとこれが取も直さず大神祕、大不思議である。若し時間や空間といふ觀念を忘れて仕舞つたら、此の小さな手を以て彼の大なる太陽を捕へることは何でもないといふ樣なことを、カアライルが言うて居る。それを心の無い者から見たら實に駭いて怪む者である。自分の心が分らぬから、異端てある、邪說てあるといふことを言ふ人が多い。孔子の如き聖人を見るのても、孔子の弟子方七十人の者は聖人と見て居つたが、隣に居る百性爺は聖人とも君子とも思はなかつた。自分が分らなければ異端と思ふだらうが、「因て槃を異端と謂ふ其誣たるや亦甚し」てある。「是れ村犬堯に吠ゆるの論なり」これは『編年通論』といふ書に出て居るが。昔舜の館に犬を畜ふ、犬の旦暮に見る所の者は唯舜なり一日堯の過ぎるや之を吠ゆ、舜を愛して堯を惡むに非らず、常に見る所の者は唯舜のみにして未だ嘗て堯を見ざるを以てなり云々。人間も見慣れゝば怪まぬが、どんな豪い者でも見慣れぬ者は怪まれて、犬にさへ吠えられる。「何となれば則ち其常に見る所の者は野服にして未だ嘗て向上の形容を見ざるを以てなり」未だ嘗て向上の尊い風をして居る者を見附けたことがないからてある。それ故に、「山野常に達磨大士の殊勳但だ見性の一著を主張するに在りと言ふは是が爲の故なり」達磨大士が九年面壁して禪宗の祖師となつたといふけれども、其の最も優れて居る所は、何處にあるかと言へば、外ではない、只見性の二字で、此の見性の一著を主張された所にある。これが達磨大士の殊勳てあると私の常に言うて居るのは、是が爲の故てある『大光明藏』といふ書物の中に說いてある言葉がある、それも一言謂うて見ませう。

寶曇曰く吾祖の中國に入るや、初め放光動地の祥無く亦法雨雲の如きの益無し、又世と俯仰の事無し、當時之を望むに指して壁觀婆羅門と爲すに過ぎず。其空拳を奮て實効を求むるに及んては、烏獲の力、

孟賁の勇有り、百の靡騰竺法蘭と雖も爾かく較べざる也。或は『六祖法寶壇經』には指授は即ち無し、唯見性を論じて、禪定解脱を論ぜず。これが禪宗の本領である、王陽明抔の言うた言葉にも今の性を論ずる者紛々として異同す、皆是れ性を說くものにして性を見るに非ず、性を見る者は異同の言ふ可き無しとある。今でも心理學などに於て色々心を說いては居るけれども、心を見たといふ者はない。今の科學といふものは實驗的學問ぢやが、心の事に就ては實驗したといふことは誠に少い。所が見性即ち心を見る者は異同の言ふ可きなし、異であるとか同であるとかいふことを言ふものやある、言ふものはない。王陽明は別に禪宗の高僧と約束した譯でないが、同じ樣なことを言うた。これは頗る參考とすべきことであります。

第二十五講　或問（其一）

或問余曰師出乎儒而入于釋。有何所得。余曰無所得。曰請問其意。余曰吾法道。轉得轉捨。故其益廣大而無涯涘矣。昔唐太宗詳覽玄弗翻譯經一百卷。驚佛道宏奧。謂侍臣曰。朕觀新譯經論。猶瞻天暾海。莫極深高。今知宗源杳曠。而后顧儒道九流。猶汀瀅之方冥渤耳。盛矣哉太宗之言。以經論之義。尙如是。而況於吾本分眞修乎。

或問孔老釋優劣如何。余曰。老莊專修道行。修身自翫。放蕩山林。歸心淡泊。是吾門二乘之流亞也。可稱而不可則矣。劉歆七略。叙道家爲諸子宜矣。如孔子制作禮樂。明了德性。祖述典訓。敎化來葉。是吾門菩薩乘之人也。不可不謂之聖。可仰可崇矣。至吾調御師獨絕之敎。不變之宗。固不得同年而語。其優劣亦以明矣。雖然若夫照明世界。運轉生靈。則釋儒兩道即一德也。二者闕一則不安立焉。

和訓　或る人余に問うて曰く、師儒を出て、釋に入る、何の所得かある。余曰く、無所得なり。曰く其意を請ひ問ふ。余曰く、吾が法道は轉た得れば轉た捨つ、故に其益廣大にして涯涘なし。昔唐の太宗、玄弗翻譯の經一百卷を詳覽して、佛道の廣奧に驚き、侍臣に謂つて曰く、朕新譯の經論を觀るに猶ほ天を瞻、海を瞰るが如く、深高を極むること莫し、今にして宗源の杳曠なるを知る。而して後儒道の九流を顧みれば、汀瀅の冥渤に方るが如きのみ。盛なるかな、太宗の言や經論の義を以て尙ほ此の如し、況や吾が本分の眞修に於てをや。

或る人問うて曰く、孔老釋の優劣如何。余曰く、老莊は專ら道行を修し、身を修め、自ら翫ぶ、山林に放蕩して、心を淡泊に歸す、是れ吾が門二乘の流亞なり、稱すべく則るべからず。劉歆七略、

道家を叙して諸師と爲す宜し、孔子の如きは禮樂を制作し、德性を明了にし、典訓を組述し來葉を敎化す。是れ吾が門菩薩乘の人なり、之を聖と謂はざるべからず。仰ぐべし崇むべし。吾が調御師獨絕の敎、不變の宗に至つては、固より年を同じうして語ることを得ず、其優劣亦以て明かなり。然りと雖も、若し夫れ世界を照明し、生靈を運轉せば、則ち釋儒兩道、即ち一德なり、二者一を闕かば則ち安立せず。

【講話】「或る人余に問うて曰く師儒を出でゝ釋に入る何の所得か有る」と云ふ或問の一つである。洪川先師は元儒者であつたことは前々に於てもお話いたしました、兎に角斯う云ふ疑ひを抱いて來た人もある。貴方は元儒者であり乍らそれを出でゝ佛敎の中に這入られたと云ふに就ては、大いに所得が有つたであらうと想像する、全體どんな所得が有つたのであるか。答へて言ふのに「曰く無所得なり」此無所得と云ふことは我が佛敎の究竟窮極の處であります。『楞伽經』に「世尊讃嘆して曰く善哉々々其諸法に於て無所得なるものを即ち眞得となすと云ふ。一切諸の法に於て塵一本ほども得たと云ふことのないのを眞得となす。又古人曰く有所得の法之れを野干鳴となし、無所得の法之れを獅子吼となす」と、野干と云ふのは狐みたいな獸であります。又『六祖壇經』の機緣七には斯う云ふことがある。「萬法悉く通じ、萬法具さに備はる一切に染まず、諸法の相を離れて一の所得なきを名づけて上乘となす。」斯う云ふ鹽梅に諸書を引用すれば澤山あるのであります。必竟禪道佛法の極意に至つたら應一本も胸中に留めない。之れは寔に先師が懇引なく白狀されたものである。併し必竟無所得なりと言つたが、それ丈ては素人にはチョット解せない、そこで「其意を請ひ問ふ」と云ふので、無所得の意味はどうかと聞かれた。「余曰く吾が法道は轉た得れば轉た捨つ故に其益廣大にして涯涘なし」我が此禪道と云ふものは門外漢が考へると、其處に不可思議な神祕なことてもあつて、次から次に何か一つの得る所のものがある樣に思ふだらうけれども、さうではなく、轉た得れば轉た捨つデ、一つ得たならば一つ捨てる、二つ得たならば二つ捨てる、眞理の無邊にして止むことないと云ふのは、それてこそ考へることが出來る。どこまて得ても盡きない、どこまて得てもどこまても捨てる、元來眞理は無邊なり、無限なるものてある、故に其益廣大にして涯涘ない。一つ此所に例を引いて見ると「昔し唐の太宗皇帝即ち唐室を起したる太宗皇帝、其太宗が玄奘三藏飜譯の經一百卷を詳覽して佛道の宏奧に驚きて」侍臣に言はるゝのに「朕、新譯經論を觀るに猶ほ天を瞻、海を瞰るが如し」天を觀れば高きを知らず、海を瞰れば深きを知らず、轉た瞻げは轉た高く、轉た瞰れば轉た深いと云ふ有樣て「深高を極ること莫し」『今にして宗源の杳曠なるを知る」實に宗旨の本源と云ふものは恨りもなく深く廣いものなることを知つた「而して后に儒道の九流を顧みれば」と九流と云ふのは陰陽家、道家、法家、名家、史家、醫家、術數家、書家、兵家乃ち斯う云ふものを以て九流とする。其儒道の九流も佛敎の杳曠なる所から云ふと「猶ほ汀澄の溟渤に方るが如し」汀澄は水溜りのやうな僅かなもので、夫れを溟

渤の大海に比ぶるやうなものであつて、到底日を同うして語ることが出來ないと、太宗皇帝が讃嘆せられた。「盛んなる哉、太宗の言や經論の義を以て尚ほ是の如し況んや吾が本分の眞修に於てをや」太宗の如き翻譯の經論を見てすら是の如く讃嘆して居る。然るを吾が本分の眞修、即ち禪の眞髓に至つては、如何がであらう。若し太宗をして本分の眞修を知らしめたならば、恐くは手の舞ひ足の蹈むところをも忘れる程讃嘆せられたであらうと思ふ。扨て其禪と云ふことに就て日本の釋迦とも言はれた弘法大師即ち空海上人の東寺の碑文に斯う云ふことが書いてある。「夫れ禪宗は諸佛頂上の宗なり、佛心宗是なり、根本第一宗なり、故に一切菩薩、諸天諸神、國王大臣、禪を以て師となす、何に況や諸宗の仰ぎ奉つる可き者なるをや、諸宗は此より流れ出づ(中略)弟子空海は、達磨より十三代の弟子內證は曹溪の流を酌み、化他は惠果の燈を續く云々」と、禪宗を讃嘆してをられる。其他禪の諸佛頂上の法たることは、今更云ふまでもない人々眞參實證して、始て知るべきである。

又或る人問うて曰くに「孔、老、釋の優劣如何」即ち此三教に就て何れを優れりとす、何れを劣れりとしますかと問うた。そこで答へて言ふのに「老莊は專ら道行を修し身を修め自翫ぶ、山林に放蕩して心を淡泊に歸す」之れは老莊を一と通り目を通した人でなければわからぬが、今は只一二の言葉を引き出して御目にかけやう『老子經』に「欲すべきを見ず心をして亂れざらしむ」と云ふことを書いてあります。之れは本文の通り人間の慾と云ふものを充たさずして、心を正うすると云ふのであります。

或は又「聖を絕ち智を棄て仁を絕ち義を棄つ」と云ふこともある。又「我に大患ある所以は、我が身あるがためなり、我が身なきに及んで、吾れ何の患かあらん。」老子の說を一寸斯う云ふ調子であります。其外「大道廢れて仁義あり、智慧出でゝ大僞あり」などゝ云うてをる、仲々面白いです。茲に又「莊子」の語を一つ引いて見ると「虛靜恬淡、寂漠無爲は天地の平にして道德の至なり」などゝ云うてをるのである。總體老子の道德說は如何にも消極的にして、自利一遍に傾いてをる。それ故に先師は之を吾が佛敎中の小乘たる聲聞緣覺の地位に見立てられたのであります。是れ「我が門二乘の流亞なり」と此二乘三乘と云ふことは能く是れまでも出て居りますから、或は前に言つたかも知りませぬが、『輔敎篇』の廣原敎八篇に、聲聞乘とは何の謂ぞや權なり、漸なり、小道なり、佛の聲敎を聞て道を悟る云々、緣覺乘とは何の謂ぞや亦小道なり、常に寂靜を樂んで雜居を欲せず、多くは無佛の世に出づ、師友なきが故に獨覺と云ふ、又緣を觀して道を悟る、故に緣覺と云ふ云々。菩薩乘とは何の謂ぞや、實なり頓なり、大道なり、其乘妙覺と通ず、其れ殆んど庶幾きものなり、具に菩提薩埵と云ひ、覺有情と飜ず云々乘は「ノリ」物にて、運載の義であります。」それで今老、莊は斯の如く山林に放蕩して、心を淡泊に屬せしむる、之れは我が門二乘即ち聲聞乘、緣覺乘の一流である「稱す可し、則る可からず」て多く自分の自利的修行から言へば稱讃すべきことであるけれども、夫れを大乘佛法の手本にすることは出來ぬ。それ故に「劉歆七略道家を叙して諸子となす宜し」此劉歆七略は前漢の哀帝が劉句と云ふ人

に詔して、經典諸子を校正せしめられた事がある、其後劉句が間もなく亡くなつて、其子劉歆と云ふ者をして父の業を終へしめた、劉歆はあらゆる羣書を總べて七略として、哀帝の詔に應じたのである、即ち輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數方技略等大凡三萬三千九十卷と云ふ大部のものである、惜ひかな王莽の亂に皆な燒き拂はれて仕舞うたと云ふことである。其七略の中道家を叙して諸子の部類に入れてをる、是も劉歆の一見識であらう。ところが「孔子の如きは禮樂を制作し、德性を明了にし、典訓を結述し來葉を教化す是れ吾が門菩薩乘の人なり。即ち伊尹の所謂予は天民の先覺者なり、將さに斯道を以て斯民を覺せしめんとする人である。」「之を聖と言はざるべからず」之れは先師の孔老觀であります。それで「仰ぐべし崇むべし」先づ二教を評して遂に佛教を引き出した。吾が調御師、獨絶の教、不變の宗に至ては調御師とは如來十號の中の一つである。十號とは如來、應供、正偏智、明行足、善逝、世間解、無上師、調御丈夫、天人師、佛世尊の十である。調御丈夫とは丈夫の力用を具して諸法を說き一切衆生を調伏制御して垢染を離れて、大涅槃を得せしむる義であります。扨て吾佛教の眞理は諸法に獨絶して千古萬古變改なき處のものなれば、固より年を同じうして語るを得ず、と最後の斷案を下して、唯有一乘法無二亦無三の眞意を顯はしたのであります。其優劣亦以て明なりで、こゝが分れは其優劣など云はずもがなである。然りとも雖「若し夫れ世界を照明し生靈を運轉し」世の文明を進めるとか、人類を救濟するとか云ふ點に就ては則ち儒釋兩道即ち一德なり、一つは形ちから敎へ、一つは心から敎へると云ふやうな工合で、歸する所は一德で、二者一を缺けば則ち安立せず、て世道人心に補益する所は全く同一で、其の中一をも缺いてはならぬのであります。

第二十六講　或問（其二）

或問。承聞。禪門究道在靜坐。其意如何。余曰。非但吾門。宋儒亦勤靜坐。朱熹云。明道敎人靜坐。蓋人之所以不知大道爲何物者。由精神不定。所以精神不定者由外物來擾之。故先依靜坐凝工夫。以空外物。外物空便神定。神定便性珠燦然現。前目前捕翹之。如俯拾地芥耳。雖然。吾所謂靜坐。異於六朝清坐。宗儒靜坐。也佛謂之正思惟。故不必在坐相上。造次必於此。顚沛必於此。若以但閉目藏晴。愛寂嫌鬧。以爲靜坐。也是非正靜。果邪靜也矣。

或問。孔門之敎。依學遊藝。今師外學藝。何哉。余曰。如學藝。初學因地一事也。至孔門蘊奧。在明德性。故眞意不在冊子上。孔子不云乎。余

欲レ無レ言。又曰。賜也女以予爲二多學而識一之者一歟。對曰。然非與。曰。非也。予一以貫レ之。山野常謂。儒亦有二教外別傳之一一著。此之謂也。

和訓 或る人問ふ、承り聞く、禪門道を究むる靜坐に在りと、其の意如何。余曰く、但た吾が門のみに非ず、宋儒亦靜坐を勤む。朱熹云く、明道は人をして靜坐せしむ、延平も亦人をして靜坐せしむと。蓋し人の大道何物たるやを知らざる所以は、精神の定まらざるに由る。精神の定まらざる所以は外物の來つて之を擾すに由る。故に先づ靜坐に依つて、工夫を凝し、以て外物を空ずべし。外物空ずれば便ち神定まり神定れば便ち性珠燦然として目前に現前す、之を捕齶し、俯して地芥を拾ふが如きのみ。然りと雖も吾が謂ゆる靜坐は、六朝の清坐と、宋儒の靜坐と異るなり。佛は之を正思惟と謂ふ。故に必ずしも坐相上にあらず、造次にも必ず此に於てし、顚沛にも必ず此に於てす。若し但だ目を閉ぢ睛を藏め寂を愛し鬧を嫌ふを以て靜坐となすは、是れ正靜に非ず、果して邪靜なり。

或る人問ふ、孔門の敎、學に依り、藝に遊ぶ、今師學藝を外にする何ぞや。余曰く、學藝の如きは、初學因地一事なり、孔門の蘊奧に至つては、德性を明にするに在り、故に眞意冊子上に在らず、孔子云はずや、余言なからんと欲す、又曰く、賜や、女予を以て、多學にして之を識る者となすか對て曰く然り、非なりや、曰く非なり、予一以て之を貫く。山野常に謂ふ、儒亦敎外別傳の一著ありと、此れ之の謂なり。

【講話】 或ひと問ふ、承り聞く、禪門の道を究むる靜坐にありと、其の意如何と。既に先達てから或問の一段に入つて居る。今日も亦或問の一段で或人が先師洪川老漢の所へ出て來て承り聞くに禪門の究道は靜坐にありと、禪宗では兎に角道を究むるの實行法としては先づ靜坐せしむる、さう云ふことであるが其の意味合を一つ承りたいと斯う云うた。此の靜坐と云ふは文字の通り靜に坐ると云ふことである。靜に坐ると云へば、今チャンと玆に靜に坐つて居る。それは唯字面の義理だけであるけれども、禪宗で言ふ靜坐と云ふことは、坐相の上ばかりの謂ひではない。種々證を引き例を擧ぐれば數多くあるが、今記臆のまゝを言ふと、例へば達磨大師の辭と思うて居るが、一切萬境の上に於て心を生ぜざる之を坐と謂ふ、また禪とも謂ふ。身體が坐つて居らうが、立て居らうが、それは第二の問題で、先づ第一は一切萬境の上に於て心を生ぜず、心は生ずるけれども生じた上に於て少しも物に捉はれないところの境界である。併し口では容易に言ひ得るけれども一切萬境の上に於て心を捉はれないと云ふことは、なか〳〵修養熟練の上の效果に依らざれば難いことである。唯巖石の如く枯木の如く、心を生ぜぬと云ふのではなく、其の實一切萬境に心を生じながら、決してそれに囚はれぬと云ふ程の有樣で、一切萬境の上に於て心を生ぜざる之を坐と謂ふ、是が坐禪の定義である。ところが今の世の中を眺めて見てもさうてあります。大抵私共の所へ出て來る若い學生、其の他の人々も、多少靜坐と云ふことをして居らぬものは殆ど無い位の有樣であるが、其の靜坐をすると云ふ動機にも種々

あらうし、又其の目的も各々異なつて居るかも知れぬが、兎に角誰しも世間普通の静坐をやつて居る。或は岡田氏が稱へた法式に據つてやるとか、藤田氏の教へた型に據つてやるとか云ふやうなことでやつて居りますが、勿論吾が專門の禪の本領とは大分違ふやうであるけれども、其の坐ると云ふ形に於ては毫も變つたことがない。而も今世間で行はれて居る静坐の據り所は、皆な佛教の坐禪法から割出したに外ならないのである。又其の佛教の坐禪法と云うても、一言にして盡すことは出來ぬ。小乘には小乘の坐禪法があり、大乘には大乘の坐禪法がある。一佛教に於てもさうであるが、細かに言ふと圭峯の宗密禪師の言はれた辭に依ると、外道には外道の坐禪があり、凡夫には凡夫の坐禪があり、聲聞乘には聲聞乘の坐禪あり、緣覺乘には緣覺乘の坐禪があり、菩薩乘には菩薩乘の坐禪がある。我が禪門の坐禪の如きは、諸佛頂上の坐禪と云ふやうなことを言うてをる。今擧げた名目の如き、初ての御方には少し分り難いであらうが、諄々しくそれを說て居る暇がない。それは他日に讓つて、さう云ふ按排で、皆各々禪坊子の樣な眞似をヤッテをるが是はやはり世界の思潮の赴く所の一の現象であらう。静坐默想と云ふことを要求するのは種々の原因はあらうけれども、一口に言へば外界には常に生存競爭の激しい風が朝から晩まで吹て居る。それがいろ〳〵形を變へて吹て來る。恰も須彌山を八風の吹くが如く、其の風によつて種々生活難の聲が起る。内から見ると吾々の智性、或は理性と云ふものが漸々進み往き、學問をするに從つて理性が進む、進めば進むに從つて一面には又不可解の疑問が次第々々に殖えて往く。種々の懷疑、種々の煩悶が、大きな口を開て、人を呑まうとしてをる。仲々〳〵油斷は出來ぬ。斯う云ふことを精しく言うて居ると話が長くなるから、是より以上は述べぬが、兎に角、内からも外からも、己れ自身を始終つけ狙うて居る或物がをる。約めて言ふと、文明とか何とか云うて、其の名の美なるがために、それに眼を眩されて居るのであるが、其の實患圖々々してをると、唯四圍の境遇の變動、所有、外界の刺戟のために、一生を忙殺されて、意義なき人生を送らねばならぬ。試に思うても見よ、吾々は何しに此世の中に產れて來たのであらうか、死んでどんなことになつてしまふのであらうか、考へて此に至ると誰も、不安の念を免かるゝことが出來ない。斯う云ふやうな事から知らず識らず誰が勸めるでもなく、人々自ら其の必要を感じて來て、何等かの方法に依つて、吾々が精神に少くとも安慰と云ふものを得ていかなければならない。それには先づ最も手近な事は何かと云へば、やはり静坐と云ふやうな所に落て來るに違ひない。其のやうな譯て、多少學問をしたり、或は考へたりする人は皆なさう云ふことをやつて居るやうてある。ところて世間だけてはさうてあるが、佛教本來の意旨から言へば、各宗に皆な禪定と云ふものが伴はなければ、眞の佛教にはならぬ。言ふまてもなく、若し佛法を鼎の如きものに譬ふれば、其の三足は戒、定、慧、である。戒律と禪定と智慧の三足が具足しなければ、全く佛法の鼎と言はれぬ如く、佛法のどの宗旨にも、静坐がある。即ち佛語の坐禪法と云ふものがある。坐禪は專門として禪宗に限られてあるが如くてある

が、其の實どの宗門にもある。例へば淨土門の念佛と云ふのは、坐禪の一種であつて、只口で名號を稱へるのは、口稱念佛と別けて言うてをる。心に佛を念ずるのは念即坐禪である、世に念佛は坐禪以外の如く思うて居るものがあるが、是は坐禪の一種であつて、其外念佛ばかりでなく、種々の觀法禪法がある。苟も佛法と名の附た宗派は、幾派に岐れて居ても、それに坐禪の意味が缺けて居ては全からざるものである。殊に況んや諸佛頂上の禪を標榜して居る我が禪門に於ては、一行三昧とも言ひ諸佛頂上の禪とも言うて、絶對に此法を實修するのである。印度あたりでは、御釋迦様の出生前から既に坐禪が盛に行はれて居たことは書物の上でも明瞭である。又秦西の方もさうであつた、羅馬の旺盛なりし時代には、羅馬武士の精神を鍛練すると云ふことから、彼の「ストキック」―「ストア」學派と云ふものがあつて、一種の坐禪をやつたらしい。其「ストア」學派なるものゝ意味に依ると、總て外界の物のために、我が心を動さず人能く我に主たらば即ち克く物に主たるを得ると云うて、即ち不動の心を養ふと云ふのが羅馬武士の精神を鍛練した一の修養法であつた。其他支那に於ても、孔子はさう云ふやうなことを言はれたやうに見えぬけれども、孟子は明かに其の意味を言ひ現はして居る。學問之道無レ他其求二其放心一而已矣、殆ど靜坐法の要を得て居る。さうして其放心を求むる方法として夜氣を存するの說を立てた。或は又孟子の中に我善養二吾浩然之氣一とあるも、やはり靜坐の意味を現はしたことになる。或は又「萬物皆吾に備はる、己に反らふて誠なれば樂之より大なるはなし」などと言うてをる。

それから漸々下つて宋朝時代になると殆んど禪魂儒才と云ふ樣な風で、儒者は皆な禪風に感化せられてをる。其排佛家と云はれた人々までが、矢張禪坊主の口吻を學んでをるのも珍なことである。例へば程明道などは、主一無敵と言うて居るが、全く禪宗の公案と同じことである。又敬以て內を正せば、浩然の氣ありと云ふやうなことも言うて居る。弟の程伊川になると、一人の心が直に天地の心と相通ずると云ふ、殆ど禪宗の提唱と同じことである。「心の紛亂を免れんと欲すれば、心の主あることを要す、主ありとは敬なり」などゝ云うてをる。或は又程明道の學風を受け嗣だる朱子の如きも、門人をして恆に靜坐工夫を勵ましたものである。朱熹の言ふ所によれば、此心を收斂して思慮に走るなくんば此心湛然として無事なり」、斯う云ふ事を言うて居る。其他朱子の語錄などを見ると、段々說て居るが、心の人に在る、是れ人の人たる所以なり、禽獸草木と異なる、之あるが故なり、放つて求めざるべけんや、と斯う云ふ有樣で、其他宋朝時代の儒者は、悉く大同少異である、啻に靜坐を說くばかりでなく、禪門の道を極めて居る人も澤山ある。宋朝から元朝、明朝に至りて、儒者も多勢あるが、王陽明などに至ると、殆んど禪僧の提唱と同じことを言うて居る。理を極めて明かならざれば則ち之れを心に求む」と云ひ、又人は唯至善の吾心に在るを知らずして、之れを其の外に求め、以て事々物々、皆な定理ありとなして、至善を事々物々の中に求む、是れを以て支離決裂、錯雜紛紜して、

一定の方向あるを知ることなし、今や既に至善の吾心にあるを知て、外に求るに假らざれば、即ち志は一定の方向ありて、支離決裂、錯雜紛紜の患なし。支離決裂、錯雜紛紜の患なければ、則ち心妄に動かずして能く靜なり、心妄に動かずして能く靜かなれば、則ち日用の間從容閒暇にして、能く安すし、能く安ければ、凡そ一念の發、一事の感、夫れ至善なるか、など丶言うてある。斯う云ふやうな有樣で、是れは一端だけを擧げたのであるが、日本に於てもさうてあつて、陽明學派を祖述したのが、中江藤樹近江聖人と謂はれた人、此の人の說なども同じことを唱へて居る。即ち藤樹翁が或人に與へた手紙の中に書てあることて、

心裡には常住不息の良知の主人公御座候、此君に御對面なされ、工夫御勤め候へば何時なく、浮氣除き申べく候、扨又工夫間斷なく候へば、程なく主人公に御對面あるべく候、主人公に御對面以後は、萬事顚倒除きやすきものにて候。

斯う云ふやうな有樣であるが、其他山鹿素行なども王陽明流の學問をした人であつて、それらの人の考へが實行に現はれ或は君に對して忠ともなり親に對して孝ともなつて居る。山鹿素行に私淑した大石良雄などは、其の尤なる者である。さう云ふ人が平生精神的に之を究むるのみならず、實行的に試み、發して以て元祿の四十七士の働きと云ふやうなことになつた。そんな事を言うて居ると長らしくなるから略して置きますが、大體宋朝から明朝にかけて殊に靜坐法と云ふやうなことを奬勵したものと見える。ところで話が大分枝葉に涉つたが本文に戻つて言ふと、禪門では道を究むるは靜坐に在りとして居るが其の意は如何と問うた。余曰く、先師洪川の曰く、但だ禪門のみならず宋儒も亦靜坐を勤む、是は餘程手和かに答へられた。我が禪宗で靜坐と言ふのは勿論のこと、宋朝時代の儒者すらも亦靜坐を勤む。是に就て二つの辭を擧げられた。朱熹の云うたことによると、明道は人をして靜坐せしむ。明道は今言うた所の程明道だ。此人も常に自分の門人に靜坐をさせた。延平も亦人をして靜坐せしむ」。延平は李延平と云ふ有名な學者であるが、此人も亦人をして靜坐せしめた。是だけの辭を擧げたのであるが、李延平が朱熹に答へた手紙の中に「某羅先生に從つて學問す、終日相對して靜坐するのみ、未だ曾て一雜談に及ばず、先生靜中に喜怒哀樂未だ發せず、之を中と謂ふ、未だ發せざる時何の氣性をかなす」斯う云ふ事を門人に工夫せしめられた。言ひ換れば、天地未發以前、本來の面目如何と云ふも同じて、斯う云ふ風に直覺的に、坐禪工夫せよと示された。又朱子が何叔京に答へた書に、李先生、人をして、靜中に於て大本未發の氣象を體認せしむ、是れ即ち龜山門下相傳の指訣なり」斯う言うてある。そこで本文の蓋し人の大道何物たりやを知らざる所以は精神の定まらざるに由る。是は先師の辭で、吾々は恒に大道と云ふことを口にして居る。即ち佛敎では眞如とか、菩提とか涅槃とか、佛性とか、口には恒に唱へて居るが、サテ大道其ものは何てあるかと云ふことを悟り得ることが出來ぬと云ふのは何故かなれば、畢竟精神が定らざるに由るのである。大道は其のやうに遠方

にある譯のものではない。實は吾が臍の下にブラさがつてをることである。然しながらそれが認められぬと云ふのは、全く吾が精神の定らざるに由ると云ふ。成程太陽は赫々として、光輝を放つて居るが、自分の手を以て吾が眼を掩うて居れば、太陽の光を見ることが出來ぬやうな有樣で、いかに大な聲で叫んでも、自分の手で耳を掩うて居れば、聞くことが出來ぬと同じことである。精神の定まらざる所以は、外物の來りて之れを擾すに由る。御互に暫く坐つて居ても、過去を念し、未來を想ひ、死んだ子の年齡を算へてをらぬと思へば、未だ見ぬ先きの女のことなど考へてをる。そんな安排で、目前にちらつく空中の花の如く、幻の如き、取り止めのない事を心に感じ、煩悶し、懊惱し、忘想分別して居るのである。外物來つて之を擾すに由る。皆な外界の刺戟、若くは誘惑、いろ〳〵の物を吾が心に持ち來す、それがために搔き擾され、元來主人たるべき筈の心が、却て物の奴隷となつて、洵に冠履轉倒して居る。故に先づ靜坐に依つて工夫を凝らし、以て外物人を空すべし。一切外界の物を退け、直ちに己れが主人となつて、一切外界の物を使ひ廻すと云ふ態度でなければならぬ。王陽明の辭を以てすれば、見聞覺知爲ニ外賊一、情欲意識爲ニ內賊一、唯能主人公惺々夜坐ニ中堂一、則賊便化爲ニ家人一と其通りて、見聞覺知は外から來る盜賊である。其盜賊にもいろ〳〵ありて中には內の家族のやうな良い顏をして居りながら、惡い事をして居る奴も居る。けれども、內外の賊に誑かされないやうな確かりした主人公が、夜る夜中と雖も、チャンと奧座敷に坐つて居ると、いつの間にか其の賊が主人の德に化せられて、而も忠實なる家族の一人となる。故に主人さへ確かりして居れば、さう云ふ有樣だと云ふのが、王陽明の敎へ方である。又曰く山中の賊は平げ易く、心內の賊は平げ難しと、洵に適切なる修養訓である。それは先づ靜坐と云ふことに依て工夫を凝らし、以て外界の物を空ぜねばならぬ。靜坐の作法は皆な御存じの如く、脊梁骨を立つて、世界中を臍下に押込んでしまつたやうな心で、一切の物を氣海丹田にたゝみ込み、さうして腦髓の頂上から、足の爪先まで、ズツト全身の力を此所に集中し以て、未生以前、本來の面目如何と直ちに斯う這入つてゆくのである。此時右を顧み、左を眄めたりするやうな態度でなく、一氣に恰も吹毛劍を眞向に振翳した如くにして進む。さう云ふ安排に工夫を凝し、外物を空ずる。然し外界の物を態々空じやうとしなくとも、眞箇公案三昧に成つたならば、外物は自から空ぜられてしまふ。ところが肝腎な根本の方に力を用ひずして、枝葉の方の仕方を用ひて居るから大變苦しいやうに思ふ。言はゞ本を務めずして、末に走つて居る。公案を御留守にして別に雜念を退却させやうとする、それではいかん。斯くして以て外物を空ずれば便ち神定まる。と云ふのぢや。外界から來る物が皆な空ぜられてしまへば、そこで初めて精神が定つて、禪定の境界が現はれる。いろ〳〵の雲や霞が晴れてしまへば、太陽の光が自から現はれる。神定まれば便ち性珠燦然として目前に現前す。禪定の意味が其所に出て來る。性珠とは珠に譬へたので、本心とも謂ひ、本性とも謂ひ、また本來の面目とも謂ふ。其のものは珠の透明なるが如く、燦然として目前に現はる。

『坐禪儀』に珠を探らば其の波を靜むべし、動水には採る事應さに難かるべし。定水清澄なれば、心珠自ら見むる。とありて、明々白々、最と見易き道理であるが、實行となると、なか〳〵難い。之れを捕甎し、俯して地芥を拾ふが如きのみ。此の境界に至つたならば、恰も地上に落て居る物を無雜作に取上げると同じやうなものである。然りと雖も謂ゆる靜坐は、六朝の清坐、宋儒の靜坐と異るなり。却說其の靜坐なるものにもいろ〳〵ある。或は六朝時代の遁世的の清坐あり、又前に述べた宋朝時代の學究的の靜坐もあるが、其等は所謂凡夫禪、外道禪の部類で、吾が諸佛頂上の禪とは大に趣を異にしてをる、佛は之れを正思惟と謂ふ。之れは正思惟とも、靜慮とも唱へ、其外種々名は異なつて居るが、以て坐相上に在らず。必ずしも坐相の上ばかりに重きを措く譯でない。然し是は早合點をしてはいかん、或者は何も吾々は脚を曲げたり、目を瞑つて、窮屈千萬にむづかしい顏をして、坐つて居らんでも可い譯で、所謂行亦禪、坐亦禪であるなどゝ大言してをる輩もある。成程了事の衲僧歩行して居ても、坐つて居る時も坐禪、話をしながら寐た時も寐た時も、咳唾掉臂痾屎送尿、さては活動寫眞を見て居る時でも坐禪、乃至酒肆娼房に居る時でも、大寂定中には違ひないけれども、テンデまだ坐る事すら知らぬ初機のものが、既に悟りきつて、後に言うた越格の宗師の辭などを、胡椒丸る呑みに受賣りしたりすると、とんでもない間違が生ずる。坐相は勿論大切なものである。今此所ではさう云ふことは通り拔けた後の事を言うて居るので、本末を誤つてはいかぬ。造次にも必ず此に於てし、顚沛にも必ず此に於てす。寸時も油斷をしない、造次顚沛、有らゆる時、常に此心を失はぬ。故に此意味に於て、古人は汝等諸人は、十二時中に使はれ、我は只十二時中を使ひ得たりと言はれた。白隱和尙も動中の工夫は靜中の工夫に優ること百千萬倍なりと言はれた。昔の禪宗の祖師方を看よ。或は米搗きをやつたり、芝刈りを仕たり、所謂拽石搬土汲水擔薪みな神通妙用なりとは此動中の工夫の事である。

若し但だ目を閉ぢ睛を藏め、寂を愛し鬧を嫌ふを以て靜坐となす、是れ正靜にあらず。果して邪靜なり。是は讀て字の通り、靜坐の邪正を擇ぶのである。喩へば牛の車を曳くが如く、車若し行かずんば、是車を打せんか、是牛を打せんか、と古人は諭された。即ち坐相は車で、精神は牛である。故に古人は須らく活句に參ずべし、死句に參ずる勿れと、誡しめられた。眞に親切なる垂示である。

或るひと問ふ、孔門の敎、學に依り藝に遊ぶ、今師學藝を外にする何ぞや。余曰く、學藝の如きは初學因地一事なり、孔門の蘊奧に至つては、德性を明にするに在り。又或人が問ふに孔子の敎では專ら裕樂射御書數を敎ゆるを大切にする。然るに今其の學藝を外にして、唯だ坐禪の一法を奬勵せらるゝのは何故かと云ふ。禪師が曰はるゝに、それは子供の成人しかゝたものゝ學ぶべき事で、孔門の蘊奧に至りては、所謂明德を明かにすると云ふ。是れぢや、是が眞の孔門の本領である。『中庸』に君は德を貴ぶとあるのも、こゝである。故に眞意は冊子上にあらず。眞意は書物の上ばかりではない。孔

子云はずや、言なからんと欲す。『論語』にある辭で、又曰く、賜や女予を以て多學にして、之を識る者と爲すか、對て曰く、然り、非なりや。孔子が子貢に對して、予を物識りのやうに思うて居りはせぬか、どうかと言はれると、對て曰く然り、さう思ひますがと曰うた。人間は其人格相應に物が眼に映ずるもので、子貢は子貢らしく考へて居る。然り非なりや、さう思ひますが、さうではございませぬかと云うたら、曰く非也。予は一以て之を貫く。この孔子の答は、我々の一言を挿む餘地もない。和尚盤托出夜明珠とでも云うておかう。山野常に謂ふ、儒亦教外別傳の一著ありと、此れ之の謂なり、不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛は禪宗の看板である、扨て其は禪宗ばかりと思うて居たにも拘はらず、豈圖らんや、儒門にも亦教外別傳の奥の手があるとなり。先師は玆に着眼して、後編三十則を拈提せられたのである。

第二十七講　或問（其三）

或問。近世有大儒。唱明之李王二家學風。主張古文辭。其言曰。道則高矣美矣。謂劣之質不可企及。故卑卑焉求諸事與辭。又曰。聖人之心。唯聖人而後知之。亦非今人之所能知也。今師頻說其不可企及之道。汲汲勸之弟子甚惑矣。余曰。今日望之。天邊寸碧者。明日踐之。蹶下千巖也。謂道者高遠。而斷然無志於進修。只甘就干卑以爲足者。是自慢且謗孔子者也。余少時。遊其學有年焉。初未知其言之戾聖意。中間自知學風之膚淺。乃罷去。從事宋學。曰。請問其說。余曰。中庸曰。道不遠人。人之爲道而遠人。不可以爲道。孟軻曰。道在邇。而求諸遠。事在易。而求諸難。是當知道之可企而及矣。書曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。顏淵曰。舜何人也。予何人也。有爲者亦如是。孟軻曰。何以異於人。堯舜與人同耳。是當知聖人之心亦今人之可修而至矣。賢哲之言。豈欺人矣哉。如儒士之言。孔子所謂女畫者也。夫詩書所以垂訓于後世。使人由是履先王之道者也。然唯學其辭。而不修其道。則與讀演戲稗說同焉。禮樂所以象法乎天地。使人由是正性情。節萬事者也。然唯學其事。而不正其性情。則與觀戲劇亂舞同焉。是豈非誹謗孔子耶。余雖有舊恩義于彼學。今成此言者。與其得怒於彼儒士。寧可忍得罪於孔子乎。

或問。道分爲神儒佛老。今學神如何。余曰。是則是。恐被神見淨見障礙。云。學儒如何。曰。是則是。恐被文字禮則障礙。云。學佛如何。曰。是則是。恐被佛見法見障礙。云。學老如何。曰。是則是。恐被冲虛見障礙。其人懵然不知問。余曰。唯學道。道無別名。神儒佛老。唯是箇道。恰如一太陽照臨上下四維。其光無所不到矣。只學者眠有知見學習之雲霧。或落在儒見。或坐在佛見。是非大道有同異。以眼見有障礙也。故神家者流。拂盡其障礙。謂之止天原。儒家者流。拂盡其障礙。謂之明明德。佛家者流。拂盡其障礙。謂之見性成佛。老家者流。拂盡其障礙。謂之得衆妙之門。問者默。而退焉。今爲諸仁者言。若欲學神。先向御中主以前而求焉。欲學儒。先向三皇以前而求焉。欲學佛。先向威音王以前而求焉。欲學老。先向黃帝以前而求焉。然則道莫竇逕。見莫異端。値佛神受用。値儒儒受用。値佛佛受用。隨處爲主。更無障礙。矣是吾教外別傳之玄旨。即孔子一貫之要訣也。學道者。請自此始。

和訓　或る人問ふ、近世大儒有り、明の李王二家の學風を唱へ、古文辭を主張す。其言に曰く、道は則ち高し美し、謂劣の質、企て及ぶべからず、故に卑々焉として、諸を事と辭とに求む。又曰く、聖人の心、唯聖人にして而して後之れを知る。亦今人の能く知る所に非るなり。今師頻に其の企て及ぶべからざるの道を說いて汲々として之を勸む、弟子甚だ惑へりと。余曰く今日之を望めば、天邊の寸碧なるもの、明日之を踐めば脚下千巖なり。道は高遠を謂つて斷然進修に志なく、只甘んじて卑きに就き、以て足れりと爲す者、是れ自ら慢じ、且つ孔子を謗る者なり。余少時、其の學に遊ぶ年あり初め未だ其言の聖意に戻るを知らず、中間自ら學風の膚淺なるを知り、乃ち罷り去る。宋學に從事し、曰く、其說を請問す。余曰く、中庸に曰く、道人に遠からず、人の道として人に遠きは、以て道とす可からず孟軻曰く。道は邇きに在り、而るに、諸を遠きに求む、事は易きに在り、而るに諸を難きに求む。是れ當に道の企て及ぶべきを知るべし。書に曰く、惟れ聖も念ふ罔ければ、狂と作る、惟れ狂も克く念へば聖となる。顏淵曰く、舜何人ぞや、予何人ぞやと、爲す有る者は亦是の如し、孟軻曰く何を以て人に異ならん、堯舜も人と同じきのみ。是れ當に聖人の心も、亦今人の修めて至るべきを知るべし。賢哲の言豈人を欺かんや。儒士の言の如きは、孔子の謂ゆる、女畫れりと言ふ者なり。夫れ詩書は訓を後世に垂れ、人をして是に由て先王の道を履ましむる所以の者なり。然るに唯だ其辭を學んで、其道を修めず、演戲稗說を讀むと同じ。禮樂は法を天地に象どり、人をして是に由りて、性情を正さしめ

萬事を節する所以の者なり。然れども唯其事を學んで、其の性情を正さゞれば、則ち戯劇亂舞を觀るに同じ。是れ豈孔子を誹謗するに非ずや。余彼の學に舊恩義ありと雖も、其怒を彼の儒士に得るよりは、寧ろ罪を孔子に得るに忍ぶべけんや。

或る人問ふ、道分れて神儒佛老たり、今神を學ばゞ如何。余曰く、是は則ち是、恐らくは神見淨見に障礙せられん。云く儒を學ばゞ如何。曰く是は則ち是、恐らくは文字禮則に障礙せられん。云く佛を學ばゞ如何。曰く是は則ち是、恐らくは佛見法見に障礙せられん。云く老を學ばゞ如何、曰く是は則ち是、恐らくは冲見虛見に障礙せられん。其人憒然として問ふことを知らず。余曰く、唯だ道を學べ、道に別名無し、神儒佛老、唯是れ箇の道、恰も一太陽の上下四維に照臨して其光到らざる所無きが如し。只學者の知見學習の雲霧ありて、或は儒見に落在し、或は佛見に坐在す。是れ大道に同異あるに非ず。眼見に障礙あるを以てなり。故に神家者流は其の障礙を拂盡して、之を天原に止むと謂ひ儒家者流は、其の障礙を拂盡して、之を明德を明にすと謂ふ。佛家者流は其の障礙を拂盡して、之を見性成佛と謂ひ、老家者流は其の障礙を拂盡して、之を衆妙の門を得と謂ふ。問ふ者默して退く今諸仁者のために言ふ、若し神を學ばんと欲せば先づ御中主以前に向つて求めよ。儒を學ばんと欲せば先づ三皇以前に向つて求めよ。佛を學ばんと欲せば、先づ威音王以前に向つて求めよ。老を學ばんと欲せば、先づ黃帝以前に向つて求めよ。然れば則ち道に實逕なく、見に異端莫し。神に値うては神を受用し、儒に値うては儒を受用し、佛に値うては佛を受用し、隨處主と爲り、更に障礙無し。是れ吾が教外別傳の玄旨、即ち孔子一貫の要訣なり。學者請ふ此より始めよ。

【講話】　本席で先づ、『禪海一瀾』の上卷丈けを終る積りであります。これも一々委しきことを申して居りますと、今素讀した丈けでも一回や二回を重ねるか知りませぬが、大分『禪海一瀾』が長引きましたゆゑ、兎も角今回は此の上卷を結了することにしませう。或人問うて、「近世大儒あり」これは誰〻を指すといふ委しいことを、今此處で擧げることは出來ませぬが、此時代の儒者先生達は「明の李王二家の學風を唱へ古文辭を主張す」李といふのは、これは李于鱗といふ人を指して居る、これは有名な人で、王といふのは王元美のことであります。「李于鱗といふ人は名は攀龍と言て、歷城といふ所の人で、明の嘉靖年中に進士となつた人である。號を滄溟と言ふ、詳しいことは、其傳に就て見る可し。王元美といふ人は、名は世貞と言て、號を鳳洲亦は弇州と言ふ。明の嘉靖年中に進士となつた人で、是も詳しいことは、其傳にあります、共に明の大儒であつた。日本では物徂徠や何かが、此の李王の學風を唱へて居つたのであります。古文辭を主張するといふのは、此時代の儒者といふ者が、詩を作れば必ず盛唐を學び、文と言へば秦漢の文を學ぶといふのを、此處では古文辭と言て居る。其の李王二家の學風を唱へて、巧に古文辭を弄すといふことが、專ら彼等の腐心する所であつた。さういふ輩の常に言ふことには、「道は則ち高し美し」で、大道といふものは、幽玄高妙、誠に善美なる所のも

のである、「謙劣の質企て及ぶ可らず」到底我々の如き淺墓なる所の資質の者には、企て及ぶ可らざる所の者である。それ故に「卑々焉として諸を事と辭とに求む」大道研究の如きは、容易に出來得られないから、詩を作つたり文を拵へて、今日目の前の事と、さうして文事とに之を求めて居ると、斯う自ら言うて居る。又斯ういふ輩が言ふのには「聖人の心は唯聖人にして而て後に之を知る」、聖人の心は聖人でなければ分らぬ。佛敎の中にも、唯佛と佛のみ之を知るといふことがある、到底凡人の知ることはない。其れに我々が企て及ぶ樣なことを自ら言ふのは誤つて居る。「今人の能く知る所に非る也」と言て居る、然るに「今師頻に其の企て及ぶ可らざるの道を說いて汲々として之を勸む」然り大道は到底今人の企て及ぶ可らざる所のものであるのに、それを汲々として勸められるといふことは、甚だ私共には分らぬ「弟子甚だ惑へり」。それに對しての先師洪川和尙の答に、「余曰く今日之を望めば天邊の寸碧なる者明日之を踐めば脚下の千巖也」これは面白い言葉であります。彼の水戸の黃門光圀卿の歸依僧であつた、東皐心越禪師の歌に

「昨日まで空たかくのみ見しもまた今日は雲ふむ木曾のかけ橋」

其歌の通り、大道も亦さうて、只自ら足を進めずして、立止つて遠方を眺めて居れば天邊の寸碧で、到底攀ぢ登れぬが如くであるけれども、自ら足を進めて、一歩は一歩より彼れに近づいたならば、昨日まで望んで天邊の寸碧であつたものが、今日はモウ脚下の千巖で、雲ぢやと思つたものが、今日は足の下の岩ぢや、それと同じで「道は高遠と謂つて斷然進修に志なく」、斯ういふ所は一々辯を加へんでも分つて居る。始めよりして思ひ止つて、進修に志が無く「只甘んじて卑きに就き以て足れりと爲す者」、自ら甘んじて下劣の漢となつて居る。「是れ自ら慢じ且つ孔子を謗る者なり」、自ら自身を欺くのみならず、孔子の本意を失うのであるから、孔子を誹謗するも同樣である。「余少時其學に遊ぶ年あり」、斯く言ふ洪川も、子供上りの時分には、藤澤東畝先生に就て學んだ。これは後に至つて先師の傳記を言ふことがあらう。前にも少し言うたがことあります。初め未だ其言の聖意に戻るを知らず」、其少年時代には、さういふことをするのが、別に孔子の本意に背いたとてもないと思つたが、扨て段々年を加へて「中間自ら學風の膚淺なるを知り乃ち罷り去る」、只斯ういふ詩を賦したり文を作つたりして居る、こんなことが孔子の道ならば、實に淺墓なことであるといふことを知つた故に、それを捨て去つた。それから「宋學に從事す」宋學といふのは矢張り儒學には違ひないが、同じ儒學でも、餘程心理學的になつて居る。別言すれば文章學を廢して、心學に心事した。所が問ふ人が言ふに「其說を請問ふ」其の文章學を廢して心學に從事された。あなたのお說は如何と問うた。「余曰く、中庸に曰く、道人に遠からず人の道として人に遠きは以て道とす可らず」。元來道と人といふものは、影と形と程の親しい關係である。所が人の道として、人の心から生まれ出た道であり乍ら、それが人に遠いといふならば、眞の道を云ふことは出來ない、斯く明に『中庸』にも言うて居る。又『孟子』の言葉を一つ擧

げれば、「道は邇きに在り而るに諸を遠きに求む、事は易きに在り、而るに諸を難きに求む」道といふ者は近い所にある、毎日食ふ上にも、寢る上にも、起きて働く上にもある筈だ。王陽明の詩に飢來喫飯困來眠、唯此修行玄更玄、說與他人渾不信、却從身外覓神仙なか〳〵妙ぢや。之を禪宗風に言へば、如何なるか是れ道と尋ねたら牆外底と答へた、玄關を出れば直ぐ道だ。問ふ人がそれは人の歩いて居る道であります。大道をお尋ねしたいと申したら、大道は長安に透ると答へた。モウ一歩進んで本通りへ出て見ろ、大道は眞直に東京へ通じて居る。禪的の修養になつてくると、さういふ手近いものだ。別に形而下だの形而上だのと、そこに境がある譯ではない。元來道といふものは極手近いもので、足元から鳥の立つ樣なものである。然るに多くの人が道といふとキョロリとし、目を犂つて大層遠方を眺める者が多い。何に事も其通りで、元より易きに在るものを、態々六ケしくして居ると斯う孟子が言うて居る。「是れ當に道の企て及ぶ可きを知るべし」、大道といふものは、さう絶望すべきものでない。志ある者ならば、直に至り得られるものである。又「書に曰く」これは下の三十則中に一則として別に出て居りますから、詳しいことは其時に至つてお話をしますが、これは『書經』の周書多方篇の成王が諸侯に誥げた言葉で、「惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作る、惟れ狂も克く念へば聖と作る丁度我々の身體は大地を歩いて居つて倒れる。其代り大地に依て起きる、倒れるのも起きるのも皆土の上の話である。狂となるのも此の心、聖となるのも此の心、詰り心の向け方一つであると、斯う「書經」にはある。又「顏淵曰く、舜何人ぞや予何人ぞや」、これは餤に强い言葉であります。儒道の方では何ぞと言ふと堯舜を祖述する。堯と言ひ舜と言て聖人と稱して居るが、別に三頭六臂の人間でない、舜何人ぞ、予何人ぞ、予と同じく眼横鼻直の人である。「爲す有る者は亦是の如し」、誰でも一つ一番やらうといふならば舜たり得ることも出來やう、堯たり得ることも出來やう、又孟子が言うた、「何を以て人に異ならん、堯舜も人と同じきのみ」堯でも舜でも予と寸分違つたことはない。斯ういふ工合に例を此處に擧げられた、「是れ當に聖人の心も亦今人の修めて至る可きを知るべし」何時でも道の方では少しも拒まない、今人と雖も、修めて道に至ることが出來るといふことが分らう。「賢哲の言豈人を欺かんや」、今擧げたのは、皆賢哲の言葉であるが、決して我々を欺かない。「儒士の言の如きは、孔子の謂ゆる女畫れりと云ふ者なり」然るに最初擧げた時の儒者が言うて居る樣な、到底大道を企て及ぶ可らざるものである。我々は詩を作つたり文を作つて居れば宜いといふ樣なことを考へて居るのは、孔子の言葉にある樣に、女畫れる者で、踐出せば易らかに登れる者を、自分が踐止つて居つて、モウ此處で宜しいと言て居ると同じ樣なものである。女畫れりと言ふ言葉の出所は『論語』の雍也篇に、孔子が言はれるに、賢なる哉回や、一簞の食一瓢の飲陋巷に在りて人は其憂に堪へず回や其樂を改めず賢なる哉回やと、大層顏回を賞められた。さうしたら弟子の一人たる冉求が、子の道を說ばざるには非ず力足らざれば也と言つた。時に孔子の言はれるに、力足らざる者は中道にして廢す、今女畫れり、力

が足るか足らぬかは一つ足を進めて見よ、歩ける丈け歩いて其上歩けぬならば中道で止めても宜いが初めから一歩も足を進めないでどうも私は進めませぬと言ては、女畫れる者であると、孔子が言はれたが、さういふ輩も隨分世の中には澤山ある、それと同じ事だ。夫れ詩書は訓を後世に垂れ人をして是に由て先王の道を履ましむる所以の者なり、儒道の方で言ふと『詩經』又は『書經』斯ういふ樣なものは敎を後世に垂れてさうして人をして先王の大道を履み行はしめ樣が爲に、孔子は此の『詩書』を作られたのである。然るに「唯其辭を學んで其道を修めず」其言葉丈けを學んで其道を修めなければ、「演戯稗說を讀むと同じ」演戯といふのは、此處では繪本といふ位に見て置いて宜い、稗說といふのは詰り小說みた樣なもので、『詩書』を讀んでも小說本を讀んで居ると同樣である。「禮樂は法を天地に象どり人をして是に由て性情を正さしめ萬事を節する所以の者なり」、之に就ても古人の言葉を擧げればありますが、『樂記』には大樂は天地と和を同じうす大禮は天地と節を同じうす、故に百物節を失はず、故に天を祀り地を祭る」云々、斯ういふ工合に示して居る。又曰く「先王の禮樂を制するは、以て口腹耳目の欲を極むるに非ず、將に以て民をして好惡を平にして、人道の正に反らしめんとするなり」。それから又「君子曰く禮樂は斯須くも身を去る可らず、樂を致して以て心を治れば則ち易直慈諒の心油然として生ず、易直慈諒の心生ずれば、則ち樂む。樂ければ則ち安し、安ければ則ち久し、久しければ則ち天なり、天なれば則神なり、天は則ち言はずして信、神は則ち怒らずして威あり、樂を致すは以て心を治むる者也、」斯ういふ樣な有樣、段々例を擧れば澤山あるがさういふ意味だ、「然れども唯其事を學んで其性情を正さゞれば則ち戯劇亂舞を觀ると同じ」戯劇といふのは日本言葉で芝居ですす、亂舞といふのは能狂言みた樣なものである。詰り禮と言ひ樂と言つて、其事を學んでも其性情を正さなかつたならば、芝居や亂舞を觀ると同じである。『樂記』の中に樂は中より出づ、禮は外より作くる、樂は中より出づ故に靜なり、禮は外より作こる故に文なり」斯ういふ樣に禮と樂との別ちを示した言葉もある。「是豈孔子を誹謗するに非ずや」本を忘れて末に走つて居つたなら孔子を誹謗すると同じてはないか。「余彼の學に舊恩義ありと雖も」余も子供の時には記誦の學問をやつた、詩を作つたり文を作つたりすることを敎へられた恩義がある。恩義があるに拘らず、今斯の如きことを言ふのは「其怒を彼の儒士に得るよりは、寧ろ罪を孔子に得る忍ぶ可けんや」此二つの內何れを取るならば、其の記誦の學問を本領として居る儒者の怒りを得るよりも、寧ろ罪を孔子に得るに忍ぶ可けんやて、それ等の人には背いても、孔子に背くに忍びぬと辯ぜられた。

「或人問ふ、道分れて神儒佛老たり」此より前篇の結論に入るのてある。先師の力瘤を入れられた所を篤と御覽あれ、好肉に疵を生ずるから無駄な辨解は或るべく避る樣にする。或人が問ふに、道が分れて神儒佛老となるが「今神を學ばゞ如何」今私が神道を學ぶとしたらどうてござらう、「余曰く是は則ち是」それは宜しいが、「恐らくは神見淨見に障礙せられん」神見淨見に障礙せられるてあらう、然

らば儒道を學ぶとしたらどうてござらう「曰く是は則ち是」それは宜しいが「恐らくは文字禮則に障礙せられん」文字や禮則に障礙せられるてあらう。然らば佛を學ばゞ如何、佛道を學ぶとしたらどうてござらう、「曰く是は則ち是」それも宜しいが、「恐らくは佛見法見に障礙せられん」佛見や法見に障礙せられるてあらう。詰り儒を得たらば、儒を忘れなければならぬ、佛を得たらば佛を忘れる迄に至らなければ本當てない。悟つたら悟りの跡方はない、會得したら會得した圭角はない筈だ。それだから禪宗に於ては、斯云ふ垂示もある、曰く文殊普賢昨夜佛見法見を起す、各々二十棒を與へて、二鐵圍山に拋行し了れりと、文殊普賢は佛法に於ては。悲智の二つの表象である。其れても未だ屆かぬ所があると云ふこれは禪宗の室內て最も向上の調てある。それ故先師が言はれるには、佛法を學ぶのは結構だが、佛見だの法見だのに妨げられるだらうと、然らば老を學ばゞ如何、「曰く是は則ち是」それも宜しいが、「恐らくは沖見虛見に障礙せられん」此處で言うて居る所の神見淨見は神ながらの大道て又文字禮則といふものは儒道に缺く可らざるもので、佛見法見といふものは佛法の極致て、沖見虛見といふものは老子敎の奧祕てある。然るに我が臨濟宗には奪人不奪境、奪境不奪人、人境俱奪、人境俱不奪の四料簡と云ふものがあつて自由自在に人を接得する。今先師が其手なみを以て皆奪ひ取て仕舞つた。「其人憎然として問ふことを知らず」其の問うた人が憎然として仕舞つた。「余曰く」餘り氣の毒に思つて斯ういふことを言はれた、「唯道を學べ」大道を學ぶが宜しい。丁度家の中に這入つて居つて建物を評論しやうとするから全體を見ることが出來ぬ。此家の中から外に出て青天井に立て建物全體を見よと言ふも同じてある。「道は別名なし」神も儒も、佛も老も、其他有ゆる宗敎、有ゆる道德、此處に至つては大風呂敷を廣げた樣なもので、皆此中に入れてある。彼の布袋和尙の袋を見よ、布袋和尙はあゝいふ一種の散聖的の態度で以て、大なる佛事を爲した。あの人は大きい袋を持て、それを引摺り廻して歩いて居る。何でも嫌ふ底の法なしで其袋の中へ打込む、銀の猫でも金の茶釜でも、下駄も燒き味噌も何でも、サラゲこむ。何時でも往來を歩いて居る人の後方からポンと脊中を叩く、其人ビックリして後を振向く、和尙手を伸べて一文お呉れと遣る。さういふことをした人てあるが、丁度布袋和尙の樣に何も彼も皆大道てふ袋の中に入れて居る。「神儒佛老唯是れ箇の道」て「恰も一太陽の上下四維に照臨して其光到らざる所なきが如し」、太陽は夜もなければ晝もない。夜があるとか晝があるとかいふのは、見る方の此方から言ふので、太陽自身は雨が降らうが風が吹かうが、雲霧が掛らうが何の障礙もない。「只學者の眼に知見學習の雲霧あり」、我々の眼に知見だの學習だのといふさういふ雲だの霧だのが色々眼に掛つて居る。それが爲に「或は儒見に落在し或は佛見に坐在す」儒と言へば儒に落在し、佛と言へば佛に坐在して居る。「是れ大道同異あるに非ず、眼見障礙あるを以てなり」、中々先師は大見識で、「故に神家者流は其障礙を拂ひ盡して之を天原に止ると謂ふ」「儒家者流は其障礙を拂ひ盡して之を明德を明にすと謂ひ」「佛家者流は其障礙を拂ひ盡して之を見性成佛と謂ひ」「老家者流

は其障礙を拂ひ盡して之を衆妙の門を得ると謂ふ」茲處でも四料簡の機用がアリ〳〵現はれてをる。個様な處はクド〳〵しく辯するが野暮だ、先づ斯う先師が辯ぜられたので、「問ふ者默して退く」、分つたか、分らぬか、「今諸仁者の爲に言ふ」今私は總ての人に對して言ふが、「若し神を學ばんと欲せば先づ御中主以前に向つて求めよ」御中主の事は『古事記』なり『舊事記』なり國典を讀めば、能く分る。天御中主神が現はれたのが、吾國開闢の初めで、其の天御中主神が既に世に現はれた後に、神道を見やうとするから最早第二に落在する。「若し儒見を學んと欲せば、先づ三皇以前に向つて之を求めよ」三皇は所謂伏羲神農黄帝である。「若し佛法を學ばんと欲せば、先づ威音王以前に向つて求めよ」威音王といふのは、佛教の世界開闢說では、之が一番最初の人王である。「老を學ばんと欲せば先づ黄帝以前に向つて之を求めよ」老子教は大抵黄帝を祖述して居る。我が禪宗は何時も此立場から出て來るので、例へば父母未生以前本來の面目とか、或は國常立命の出現とか。言葉は色々に變つて居ますが、先づ此處をトックリ見屆けなければ、大道の本體に達することは出來ぬ。若し此處に塵一本でも現はれてから後はサイエンスとか、科學とかの研究の領分である。我々の宗教、就中禪道の本領は其物の現はれぬ以前に向つて其本體を見よ、と示して、直に宇宙の大精神に觸れしむるのである。「然らば則ち寶逕莫く」寶逕といふのは小路といふことで、吾眼中に陰翳がないから、道に寶逕なく見に異端なし。所謂隨處に主となれば立處みな眞なりである。「神に値うては神受用」、「儒に値うては儒受用」「佛に値うては佛受用」隨處に主と爲て更に障礙なし」。例へば觀音菩薩の如き童男となり童女となり、教師にも役人にも種々三十二應身となりて一切衆生を濟度せらるゝ有樣は丁度鏡が物を寫す如くに、來る者の姿を寫して、更に跡方を止めぬ。又玉の盤を走る樣に少しも凝滯せぬ。コーなければ悟も役にたゝぬ。「是れ吾が教外別傳の玄旨」則ち禪宗の極意であると同時に、それが「即ち孔子一貫の要訣なり」孔子が吾道一以て之を貫けりと言はれた要訣も此處にある。「道を學ぶ者請ふ此より始めよ」茲處で暗に下卷の三十則を呼起してをるのである。

第二十八講　明　德　（第一則）

大學之道。在明明德。在新民。在止至善。知止而后能定。定而后能靜。靜而后能安。安而后能慮。慮而后能得。

此是聖學之綱領。煉心之實法。而孔門之祕訣也。六經諸子之言。如山之高海之深。悉皆此一著子之註脚也。究之明白。曰聖。曰賢。曰狂。明德譬如一顆眞珠。圓明寂淨。都無差別相。以體明故。對物時能現一切色相。色自有差別。而珠無變易。如其

精微深妙之理。非筆墨言語可及。只在學者刻苦自得耳。自得之術。在止定靜安慮五者。是與吾門之靜坐工夫同。即錬心活法也。

竊按。正文自明德至能得。全用回文句法也。蓋聖者之屬辭也。製作參天地。意匠自則陰陽運行之氣象而擒藻。太可翫味矣。凡學者欲明自己本具明德。便先須修止定靜慮之法。久久功夫純熟。則一旦濶然有大所得矣。然後養己所得。以及衆人。俾衆人又明之。謂之新民。而於日用行事上。發揮明德之全光。上不恥天。下不恥人。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。謂之止至善。而尚以止定靜慮之法。煉來錬去。愈益明了明德。以不廢新民止善之眞修。幾回反復鍛錬。終而復始。如循環無端。謂之大學日新之道也。故下文曰。物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。其反復叮嚀。示人之意。至深切矣。學者其可不研究乎。

和訓　大學の道は明德を明にするに在り、民を新にするにあり、至善に止るに在り、止まることを知つて、而して後に能く定ることあり、定まつて而して後に能く靜かなり、靜かにして而して後に能く安し安うして而して後に能く慮る、慮つて而して後に能く得。

此れは是れ聖學の綱領、煉心の實法、而して孔門の祕訣なり、六經諸子の言、山の高く海の深きが如し。悉く皆此の一著子の註脚なり。之を究めて明白なるを聖と曰ひ、賢と曰ふ。之を昧くして、昏蒙なるを凡と曰ひ、狂と曰ふ。明德は譬へば一顆の眞珠の如し。圓明寂淨、都て差別相なし。體明なるを以ての故に、物に對する時、能く一切の色相を現ず。色自ら差別あり、珠は變易なし、其の精微深妙の如きは、筆墨言語の及ぶべきにあらず、只學者刻苦して自得するに在り。自得の術は止定靜安慮の五者に在り、是れ吾が門の靜坐工夫と同じ、即ち錬心の活法なり。竊に按ずるに、正文明德より能得に至る。全く回文の句法を用ゆるなり。蓋し聖者の辭を屬するや、製作天地に參ず、意匠自ら陰陽運行の氣象に則りて藻を擒く、太だ翫味すべし。凡そ學者自己本具の明德を明にせんと欲せば、便ち先づ須く止定靜慮の法を修すべし。久々功夫純熟せば、則ち一旦濶然として大に得る所あり、然る後己の得る所を養ひ、以て衆人に及ぼし、衆人をして又之を明めしむ、之を民を新にすと謂ふ。日用行事の上に於て、明德の全光を發揮し、上天に恥ぢず、下人に恥ぢず、志を得れば民は之に由り、志を得ざれば、獨り其の道を行ふ。富貴も淫すること能はず、

貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず之を止善に止ると謂ふ。而も尚ほ止定靜慮の法を以て煉り來り、錬り去り、愈〳〵益々明德を明了にして、以て新民止善の心修を廣せず、幾回か反復鍛錬終つて復始むる、循環端無きが如し、之を大學日新の道と謂ふなり。故に下文に曰く、物本末あり、事終始あり、先後する所を知れば即ち道に近し。其の反復叮嚀人に示すの意至つて深切なり、學者其れ研究せざるべけんや。

【講話】今回より愈三十則に遷つて講じますが、其の第一則が明德の章である。本文へ入るに先だつて一言斯ういふことを附けてお話をして置きます。それは此の『大學』は言ふ迄もなく一部の書であるが、それに就て朱晦庵即ち朱熹が或時其『大學』を讀む方法を門人に敎へて言うたことがある。其言葉に『大學』の一書には正經あり解あり或問あり……正經といふのは即ち『大學』の本文でありますが、正經もあり又解釋した解もある、又或問といふ書物もある。所が其心を疑して久しく『大學』を見來り見去るに從て、更に或門を用ひず、或問といふ書物の手引がなくとも、問違ひない所に至らう。又久しくして只正經のみを見る、又久しくして自ら一部の大學が我が胸中に在るありて正經も用ひずといふことが、朱熹の語錄にある。斯ういふことは、坐禪工夫する趣と同じ樣な有樣で、先師も斯う言はれた。斯ういふ說は、朱熹が晩年の定論であらう、同じ朱熹でも壯年時代、中年時代、晩年時代と、見識が違つて段々進歩して居る。是等は晩年定論の識見であらうと、先師が見て居る。こんな心持を以て『大學』といふものに我々は對して行く、それが爲に尙ほ朱熹の言葉を引いて見れば『大學』の序文にある通り「聰叡智にして、能く其性を盡す者、其間に出ることあれば、則ち天必ず之に命じて以て億兆の君師として之をして治めて之を敎へて、以て其性に復らしむ」云々とあります。斯ういふ風に、朱子は見て居ります。要するに此一部の『大學』の書物といふものは、復性の道を明にした、我々が本性へ復歸する所の、其意味の書物であるといふことはこれで分つて居る。我々が此の本文を見るのにも、其心持で這入つて行くが宜しい。尤も『大學』に付て廣く見たら色々の事がありますが、我が禪宗、就中臨濟に於ては、網干の龍門寺の開山になつて居る盤桂禪師といふ方が、此の『大學』について斯ういふ經歷を持て居る。師が十有五にして學に志すといふ時分に、此章に出遇うて、大に疑を起した。明德を明にするの章を疑つて、禪に參すると傳に書いてある。固より明かなものならば、更に明にすることは入りさうもないものだといふことが、疑の種であつた。これより東西に徘徊して多くの善智識に遇つたが、何の得る所もなかつたが、常に屈せず、撓まず、刻苦精錬して、時間の經過を忘れる位迄に鍛錬した。常に靜坐して、工夫して居つたので、臀部の肉が爛れて仕舞うて、遂に膿血を出すに至るといふ位に、餘程猛烈にやつた。膿血の出る所へ紙を貼付けて、更に撓まず坐つて居る。十有五歳位から此疑を起して、さうして三十位迄やつた其後、重痾を憂ひ、飲食進まず、日を算へて死を待つといふところ迄至つた、何んでも人間といふ者は

斯ういふ逆境、斯ういふ煩悶に出遇はぬと、一條の血路を開くことが出來ぬ。それは當人の心の取り様で、禍を轉じて幸と爲す事も出來やうが、只樂々として居つたのでは中々悟りを得られるものではないが、今禪師もさういふ逆境に陷いつた所で、一日豁然として悟つた。既に明德といふ何をか明にするといふ。此疑問を二十年來持て居つたのであるが、是に至つて大に省みる所があつた。明德の髓に達すると迄本文には書いてある。それでも小成に安んぜず、江戸の千住小塚原の刑場に獄門と言て首の並べてある其獄門の下へ行て、それと覩み合て、坐禪して居るといふ、さういふやり方をやつて、禪定の力を錬つた。斯ういふことが五六晝夜であつた。又或夕には競馬場の堤の下に、馬が駈けて居る下に仰向けになつて居つて禪定力を試した。其時分に肥前の松浦侯の下士を戒めたことがある。松浦侯が之を聞いて驚いて言ふに、是れ彼の琢藏主ならんとて、それから家來をして携へ歸らしめ、さうして自分の邸へ迎へられたといふことである。これは明德に就ての一つの話であるが、其他擧げれば色々ありませうが長くなるから本文に這入ります。

「大學の道は明德を明にするに在り」云々、儒教の方では、三綱領と稱して居るのは、即ちこの明德と新民と至善である。それから「止まることを知て」から「而して後能く得」といふ迄は、之を五術と稱す。之に續いた言葉が、これは本文の『大學』の言葉を見れば分りますが、八條目といふものが附いて居る。「古の明德を天下に明にせんと欲する者は、先づ其國を治む、其國を治めんと欲する者は先づ其家を齊ふ、其家を齊へんと欲する者は、先づ其身を脩む、其身を脩めんと欲する者は、先づ其心を正しうす、其心を正しうせんと欲する者は、先づ其意を誠にす、其意を誠にせんと欲する者は先づ其知を致す、知を致すは物に格るに在り」さうして又再び元に歸つてくる。本文は諸君の御存知の通り、これが『大學』の眼目であります。三綱領、五術、八條目といふもので『大學』は出來て居る。これが先づ『大學』の骨子でありますが、先師の說を此處で述べて見ると、

大學の書、開卷に大學の道は明德を明にするに在り、民を新にするに在り、至善に止まるに在りの三綱領を擡ぐるは、先づ聖學の眼目を表顯するのみ、故に予は此文面に於て講說を用ひず、先づ心修の術を述べ、而して後漸く講說に入る。其心修の術は知止以下の五句に在り、故に應さに能得の下に於て、假に十字を屬して、「慮而后能得レ明ニ明德一得レ新ニ民得ニ止ニ至善一」と連續して、始めて明德、新民、止至善の三綱領を講說すべし。此に到つて活文の句法、宛轉として窮り無く、愈々益々妙を覺えむ。

これは先師獨特の解釋であるが、餘程優れた解釋法と私共思うて居る。今言うた三綱領、五術、八條目といふものが、二百五字計りあるが、其文章は漢の時代に發見したのである。それはどういふ所から得來たかと言へば、孔氏壁中の書と言て、彼の秦の始皇が儒者を坑にした時は、此の『大學』といふ書を壁の中に隱して置いた本文で、孔子の生きて居る其時代の原文であるといふ。さういふ解し方で

あります。それで本文に就て言うて見れば、三綱領を先にして、五術を後にするから、實行上より得た者は明德から這入つてくる。明德といふものはどんなものかと言へば、我が本心の變名と言ても宜い。或は上帝と言ひ天命と言ひ、或は仁と言ひ、義と言ひ、名が色々に分れて居るが、要するに其心は名もない、名づけ様もない、目で見ることも、耳で聞くことも出來ぬが、併し上天の事は聲もなく臭もなしと言ては、捉まへ所がないから、玆に表示して、明德と言ふ。此德といふものは天から降つたのでも、地から湧いたのでもない。神様が造つたのでも佛様が造つたのでもない。我々が先天的に持て居るものを、暫く明德といふ。併し其持て居る明德てあるけれども、如何せん人欲の私、佛法で言へば煩惱の爲に、此明德を曇らせて居るだから、先づ『大學』即ち大人の道を學ぶ者の要義は、何處にあるかと言へば明德を明にするに在る。明德を明にし終つたならば、次に民を新にする。此新といふ字は親といふ字が書いてあるのもある。程伊川は新といふ字を用ひて居る、程明道の方は親といふ字を用ひて居る、そんな字義上には、やかましいことを澤山並べて居りますが、餘りさういふことに重きを置かんても矢張新といふ字で宜しい。詰り民を新にするに在り、自分が明德を明にしたならば、一般の人をして明德を明にせしめよといふ意味をば、言葉を換へて民を新にするに在りと申したので、要するに明德を明にするは自利的、民を新にするは利他的である。利他は自利の起りで、自利は利他の起りである。之に就ては古今東西、議論があるが、畢竟一つである。これから一歩を進めて

何處に歸着するかと言へば至善に止まる、今の言葉で言へば、絶對的善である。今倫理學上の事を聞いても、道德上の事を聞いても說は色々と分れて居ても、大體の歸趣が、絶對善であるといふことは、動かない、さういふ所は我が佛敎も同じてある。佛陀といふことの意義は、自覺覺他覺行圓滿といふのであるが、其義理を此處に比べて見ても同じ意味で明德が即ち自利であります、新民が利他であります、覺行圓滿といふ其悟りと、行と心が圓滿に至つた所が至善である。これが即ち三綱領であります。其三綱領を如何にして手に入れやうといふならばそれ迄の修行が要る。實行を要する。其實行は何かと言へば、止まることを知て、而して后に定ることあり、定つて而して后に、能く靜かなり、靜かにして而して后に能く安し、安うして而して后に能く慮る、慮つて而して后に能く得、今言うた通り、此の三綱領を一つ我物にしやうといふには、五術が要る。其五術の初まりは、止まるといふとて、先づ我々が此動いて居る處の心を以て、我心の本を見やうというても、それは難い。自分の動いて居る心其者からして、先づちやんと止水の如く、明鏡の如き、其境界へ這入らねばならぬ。水の中に落ちて居る玉を探さうといふならば、先づその水を澄ましむるといふことが必要で、動いて居る心を以て直に眞理を見やうと言うても、決してそれは見えぬ。或は又色眼鏡を掛けて居つて、本當の物を見やうと言ても、物其者の正體は見えない。先づ我が心を止めることを一つ工夫しなければならぬ。それが五術の始まりで、之を詳しくすると、言ふ可きことは、澤山あります。我が佛法では止觀といふ様なことが

あつて、其事を例に言ふと、大變ありますが、餘り煩雜になるから、略して置きます。一たび心が止まつたならば、始めて能く定まる。止まるといふ字は、我々が歩いて居るのを、歩みを止めたといふので、心がさういふ狀態に至つたならば、ちやんと定まつたので、我が大道の定まるが如く、精神も一定不變といふ域に至る。若し其心がちやんと一定の境界に至つたならば、定まつて而して后に靜かなり、自ら靜寂の境界は其處に現はれてくる。靜にして而して后に安し、これは自然にして至るのであります。靜かならないから、常に我々は不安とか、若くば煩悶といふことの爲に、始終心が歩んで居るが靜かなる境界に居れば、自ら安くなつてくる。心が安くなつてくる、心が安くなつて、而して后に能く慮る、斯ういふ工合に心其者の形を對照して、一切の事を慮れば、着々其慮りが至善になる。慮つて而して后に能く得る、此下へ明德を明にするを得、民を新にすることを得、至善に止まることを得、これは考へれば考へる程、此の文章が自然の法則に叶つて、得といふ字を附けて、先師は回文的に解釋して居る。始まつて終り、終つて又始まる。我が佛敎では、禪那禪那といふことを飜譯して、靜慮といふ意味になつて居る。約めて言へば、五術といふものが、禪那といふことになり、靜慮といふことになる。言葉が違う丈けで、今日言ふ修養とか、或は實行とかいふことになれば、理屈からモウ一遍、直ちに實行の上に手を下さなければならぬ。其下すには、如何にして下すかと言へば、五術で我が心を練つたならば、自ら明德を明にすることを得、民を新にすることを得、至善に止まることを得、これは考へれば考へる程、此の文章が自然の法則に叶つて、

さうして眞理を明にして居る。本文は先づ此位にして置きます。

「此れは是れ聖學の綱領」今時申す聖學といふと一種の文章學、詰り漢文學の如くなつて居るが、それは漢文としての聖學で、聖學には道が備はらなければならぬ。今言うた『大學』の此本文といふものは聖人の學問の大綱で、大綱なると同時に、これが實行法である。「煉心の實法、而して孔門の祕訣なり」孔門の祕訣といふものは外にはない。此中にある。「六經諸子の言」六經と言ひ、諸子と言ひ、其書物は浩瀚なるもので、汗牛充棟も啻ならぬ。形容して言へば、「山の高く海の深きが如し」である。「悉く皆此の一著子の註脚なり」一著子といふのは禪錄にある言葉だが、圍碁などで言へば一手といふ意味で、禪宗で言へば、たつた一手の其註釋だ。「之を究めて明白なるを聖と言ひ賢と言ふ」。聖人と言ひ賢人と言ふ、「之を味くして昏蒙なるを凡と曰ひ、狂と曰ふ」凡夫と曰ひ狂人と言ふ、同じ眞理ぢやけれども心理を明かならしめる　と心理に昏いとの差である。丁度我々は大地によつて、よく立て居るが、又同時に大地によつて能く倒れると同じである。「明德は譬へば一顆の眞珠の如し」これは深切の譬だ喩へて見ると、眞珠といふ如き一つの玉である。これは佛經抔に澤山ある譬である。其一つを言へば『圓覺經』といふお經に世尊が普眼菩薩に告げて言はるゝに

善男子當に知るべし、身心皆幻垢たり、垢相永く滅すれば、十方淸淨なり。善男子、譬へば淸淨摩尼寶珠の五色に映じて方に隨つて各々現ずるに、諸の愚痴の者は、彼の摩尼實に五色有りと見るが

如し云々。

斯ういふ意味のことは、我が佛教經典には澤山擧げてある。今の譬も其如く、眞珠其物は、「圓明寂淨」圓なり、明なり、靜かなり、淨さなり、「都て差別相なし」珠其物は、差別を以て掩はれず、體明なるを以ての故に物に對する時、能く一切の色相を現ず。どういふ色どういふ姿を持て來ても其姿其儘に現はれる。「色自ら差別あり、青黃赤白黑の色は自ら差別があるる、千差萬別、どれ程複雜てあつても「珠は變易なし」玉は變らぬ、黑くでも赤くでも、玉の性に變ることがない、それを自分の心に乘せて工夫して行つたならば「其精微深妙の理の如きは筆墨言語の及ぶべきにあらず。只學者刻苦して、自得するにあり。只自分で工夫して知るより外はない、白隱禪師の言はれた言葉に、此玉現する時には世界隱れる、我々が目に物を見て居る時、耳に物を聞いて居る時には、此心が隱れる、目を離れ、耳を離れた時は此心は我が掌を見るが如く現はれて居る。我々は只五官斗りを當にして居るからそれ以上の事は見えない、それ以上の眞理は分らぬ。是皆五官に束縛されるからである。目なくして見、耳なくして聞き、鼻なくして嗅ぎ、舌なくして味ひ、手足なくして運動自在といふ、さういふ境界は、皆我が室內に於て、法身とか機關とか言詮とか難透難解とかいふことて、一々實地實驗的に、それを證明して行く道が立て居る。だから其精微深妙の理の如きは、筆墨言語の及ふ所に非ず、只學者刻苦して、自得するに在る。そんならば、如何にして自得するかと言へは、諄ど〳〵しいが、モウ一遍言ふと、「自得の術は止定靜安慮の五者に在り」それが實行法てある、「是れ吾門の靜坐工夫と同じ」、相談した樣に、實行法が同じ樣に出來て居る。坐禪工夫と言ても、これと同じて、變りはない。「即ち錬心の活法」てある。「竊に按ずるに」、我れ洪川が按するに、「正明德より能得に至る全く回文の句法を用ゆる也」、循環的の文法てある。「蓋し聖者の辭を屬するや」、優れた人の言葉の作り方が、「製作天地に參す」、天地に參はる位に出來て居る。さうして文章の意匠、「自ら陰陽運行の氣象に則りて藻を擒く」春になれば花が咲き、秋になれば紅葉する、其四時の變化、晝夜の交代、其陰陽通行の氣象に則とつて、綾を取る「太だ翫味す可し」翫味す可きである。「凡そ學者自己本具の明德を明にせんと欲せば」さういふ譯てあるから我が心の本躰を見たいといふ者ならば、直ちに此實行に就て「止定靜慮」、安の字はモウ略してある、「止定靜慮の法を修め久々功夫純熟せば」これは性急にして得らるものてない、精神の修養抔といふことはいつの間に此處迄進んだか、いつの間に此處迄出來上つたか、知らざる內に進んて居るといふものてあるから、緻密に遠大に考へ進めて行かなければならぬ。さうして行つたならば、則ち一旦瀾然として大に得る所あり。これが則ち自利といふことの解釋である。自利利他といふことを初めに出しましたが、これは自利的で、然る後に己の得る所を養ひ以て衆人に及ぼし、衆人をして又之を明らめしむ、之を民を新にすと謂ふ。己が獨り之を明らめたから、それて止むるといふのてない、

他人にも之を明らめしめる、之を新民といふ、これは利他である。さうして「日用行事の上に於て」、行住坐臥の上に於て、「明德の全光を發揮し」、一たび斯の如きの道に依り、斯の如きの方法に依て修養するならば、明德の全光は玆に赫耀として光を發する。斯ういふことは多少でもさういふことを實行した人でないと徹底することが出來ぬが、二たび其境界に至つた人は、明德の光を發揮して、「上天に恥ぢず、下人に恥ぢず」といふ有樣で、「志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其道を行ふ」、志といふのは、經世國、男子大丈夫の心だ、佛敎言葉で言へば、衆生濟度である。志を得たらば、みんなと一所に民を始める、若し時利あらずして其志を達することが出來なかつたら、獨り其道を行ふ山林に隱れて居る、志を得ると得ざるとに拘はらず、其道を行うて居る。其有樣を形容して見れば、「富貴も淫する能はず」、淫するといふのは、附込むといふ樣なことで、富と貴きは、皆人の欲する所、貧しきと賤しきとは、人の欲せざるのが普通の人情であるが、斯の如き境界に至つたならば、富も貴きも犯すことが出來ぬ。貧賤にも移すこと能はず、貧賤には誰も志を移し易いものだが、貧賤と雖も我志を移すやうなことがない。威武も屈すること能はず、威武に對しては多くの人が屈服する。然し此の境界になれば若し白刃を以て我が首に擬せらるゝとも、決して屈することが出來ぬ。例を擧げると澤山ありますが、例へば彼の羅什三藏門下で、四哲と云はれた僧肇法師の如きは、秦王之を刑場に引いて其首を刎ねんとしたときに、「四大元無主、五陰本來空、將頭臨白刃、猶似斬春風」と唱へて泰然自若として王の爲に頸を刎ねられて仕舞うた。又佛光禪師が、雁山能仁寺に於て、元兵の爲に、今や頸を刎ねられんとする時に、偈を唱へたのが、「乾坤無レ地レ卓二孤筇一、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬二春風一。」之は大變名高いものてありますが、偈頌の由て來る所は、肇法師から來て居る、さういふ實例は此外幾らもある。假令ひ國王の權威を以てしても、如何に勢力の壓迫を加へても此心一個を屈することは出來ない。之を聖善に止ると謂ふ。こそ迄至つたのが、これが至善に止まる、即ち覺行圓滿の境界である。そんなら此處て止むかと言へば然らず、尙ほ止定靜慮の法を以て煉り來り煉り去り、愈々益々明德を明了にして以て新民止善の眞修を廢せず、幾回か反復鍛錬終つて復た始まる」。さうでありませう、天地陰陽の運行といふものは、春始まつて冬終つてそれでお仕舞かと言へばさうてない。又廻り舞臺の如く一轉すると、大晦日の一番仕舞には、一月一日といふものがそこに胚胎して居る。てあるから一月一日に大晦日がある、大晦日の最後に一月一日を持て居る。原因の中に結果があり、結果の中に原因がある。無始に涉り、無終に涉つて居る。幾回も反覆鍛錬して終つて復た始まる有樣は、「循環端なきが如し、之を大學日新の道と謂ふ也」一日一日を新にして行く、モウ其日其日は即ち一月一日てある、其日其日の一月一日が、誠に長時間の過去際である。長時間の過去際が、未來際てある、過去現在未來が、目前の一念頭を離れて居らぬ。さういふ心持が『大學』日新の道である、「故に下文に曰く『大學』の本文を見たら分る、「物本末あり事終始あり」、本といふのは明

德を指して居る、末といふのは、日常行事の上の事を指して居る。物には本末がある、事には終始がある、終始は附いて廻つて居る。本末といふことは、決して離れられないが、本にすべき所を未に考へたり、又終を始に誤つたりしてはいかぬ、宜しきを得なければいかぬ、「先後する所を知れば則ち道に近し」、これは矢張り本文であります、其の反復叮嚀人に示すの意至て深切なり、學者其れ研究せざる可けんや」これは先師の評釋と言て宜しい。一言にして言へば、先師の評でありますが、此評は實は見る人が見たら、別に講釋に及ぶまいが、併し乍ら先師の大に力を用ひたのは、此の評にあるので、本文は借りて來たので、評は先師獨得の見識を以て捌いたのであります。これ丈けの解釋では先師の心の萬分の一も盡して居らぬが、今回は此位にして置きませう。

第二十九講　執中（第二則）

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執其中。

允執其中。一語。聖王傳授道統之警語也。誠盡善矣。至大舜加三句。又可謂盡美矣。惜乎朱熹道眼不明。漫下凡解云。有人心道心之異者。則以其或生於形氣之私。或原於性命之正。而所以爲知覺者不同。是以或危殆而不安。或微妙而難見耳。精則察夫二者之間而不雜也。一則守其本心之正而不離也。從事於斯。無少間斷。必使道心常爲一身之主。而人心每聽命焉。則危者安。微者著。而動靜云爲。自無過不及之差矣。嗚呼以朱熹之才之美。何以如此謬解也。是必中年未悟之說也。唯以道力微弱。頻出凡情之計較。打成兩橛。以理窟揑合。而評定聖語。費居多閑言語。譬如野人在先王廟外。博量盡蠱之美百官之富也。不齟齬者殆希。蓋物之不駁雜謂之精。聖語分明曰。惟精惟一。允執其中。言人心即道心。道心即人心。無二無別。惟精惟一也。左之右之。至此妙境。謂之允執厥中。是已。若夫眞箇見性分上之人。豈待註解哉。是鍛錬心術之極也。須入予室。究之。雖然。學者自非刻苦用力之久。不能信之矣。

和訓　人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精、惟れ一、允に其の中を執れ。

允に其の中を執れの一語は聖王道統を傳授するの警語なり。誠に善を盡くせり。大舜三句を加ふるに至つて、又美を盡くすと謂ふべし。惜いかな朱熹道眼明かならずして、漫に凡解を下して云ふ。

人心道心の異ある者、則ち其れ或は形氣の私に生じ、或は性命の正に原づくを以て。而も知覺する所以の者同じからず、是を以て或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ。精なるときは則ち夫の二者の間を察して雜らざるなり。一なるときは則ち其の本心の正を守つて離れざるなり。斯に從事して少しも間斷なければ、道心をして常に一身の主となつて、人心毎に命を聽かしむ。則ち危き者は安く、微なる著は著はる、動靜云爲、自ら過不及の差なし。嗚呼朱熹の才の美を以て、何を以て此の如く謬解するや、是れ必ず中年未悟の說ならん。唯道力の微弱なるを以て、頻りに凡情の計較を出す。打して兩橛と成し、理窟を以て揑合し、而して聖語を評定し、居多の閑言語を費す。譬へば野人先王廟外に在り、盡蟲の美、百官の富を博するが如し。齟齬せざる者殆んど希なり蓋し物の駁雜ならざる、之を精と謂ふ。聖語分明に曰く、惟れ精、惟れ一、允に其の中を執れと、言ふこゝろは、人心即ち道心、道心即ち人心、二無く別なし、惟れ精、惟れ一なり、左之右之、此の妙境に至る。之を允に厥の中を執ると謂ふ是なり、若し夫れ眞箇見性分上の人、豈註解を待んや、是れ心術を鍛錬するの極なり、須らく予の室に入つて之を究むべし。然りと雖も、學者刻苦して力を用ゆるの久しきに非るよりは、之を信ずる能はず。

【講話】「人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、允に其の中を執れ」これは御承知の通り、『書經』にある言葉で、『書經』の中の大禹謨といふ所に出て居る。註釋に就て見ると、初め堯帝が舜帝に天下を讓る時の言葉は、此仕舞の只一句だけで、允に其中を執れといふ只これ丈けであつたが、一轉して舜が禹に天下を讓る時になつて、其意を擴めて、人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、これ丈けの三句を加へたのであります、それに付ての先師の評論でありますが、本文の文字は誠に意味はいと易い、先づ暫く人心と道心と斯う分つたので、之を我が佛敎の言葉に比して言ふと、人心といふのが煩惱の心、道心といふのが丁度菩提の心である。勿論菩提といふのは梵語でありますが矢張り道といふ字に當つて居る。煩惱心即ち迷ひの心は誠に危く、菩提心といふものは誠に微かにして見難いものである。惟れ精惟れ一なりといふのは、言ふ迄もない、精しくして、人心と道心とを一にして允に其中を執れといふ。これは誰が見ても能く分つて居る、只議論の分れる所は何處かといふと、人心と道心とを二つに見るといふのと、人心即ち道心である、道心が即ち人心であると、斯う見るのとの相違である、今日の言葉で言へば、一元的に見るか、二元的に見るかといふ、それ丈けの違ひであります。今先師の說を評論の中に入るに先だつて言うて見ると、これは外の書物に書いてある、先師の說であります。

朱熹は人心道心を分つて二となす。妄を離れて眞を見る、黑を離れて珠を求むるが如し。山僧は人心に即して道心を明らむ。所謂妄に即して眞を見る、黑を以て珠となすが如し、乞ふ高見の者、緇素を辨じて看よ。

斯ういふことが先師の說かれたものゝ中に書いてある。これは獨り先師洪川和尙がさう見た斗りでない、一二古人の見る所を擧げて見ると、有名な陸象山は曰く、

解する者多くは人心を指して人慾と爲し、道心を天理と爲す、此說是に非らず、心は一なり、人安んぞ二心あらんや。人よりして曰ふときは惟れ危しと曰ひ、道よりして曰ふときは惟れ微なりといふ、念ふこと罔ければ狂となり克く念へば聖となる、危きに非らずや。聲も無く臭も無し、微なるに非らずや。

といふのが、陸象山の見方であります。矢張り先師洪川和尙の見る所も、同じであります。モウ一つ確めの爲に、王陽明の見方を申しませう。王陽明の語錄に曰く、

王道息み、伯術行はる、功利の徒外天理の近似を做り、以て其私を濟して、以て人を欺いて曰く天理固より是の如しと、知らず、既に其心を無みす而るに尙ほ何ぞ天理と謂はんや。是よりして後、心と理とを析つて二と爲す、而して精一の學亡ぶ、世儒の支離、外刑名器數の末に索め、以て其所謂物理なる者を明かにせんことを求む、而して吾心即ち物理初より外に假るなきを知らず。

斯樣に陸象山の見る所も、王陽明の見る所も殆と一つである。此二人斗りでない他にもまだあります が頗はしいから今はそれ丈けにして置きませう。禪的立場に依て見ると今言ふが如く、人心が即ち道心であり、道心が即ち人心である。之に就て色々例を擧げ、證を擧れば限がないが、モウ少し擧げて見ると、例へば眞淨克文禪師、これは世間では知らぬ人もあるが、宗門では有名な人で、此眞淨克文禪師の說に依ると、『圓覺經』の中に、佛が言はれたに一切衆生は皆緣覺を證するといふ。斯ういふ言葉がある。一切衆生は迷の凡夫であるが、其迷ひの凡夫も皆緣覺といふ悟りを證明して居る。明に悟つて居るといふ。斯ういふ言葉が『圓覺經』の中にある。更にモウ一つ『維摩經』の言葉を擧げて見れば、受を滅せずして證を取る、斯う言ふ工合に言うて居る。更に文殊菩薩の言葉を見ると、衆生現行の無明、即ち是れ如來根本の大智なりと、斯ういうてある。大乘佛敎の立場から言ふと、是の如くてあるが、さういふことを經文には色々言うて居る。こゝに一つの譬があります、譬へば人の本月に依りて、第二の月を見るが如し。本月といふのは、空間に輝いて居る一つの月、それを本月といふ。本當の月に依て第二の月を見るといふのて、第二の月といふものはある譯はないが、或る一種の作用で見る。月には二相なけれども、目を撚る者の見る所に依て第二の月となす。自分の本月よりして、第二の月を見る。斯ういふ工合に譬へた今も其通りて、人心道心が元來一つてあるが、之を二つに分けるのは、恰も第二の月を見るが如くてある。斯ういふ樣な說が、大乘佛敎の中には、到る處にある。此意味に於て、先師は、此の本文を解釋しやうといふのてある。本文に現はれて居る言葉は朱熹杯も重きを置いて居る言葉て、夫れ堯舜禹は天下の大聖なり、天下を以て相傳ふるは天下の大事なり、天下の大聖を以て天下の大事を行ふ、而して其授受の際、丁寧告戒、此の如きに過ぎざれば、即

ち天下の豈以て此に加ふる有らんや云々、此朱熹杯の解釋する所は、我々の立場から見ると、大に違つた解釋であるといふことを言はれて居る。

これから評論に入ります。「允に其の中を執れの一語は、聖王道統を傳授するの警語なり」これは辯を附する迄もない、總べて支那に限らず、凡そ千年二千年前の時代には、國を治めるといふ帝王の道といふものは、政治も宗教も並に法律のことも、皆殆と一つであつた。この國の歴史を見ても古い所は政教一致で、さういふ譯だから、天下を讓るのは、道を傳授するといふことになる。そこで道統を傳授するといふことも、其意味に於て言出した所の言葉である。允に其中を執れの一語は、聖王道統を傳授するの警語である。「誠に善を盡せり」言葉こそ單簡であるけれども、其意義に至つては、善盡して居る。併し善盡した上、更に美盡すといふことになると、愈々益々完全なものになる。「大舜三句を加ふるに、至つて又美を盡すと謂ふ可し」人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、此三句を加へるに至つた、美を盡せりと謂ふ可きである、殆と善盡し美盡して、一字一句も間然する所はない、「惜いかな朱熹道眼明かならずして漫に凡解を下して云ふこれからが先師の議論で、是れ位善盡し美盡した本文であるに拘らず、朱熹の眼が明かならぬので、漫に凡解を下して云ふに、「人心道心の異ある者は」朱子は初めから甲は人心、乙は道心と二つに分けた、此の異なりがあるのは、「或は形氣の私に生じ」朱子杯の言葉では、或は形質の心といふ字を用ひた、言はば身體に屬した心で、「或は性命の正に原づく」性命といふことは、本然の性と儒者の方で言うて居ります。氣質の性、或は本然の性、今は言葉を換へて、一は形氣と言ひ、一は性命と言ふ、本文に人心とあるは、形氣の私に生じた心、道心とあるは、性命の正しきに依て起つた心であると、初めより二つに見て仕舞つた。故に、「知覺する所以の者同じからず」知覺する所が違う。これは一應尤もなことであるが、實は幼稚な見方である。「是を以て或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ、初めより斯う二つに分れたのであるから、若し人心といふ側から見るならば、人心といふものは、危殆にして危險なものである。何時憎い心を起すか、何時怒りの心を起すか分らぬから、其起す所の心に依ては、隨分自分の身を亡ぼし家を亂し天下國家を亂すといふことになるから、其形氣の私から生ずる人心といふものは頗る危險千萬なものである。又道心といふのは、本然の性から出て居る言葉であるが、其代りに微妙で、中々我々凡人には其道心といふものを明らめ難い、極く微かなる爲に見難い、斯う二つに分けた。それから本文の精と一といふ言葉を使うたのは外てはない、「精なるときは則ち夫の二者の間を察して雜らざる也」心を精しうする時は彼の二者、人心と道心の間を能く觀察して雜へない、これは人心てあるから退けなければならぬ、これは道心てあるから明らめなければならぬと雜へないて居る、「一なるときは則ち其本心の正を守つて離れざる也」我心を一つにして保つときには、其本然の正を守つて、本然から離さない、斯ういふ風に分けた。「斯に從事して少しも間斷なければ」斯ういふ鹽梅に從事して、

平生自分の修養を怠ることなければ「必ず道心をして常に一身の主となつて人心毎に命を聽かしむ」道心が恰も一家の家長か主人の如くである。さうして人心なるものは、其雇はれて居る人の如くにして一々命令に從ひ家僕が行動するが如く、凡夫の心が常に德性の精神支配を受けて着々其事に當ることになる。斯樣にして心を保つて行くならば、「危き者は安く、微なる者著はれ」比較的危ない人心を危くなく保ち、微かにして見難い所の道心を愈々明かにして「動靜云爲自ら過不及の差なし」斯ういふ調子が取れて行つたならば、立働く上に於ても、靜かにして居る上に於ても、總ての事を爲す上に於て、過不及の差を免れて、常に中庸の節に當る。是迄が朱熹の註釋であります。これも併し一概に退ける譯にはいかぬぢやろうと思ふ。斯ういふ風に心を修め、氣を整へて行くことが必要で、現に我が宗門にも、南宗北宗といふことがある。其の南宗北宗と分れた所以は、何處から分れたかと言へば彼の達磨大士から五代目、弘忍大師に至つて、一は慧能大師、一は神秀大師の二派になつた。其二人の見解はどういふ所で分れて居るかと言へば、五言絶句の詩に、自分の意見を現はしたのである。其神秀大師は「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿レ使惹二塵埃一」と斯う其意中を述べて居る、これは私の考てありますが、朱熹が前に言うた說に稍々近い。所が同じ門下で修業した六祖慧能大師は、「菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹二塵埃一」と斯ういふ風である。處がこの慧能の方が師匠の意に契つて、遂に傳法することゝなり、乃て同じ禪宗が分裂して二となり、神秀の方を北宗と言ひ、六祖の方を南宗と言ふことゝなつた。北宗の方は漸的漸進で、南宗の方は頓的急進といふと弊があるが、頓悟といふので、一は漸禪といふならば、こつちは頓禪といふ工合に、二つに分れた。丁度今の朱熹の說が北宗たる神秀の說に近い、直ちに同じと斷言することは出來ませぬが、近い一つは、二元的見解である。哲學派から見ると。古今東西二派が相爭つて居る。今日は一元的議論に歸して居る樣だが、細かに論ずると、今日でも矢張り此二派は相爭つて居る。相爭つて居る間に眞理は益々磨かれると思ふ。先師は斯う言はれるが、强ち朱熹の說も非難すべきことでないと救うのである。「嗚呼」と嘆息して、「朱熹の才の美を以て何を以て此の如く謬解するや」朱熹位の偉大なる人にして、どうして斯く謬り解したものであらうか、「是れ必ず中年未悟の說ならん」朱子一代でも、青年時代、中年時代、晩年時代で、大分說が變つて居るが、是等の說は、必ず中年未だ悟らざるの說であらう。晩年に至つての說は、又大變違ふ。「唯道力の微弱なるを以て、頻りに凡情の計較を出す」一口に言へば未だ年が若い、見識が若いから、道力微弱なる故を以て、頻に彼是れと計り較べて、「打して兩橛と成し」斯ういふ分別をして、丁度一本の木を二つに斷ち切つた樣なもので「理窟を以て揑合し而して聖語を評定し、居多の閑言語を費す」と先師は斯う評論された。其有樣は、「譬へば野人先生廟外に在り蚶蜃の美、百官の富を博するが如し、」我に田夫野人なる者が、國王の嚴そかなる廟內の事は知らず、只廟外に立つて居つて、九重雲深き所の事を推量する樣なものである「博」の字は「搏」の字の誤ては

かるの意味であります、豆豆は天を祭つたり、祖先を祭つたりする時の器物であります。此字は、說文に依ると、酒食を盛る所の器とありますが、嚴そかなる所の先王宮中の豆豆の美を、只空に推測つて居る樣なものである。又百官の富を色々當て推量して居る樣なものである、「齟齬せざる者殆と希なり」である。「蓋し物の駁雜ならざる之を精と謂ふ、」字義上から言ふと、米を白げたのが精といふ字だ。「聖語分明に曰く惟れ精惟れ一、允に其中を執れ」聖人の語に明らさまに言うて居る。惟れ精惟れ一、允に其中を執れ、「言ふこゝろは、人心即道心、道心即人心」で、此間に、「二無く別無し」波が即ち水なり、水が卽ち波なりといふが如く、「惟れ精惟れ一なり」て、「左之右之」此の見解から、一つ切て出るならば、「此の妙境に至る」、此の妙境に至つた時が、「之を允に其中を執ると謂ふ」のである。これ位著しく本文に其意味が現はれて居る。「若夫れ眞箇見性分上の人ならば豈註解を待んや」註を爲すに及ばぬ、經文抔を見るのでも、今先師が言はれる樣な見方て宜い。佛敎の經論といふものは、註の上に又註を加へて仕舞には末に附いて仕舞つて、本文は始終お留守になつて仕舞ふ。勿論精しくなるが大變煩瑣なものになつて仕舞ふ。お經を見るには、註釋を見ずして、本文を見るのが、矢張り一種の讀書術の一と思ふ。「是れ心術を鍛錬するの極也」故に此本文の如きは、「須らく予の室に入て之を究むべし」人心即道心、道心即人心差別の中に平等があり、平等の中に差別があるといふ理を明らめて、さういふ風に活かして見なければならぬ。それはどうしても室內に於て實地の修行を要する。「然りと雖も學者刻苦して力を用ゆるの久しきに非るよりは之を信ずる能はず」併し、幾ら講釋して見ても、講釋は講釋だ。學者が刻苦して力を用ゆることが久しくなければ、私が言ふ樣なことを能う信じまいと、斯う評された。先師は此則に於て更に別に腕頭の力を示し、中々骨を折られたから、禪宗的の言ひ現はし方で、斯ういふことを言うて居る。若し人あり前語を擧して如何なるか是れ其の中を執ると、斯う尋ねる人があつたら、もう理窟は言はぬ、今迄の樣な、まだるつこいことは言はぬ、オレは斯う答へるがと言て、古人の詩を借りて來られた。「事に感じては花にも淚を濺ぎ、別れを惜んでは鳥にも心を驚かす」これは古人の名句であります。斯ういふことは却て辯を附けると疵が附くてとありますから、人々が能く味はつて見るが宜い。允に其中を執るといふのは、中央を眺めやうといふのではない今日我々が人事百般の上に心を種々に用ひて居る、其中の中を執るといふことで、差別の上に精一なる所の意味が現はれて居る、斯ういふ意味を先師は說かれたのであります。

第三十講　惟聖　（第三則）

書曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。

聖人也。狂亦人也。性情豈不亦同乎。唯其所以爲聖者。以其見得自性明白。雖喜怒哀懼愛惡欲之情時或發。直作眞淨明妙一枚

之大光而受用焉。其所以爲狂者。自不知其性之明潔。故被利衰毀譽稱譏苦樂之風漂溺。七情交相攻。未始有窮。卒昧沒自己本有之光輝焉。是以悟之與迷分。聖之與狂別。爲之如何。蓋悟時情皆爲性。迷時性却爲情。只須截斷迷情之本源。截斷迷情之本根。即在見性。見性即在克念。然則克念作聖一語。即吾門見性成佛之轉語也。莫以語之異怪之。詩曰。伐柯伐柯。其則不遠。採柯以伐柯。尚以爲遠。噫。

和訓　書に曰く、惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作る、惟れ狂も克く念へば聖と作る。

聖も人なり、狂も亦人なり、性情豈亦同じからずや、唯其の聖たる所以の者は、其の自性を見得する明白なるを以てなり。喜怒哀懼愛惡欲の情、時に或は發すと雖も、直に眞淨明妙一枚の大光と作して受用す。其の狂たる所以のものは、自ら其の性の明潔なるを知らず、利衰毀譽稱譏苦樂の風に漂溺せられ、七情交ごも相攻め、未だ始より窮あらず、卒に自己本有の光輝を昧沒す。是を以て悟と迷と分れ、聖と狂と別る。之を爲す如何、蓋し悟の時、情皆性となり、迷の時、性却つて情となる。只須く迷情の本源を截斷すべし。迷情の本根を截斷するは、即ち見性にあり、見性は即ち克念にあり、然らば即ち克念聖と作るの一語即ち吾が門見性成佛の轉語なり、語の異なるを以て之を怪しむ莫れ。詩に曰く、柯を伐り、柯を伐る、其れ即ち遠からず、柯を執つて以て柯を伐る、尚以て遠しとなす。噫。

【講話】「書に曰く、惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作る惟れ狂も克く念へば聖と作る」。これは御存じの如く『書經』の中の周書多方の篇に出てゐる。これは周の成王が諸侯に告げた所の言葉で、其言葉の中の肝腎のものを此處に擧げたのである。今之を講釋するに先立て私の考を少し述べて見ませう。此處等の言葉は、儒教の倫理學といふ樣なものと見ても宜しからう。今時の倫理學といふものは、色々の說があつて仲々むつかしくありますが、畢竟倫理學の根本立場は何處にあるといふならば、言ふまでもなく、至善といふことに外ならぬ、即ち絕對善といふものに歸する。これは古今東西殆ど立つ所を同じうして居ると云うても宜い、併し善惡の標準といふことになると、大分議論が多い樣である。私共の僅に知て居る所を言うて見ると、大體善惡の標準といふものを二派に分けたらば、大抵今の學說がこれに含まれて居るのであらうと思ふ。其二派といふのは何かと言へば、一つは法則論、他は目的論とである。此の目的論と法則論と大別せられた中に所謂倫理學說といふものは束ねられて居るであらう。委しく言ふならば法則論の側にも色々あつて、宗教的法則論とか或は政治的法則論とか或は直覺的法則論とかいふことに分けることが出來る。又目的論といふ中にも、快樂說とか克己說とか

完己說とか、學者に依て色々言ひます。大體さういふ風に分けて見ますと、孔孟の說といふものは、先づ目的論の中の所謂克己派に屬する所のものであらう。併し態々さういふ派であるとか、流義であるとかいふ所へ持て行かぬても宜いけれども、併し今流行つて居る所の倫理學說の部類に依て、當箭めて見るとさう思はれるのである。一方の快樂說に對して一方は克己說で、快樂說は言ふ迄もなく感情を主として居る、一方の克己說になると、理性に重きを置いて居る。一方の快樂說も細かに分ければ、色々ある樣で、自己の快樂を進めるといふのと、社會の快樂を進めるといふのとある。自己の利益を進めて行かうといふのと、更に社會の利益を進め樣といふのと、そこに自利とか利他とか、自愛とか他愛とか、段々枝から枝に岐れて居るが、兎に角理性といふものを比較的輕く見て置いて、人間の感情欲望を滿足させ樣と云ふのである。夫れゆゑ目前の利益とか、瞬間の快樂とか、自然主義であるとか、現實主義であるとか、サテハ本能だの衝動だのと色々の說をならべる。それに反して克己說といふものは、恰も孔子の己に克つて禮に復へると云ふ如く、自己の欲望に打勝ち、所謂本能だの衝動だのと云ふ利己的情念に打勝つて、さうして自分本來の理性といふものゝ向上發展を圖らうといふのである。それから又完己說といふのは、自己本來の面目を完うするといふので、即ち吾人が先天的に具へてゐる美はしき感情、眞なる理性、其儘の眞面目を完全に實現しようと云ふのである。之を「セルフ、リアリゼーション」とか、自我實現說とか言うて居る。今は完己といふ字に變へて言うたが、さういふ說を近世のグリーン博士や、ゼームス教授など云ふ心理學者達も唱へて居る樣である。今日の學者の說は、大體此完己論に一致して居る樣な有樣である。此處に出て居る所の言葉も、さういふ所に當箭めれば、言ふ迄も無く克己派であると思ふ。佛敎の如きは快樂說もあり克己說もあり大小一乘其說く處に本末があるが、歸する所完己說で其ことは「法華經」などに詳しく說てある。

扨て是から本文に立ち戻つて、惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作り、惟れ狂も克く念へば聖と作る、言葉は誠に見易い言葉て、初めより聖人はない、初めより狂人もない、狂と言つても通俗に言ふ氣違ひといふ意味ではない。狂といふ字は寧ろ愚といふ字の意味に解して宜い。聖人と雖も念ふことがなければ狂愚となる、又狂愚なる者と雖も、克く念へば聖人と爲る。譬へて言ふならば、一つの大地の上に我々は時あつて倒れることがある、又起きる時も、矢張り大地に依て起きる、轉げるのも土の上、起きるのも矢張り土の上、どちらにしても念ふと念はぬとて、そこに聖と狂と分れるのてある。此本文は初めに言うた如く、これは成王が諸侯に告げた言葉でありますが、此言葉は周公の製作されたので、成王はまだ少年であつたから、周公が皆成王の詔を作つたのてあります。

次に先師の註に入りますが、「聖も人也、狂も亦人也、性情豈亦同じからんや」、聖と言ても人て、狂と言ても亦人て、人に變りはない。我々佛敎の上から言ても、初めよりの佛はない、佛も初めは凡夫であり、凡夫も遂には佛となる、其性情も亦決して異つたものでない。此處ては總て儒敎の言葉を借

りて言うてありますが、佛教の言葉で言ふと、性情抔といふことは、餘程委しく分けられてありまして、一寸一言して見ると、性といふ字は、常に佛教では、如々不動といふ意味の時に斯ういふ性の字を用ひる。同じ心でも心の本體といふ時は、性の字で、情は所謂感じて遂に動く之を情というて、喜怒哀懼愛惡欲、次から次へ移り變つて行くものを指す、それを佛教で色々の分け方がありますが、極搔い摘んだことを一言すると、此の心を三通り程に分ける、一番初めの心を緣慮の心、次を獨頭の心又次を眞實心、斯ういふ風に分けて、是の三つは箇人的心である。それから宇宙的の心を指しては總該萬有心と申して居る。それで緣慮の心といふのは、外界一切の物を、五官の作用で緣じて起る心である。即ち眼に見、耳に聞、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身體で觸はる、斯ういふ五官作用から働き出る心それを佛教では緣慮心と言つて居る。其心は、取止めもなき一時的の心である。獨頭といふのは、これは單獨の心の働きで、直接には何も對境がない。色を見るとか、聲を聞くとか、さう云ふことなしに獨りでに起る心、それも細かに分けると、定中の意識とか、夢中の意識とか、獨散の意識とか、言つてゐる。今の言葉で言へば、想像とか、聯想とか云うて居る、其れのことである。それから眞實心これは文字と一寸も變らぬ、眞實至誠の心で少しも移り變りのない心である。以上は個人としての心を三通りに分けたのであるが、それから個人といふ境界を超えて仕舞うて、直ちに宇宙的大精神の當體を指して總該萬有心といふのである。それを丁度此處に箍めると、性の字は眞實心、情の字は緣慮の心、斯ういふ工合に分けて置いたら性と情との區別が能く分らうと思ふ。「唯其の聖たる所以の者は其の自性を見得る明白なるを以てなり」、聖と狂と分れるのは何處で分れるかといふと、先きの所謂總該萬有心を見得しさへすれば、今度は喜怒哀懼愛惡欲の七情を發して喜ぶとか怒るとか、哀しい、怖い、可愛い、惡い、欲しいと、思つても一向差障りはない。喩へば明珠の五色夫れ〳〵に映する樣なもので、情の起るのは自然に起るのであるから、情其者に罪があるのではない。「喜怒哀懼愛惡欲の情時に或は發すと雖も」それを、「直に眞淨明妙一枚の大光と作して愛用す」即ち根本的に於て自性を見得して居るから、自由自在なものである。此の心を見るといふことは一寸素人にはどんなことか分らぬか知らぬか、恒に菩薩は眼に佛性を見るとある如く、自性を見得して、掌を見る如くに迄で至つたら、如何に喜怒哀懼愛惡欲の情が時に發したりとも、其發したものか直に眞淨明妙一枚の大光となる。迷うて居る時は菩提といふものが煩惱であります、悟る時は煩惱が即ち菩提であります。此處が手を飜せば雨、手を飜せば雲といふ安排に、僅の心氣一轉の作用に依て、其働きが大變違つてくる。それが即ち聖人、所が、「其の狂たる所以の者」は外ではない。「自ら其性の明潔なるを知らず」丸で自己の自覺を缺いて居る。元來我々は初に云うた通り、總該萬有心の露はれたる、個人としての眞實心を備へて居る。其心は元來明潔なるものであるにも拘らず、自己の自覺が足りない故に、「利衰毀譽稱譏苦樂の風に漂溺せられ」此の利衰毀譽稱譏苦樂といふは、經文にも色々出て居りますが『大般若經』

に菩薩所レ行、於レ利於レ衰、於レ毀於レ譽、於レ稱、於レ譏於レ苦於レ樂、平等不變とあり。又『佛地經論』に此八法、世間所レ愛所レ憎、而能扇二動人心一名レ之爲レ風、苟心所レ有レ主安二住正法一不レ爲二愛憎之所一惑亂一即八風不レ能レ動云々とあり。又『維摩經』佛國品の偈に、毀譽不レ動如二須彌一ともある。其れに就き昔し宋朝時代の有名な黄山谷が黔南といふ所に謫居して引込んで居る時に、酒を制し、欲を絶ち『大藏經』を讀むこと凡そ三年。常に云ふに利衰毀譽、稱譏苦樂の八風、四威儀中に於て未だ曾て相離れず。古の元聖大智と雖も八風の外に立つあらんや、道を學ぶに非んば知らざる也と斯ういふことを言うて居た。流石黄山谷抔は頗る此道に這入て居るから、斯ういふ事を言つた。利の字はどういふものかと言へば凡そ我れに益するものを名づけて利と爲す。衰は我れに減損するものを名づけて衰と爲す、毀は陰に毀訕せられるを毀と言ひ、譽は陰に讃美せらるゝを譽と云ふ、稱は、陽に讃美せられ、譏は陽に誹刺せられ、苦は即ち逼迫の義て惡緣惡境に遇うて身心を逼惱するを苦と云ひ、樂は即ち歡悅の義て好緣好境に逢うて身心を適悅するを樂と云ふのてある。そこて其狂たる所以のものは自性の明潔といふことに自ら氣附かずに居るが爲に、利衰毀譽稱譏苦樂、八萬四千の煩惱の風に、朝から晩迄で吹飛ばされ、漂はされて、「七情交ごも相攻め」といふ有樣て、「未だ始めより窮あらず」遂に疑から疑に這入り、暗きより暗きに葬むられて仕舞ふ。「卒に自己本有の光輝を昧沒す」所謂自己本來の面目を昧して居る、「是を以て悟と迷と分れ、聖と狂と別る。之を爲す如何」それなら如何にするか、狂を轉じて聖と爲し、迷を轉じて悟となす方法は如何。「蓋し悟の時情皆性と爲り迷の時性却て情と爲る」これも言葉の通りてありまして、如何にも明かな言葉てあります。悟つた時は、喜怒哀懼愛惡欲の情が、其儘一味平等の本性となる。能く水の性を知る者は、千波萬浪、寄せては返す其波の中にあつても、湛然たる水の本性を認めて居る。迷の時は性却て情と爲る、若し亦無明の一念が玆に萌す時は、忽ち水の本性を忘れ、寄せては返す波の中に漂溺されて仕舞ふ。それならばそれを如何にするか、「只須らく迷情の本源を截斷すべし」『宗鏡錄』といふ書物に、無明癡惑、本是法性也、以二痴迷一故、法性變作二無明一如二眠來變レ心有二種々夢一。又曰く、如二人因レ地而倒、因レ地而起一正隨レ迷時、名レ之爲レ識、正隨レ悟時、名レ之爲レ智、但隨二迷悟一立レ名、若覺二始終一如二空中求レ迹依住所在終不可得也とあり。又『仁王般若經』には菩薩未二成佛一時以二菩提一爲二煩惱一菩薩成佛了以二煩惱一爲二菩提一とある。又古き道歌に「澁柿の澁こそよけれ其まゝに變りはてたる柿の甘さよ」ぢや。只爲らく迷情の本源を截斷すべきてある。昔し僧あり古德に如何なるか是れ涅槃の心と問うたら、古德は直に生死の心を盡せと答へられた。スルト更に僧が如何なるか是れ生死の心と問うたら、古德が涅槃を求る即ち是れ生死の心なりと答へられた、是等は味ふべき言てあります。又或る古德の言葉に、念起是病、不レ續是藥、これも適切の敎てある。其他にも色々あるが、玆に亦妙心寺の開山、關山國師は、餘り語錄抔は傳はつて居らぬが、いつも坊さんが來て、私は生死大事の爲に其れを決着せんとて參りました、何卒御垂誡下されと云ふと、國師は

慧玄（國師の諱）が這裡に生死はない、そんなことを決着する積りならばお門が違ふ、サッサと脇へ行けと言て大喝して遂出された。さういふ辛辣なる手段を以て、學者に接せられた。其他例へば、楠正成公が、湊川に於て弟と刺違へる前に、明極楚俊禪師に參じた因緣がある。正成曰く、生死交謝の時如何。禪師曰く、兩頭俱に截斷して、一劍天に倚て寒し、正成曰く、畢竟如何。禪師威を振つて一喝す。ソコデ迷情の根源を截斷するは、即ち見性にあり」見性は如何にするかと言へば、「見性は即ち克念に在り」自分の邪念に打勝つといふに在る、「然らば則ち克念聖と作るの一語、即ち吾が門見性成佛の轉語なり」斯ういふ風に論じてくると、今此の『書經』に出て居る克念といふ此の一語が、即ち吾が見性成佛の轉語、變へ言葉である。けれども見性といふと、其意味は深刻であるが、克念と言へば未だ根本に觸れて居ない樣で、只そこには多少の優劣がある丈けで、併し意味に於ては變らぬ。「語の異なるを以て之を怪しむ莫かれ、詩に曰く」これは『詩經』の伐柯の篇に出て居る。『中庸』抔にも、孔子が此の言葉を引いて居られる。「子曰く道人に遠からず、人の道を爲して人に遠きは、以て道と爲す可らず。詩に云ふ「柯を代り柯を伐る、其れ則ち遠からず、柯を執て以て柯を伐る尙以て遠しと爲す」と出て居る。柯は枝てあります、木の枝を以て木の枝を伐る其則ち遠からず、或人が鉞の柄を造らうと思ひ附いた、さうして木の枝を伐てそれを造つて、鉞の柄にしやうといふ斯ういふ意味であります。丁度鉞の柄も木の枝から出來た、今鉞を造らうと伐り落す枝も矢張り枝だ、どちらも枝であります。

一つは既に鉞の柄にして仕舞つた、一つはこれからしやうといふ、それ丈けの違ひだが、其柄の手本は我が己に持つてをるのである。然るに彼の枝を取てさうして此の柄を造るといふは、まだそこに迂遠な處がある。例へば自分の目で自分の目を見樣と言ても見えないが、其目其儘でそこに見ると云ふ手本がある。克念の意味は、斯の如き言葉の上に照して、其微妙なる所に徹底せよとなり。噫これは講釋する丈が野暮ぢや。

第三十一講　一貫（第四則）

孔子曰。參乎。吾道一以貫之。參曰。唯。

一者。非數義。凡道之爲體也。甚難言矣。其爲用也。亦不測矣。故强唱曰一。已吾大雄以一音演法。伯陽拘一以爲天下式。宣尼亦只以一貫立宗旨。余嘗問學者。一是何物。非四大。非五蘊。歷然現在儞鼻孔裏。若道得諦當。許儞見一貫。未嘗有適吾機者。宋儒釋一唯曰。應之速而無疑之謂。是則是。蹉過了。山野先是蓄疑于此有年矣。三十一歲時。徹見這妙處。始識得曾參腕頭有拔山力。不禁

歡喜。不知飲食之味。累日。聖賢之機言。寔一語千金也。後至門人間。輙只答忠恕而已。彼云此云。一放一收。其美不可言。太掖芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。顏回沒後。得道統正脈者。爲曾參一人。於是可觀矣。

和訓　孔子曰く、參や、吾が道は一以て之を貫く。參曰く唯。

一とは數の義に非ず、凡そ道の體たるや、甚だ言ひ難し、其の用たるや、亦測られず、故に强いて唱へて一と曰ふのみ。吾が大雄一音を以て法を演ず。伯陽は一を抱いて以て天下の式となる。宣尼亦只一貫を以て宗旨を立つ。余れ嘗て學者に問ふ、一是れ何物ぞ、四大に非ず、五蘊に非ず、歷然として儞の鼻孔裏に現在す。若し道ひ得て諦當ならば、儞に計す一貫を見ることを、未だ嘗て吾が機に適ふ者あらず。宋儒一唯を釋いて曰く、應ずるの速にして、疑なきの謂なりと、是は則ち是、蹉過了。山野是より先き疑を蓄ふ此に年あり、三十一歲の時、這の妙處を徹見す。始めて曾參の腕頭拔山の力あるを識得す、歡喜に禁へずして、飲食の味を知らざること累日、聖賢の機言寔に一語千金なり。後門人の間に至つて、輙ち只忠恕のみと答ふ、彼と云ひ、此と云ひ、一放一收、其の美言ふべからず。太掖の芙蓉、未央の柳、芙蓉は面の如く、柳は眉の如し。顏回沒して後、道統の正脈を得る者、曾參一人となす、是に於て觀るべし。

【講話】　今日は第四則であります。この本文は、既に御承知の通り『論語』の里仁の篇に出て居るのであります。其の全文を擧ぐれば。子曰。參乎吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。といふのである。今其の最初の所を取て、以て本則に揭げられた。或時孔子が參乎と呼ばれた。言ふ迄もない、孔子の道統を得たる者は曾參一人であることは前にもあつた、其の曾參に對して、名を呼んで、參よ、「吾道は一以て之を貫く」吾が此の大道は、只一以て貫ぬいて居るそれへ對して曾參は「唯」と答へた。唯といふ字義は『曲禮』杯に「父召すときは諾すること無し、先生召せば諾すること無し、唯して起つ」と、さういふ工合に書いてある。諾といふ時には明にハイと返事するのでありますが、唯といふと、ハッと只最も速に引受けた言葉である。文意は誠に見易い言葉であるが、扨て其孔子の心を推測つて見ると、中々深遠にして高妙なることとて、大體道といふものは我々は平生屢々口にして居るが、扨て如何なるものが道であるかと考へて見ると、茫たり漠たりて何を指して道といふか、捕まへ憎いのである。さういふ樣な有樣であるが、先づ一二古人の道に對する言葉を擧げて見ると、老子杯の言葉も色々あります。今自分の記憶して居る所を一つ擧げて見ると「物あり混成す天地に先つて生まる、寂たり寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たる可し、吾れ其名を知らず、之を字して道と曰ふ、强ひて之が名と爲して大と曰ふ。云々」中

中是等も面白いでことあります。まだ名が無いのでありますから、物と言ふ、物と言つても、或る一つを物と言ひ、一つを心と言ふ。さういふ相對的の物ではない。今此處で言ふ物といふのは、或る物といふより仕方がない。まだ神とも佛とも道とも、本當の名が附いて居らぬ。斯ういふ言葉の意味が修養のある人には、自分の頭に自ら極念に現はれてくるだらう。物あり混成す、一切の物が混成して居る、天地に先つて生る。大抵我々が今見聞覺知して居る所の物は、天地始まつて以來の現象で、此の現象は即ち天地分れて後の現象であるが、此處に所謂物といふのは、然らず。天地に先つて生ずるして見ると、どういふ物であらうか、人が目を欹つて見樣と思つても、一向音も沙汰もないから、寂たり寥たり、極ひつそりとして居る、面白い言葉である。孔子も或る場合に、上天の事は聲も無く臭も無しと言はれた樣な意味で、獨立して改めず、其物は對待的の物でない、嶄然として獨立してをる凡そ世の中の物は皆對待的の物で、天あれば地あり、陰あれば陽あり、山あれば川あり、男あれば女あり、皆相對的で相手方がある。今物ありと指したのは、獨立的で改まらぬ。昔に在ても今に在ても變らず、此處に在ても彼處に在ても同じ事である。周行して殆からず、周行は、普く行はれてと讀んで宜しい。そんな獨立的の物であるが、其の獨立的の物に離れて別に何か一つあるかといふに、さうでもない。獨立といふことを佛教言葉で言ひ換ると、平等的のものである。平等的のものであるが、直ぐに差別の上に行はれて居るのである。これは私の蛇足を添へたのでありますが、さう言て宜からふと思ふ。相對的の物かと言へば、さうでない。獨立して改めない。それでは一切の現象から離れて獨立的の物かと言へば、さうでない、何事にも行渡つて居る、地を這うてをる蟻の鬚の樣な小さなものにも、野原に咲いて居る名も無き小さな花にも行渡つて居る。小さな花は小さな一つの天地を造つて居る。小さな蟻は小さな宇宙を含んで居る。私は原文に就て委しくは知らぬが、英國の詩聖なるテニソンは、一輪の花を知れば天地及一切萬物を知ると言て居る、矢張り普ねく行はれて殆からずといふ意義であらうと思ふ。其物にはどういふ名前があるかといふと、名はない、名が無ければ人にも示すことが出來ないから、已むことを得ず、字して道と曰ふ、我々が斯ういふ工合に之を考へ來るといふと、我々は矢張り其物の中に宿されて居ると言ても宜い。又主觀的に考へれば、其物と共に起き、其物と共に寢ね、其物と共に常住活動して居ると言ても宜い。老子はそんな鹽梅に申して居る。又バイブルの中にも、太初に道あり、道は神と共にあり、神は道なり、道は神なりともあつた樣に覺えてをる。それが佛教とか、若くば禪とかいふ者の中に這入つて見ると、佛の一代の說敎も、又祖師の千七百則の公案も、畢竟道といふ者の甚深微妙なることを示されたに外ならぬ。三祖鑑智禪師の言葉に依ると、至道は無難なり、唯簡擇を嫌ふ、但憎愛なければ、洞然として明白なり、毫厘も差あれば、天地懸隔す、是は只一つ擧げたのてありますが、斯う云ふ意味は到る處にあります。左れば斯の道を得た人が釋迦なり、孔子なり、耶蘇なり、マホメットなりで、其得た所に多少深淺優劣の別はある

か知らぬが、大體に於て其道を得て、始めて釋迦たり、始めて孔子たるのである。斯の道は釋迦獨り專にして居る譯でもなく、孔子獨り之を恣まゝにし、私して居るといふ譯のものではない。詰り斯の道あるが爲に、天地は玆に成立つた。斯の道あるが爲に、我々は生活の眞意義といふものを此處に現はして居る。それで孔子が或時言はれるに、參乎、吾が道一以て之を貫くと、時に、曾參は、それに多少の說明を附けるとか、多少の理窟を加へるとか、そんな事は一言半句も言はんで、唯と受けたそれが先師洪川和尙の最も稱嘆する所である。

これから評に遷つて、「一とは數の義に非ず、凡そ道の體たるや、甚だ言ひ難し、其用たるや、亦測られず」、一と此處に本文にあるのは決して數字上の意義ではない。暫く道といふことを體と用との二つに分ける。體用といふものは、必ず何事にもある。今道體といふものから言ふと、孟子は「曰く言ひ難し」と申したが、言ひ難し所ではない。實に言語文字、想像分別といふ樣なそんなとは、スッカリ立起えて居るのであるから、如何なる人と雖も、此處に一言を挾むとが出來ぬ。所謂止々不須說我法妙難思で、此儘大道は現はれて居るといふより仕方が無い。「これは〳〵と斗り花の芳野山」、「松島やあゝ松島や松島や」、それでも道體には遠ざかつて居るが、斯う言ふより仕方がない。然るに其大道の作用といふものに至つては、實に千變萬化、變現極りない所のものであるから、中々目の子算用で推測ることが出來ない。今日科學とか、サイエンスとか言うて居るのは、其の部分々々に就て、只

或る程度迄の道理を明らめて行く丈けで、其用といふものは、實に限ない所のものである。「故に强て唱へて一と曰ふ已」、已むを得ず之を孔子は一と言はれた。又「吾が大雄」佛樣の事を大雄と言ふ。釋迦は英雄中の英雄といふ樣な意味から大雄と言ふので、吾が釋迦は「一音を以て法を演ず」、これは『維摩經』の言葉に依ると「佛は一音を以て法を演說す、衆生類に從て各々解することを得」といふ言葉がある。斯ういふ時でも、今の數字の一の字ではない、此の一眞實の旨を以てさうして大法を演べると、斯う佛は言うて居られる。又「伯陽」といふものは老子であります。老子の別名と言て宜い。其の伯陽即ち老子は、「一を抱いて以て天下の式と爲る」斯ういふことを言て居る。老子の曲則に「少なるときは則得、多きときは則惑ふ、是を以て聖人は一を抱いて天下の式と爲る」と斯ういふ言葉がある。そこから來て居る。「宣尼亦只一貫を以て宗旨を立つ」宣尼即ち孔夫子は、亦只本文にあるが如く、一貫を以て宗旨を立て居る。其言葉は違つてゐるけれども、其指して居る所は、外づれて居らぬ。斯樣な有樣であるが、余れ嘗て學者に問ふ」余れ洪川も亦斯の道を修行する所の者に尋ねた、「一是れ何物ぞ」今孔子も一と言ひ、老子も一と言ひ、又釋迦も一と言て居るが、其一とは何か、素より一切萬法は、一元に歸するのであるが、其の一とは何か、斯ういふことは皆室內の調べ事だ。趙州は、僧の萬法一に歸す、一何の處にか歸すの問ひに答へて、「吾れ青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤」と云はれたが、斯ういふことは、迚も門外漢では窺ひ知ることは出來ぬ。今お話しす

るのは只其の字面のお話をする丈けて「一は是れ何物ぞ」と、斯う自分に引受けて見る「四大に非ず、五蘊に非ず」四大五蘊といふ様なことは、度々先にお話して置いたが、四大とは地水火風、五蘊とは色受想行識の五つて、ツマリ物心の二つてある。四大に非ず(身にも非ず)、五蘊に非ず(心にも非ず)身體と言ても、靈魂と言ても、皆な寄せ集め物で、これを指す自性がない。四大に非ず五蘊に非ず。それなら何も無いかと言へば、さうでない。丁度水中の月の如く、水に映つて居る月影は、キラ〳〵として居るが、手を出してこれを捕へ様としても、捕へることが出來ぬ。又鏡中の花の如く、矢張り鮮やかに映つて居るが、それなら何か手に觸るものがあるかと言へば、何も無い。それと同じて、四大に非ず、五蘊に非ず、何も無いかと言へば「歴然として『爾の鼻孔裏に現在す』あり〳〵と汝の鼻先にブラ下つて居る。即ち鼻先にブラ下つて居ると言ても足下に踐まへて居ると言ても同じで、此物と共に朝から晩迄行住坐臥、活潑に働いて居る。これは先師が誰にても修行者に對して示された。「若し道ひ得て諦當ならば」此處の所を親しく答へることが出來たならば「爾に許す、一貫を見ることを」孔子の一以て、之を貫せりと言はれた道の本體を、恰も掌を指すが如く見ることが出來やう。「未だ嘗て吾が機に適ふ者あらず」大抵は一種の哲學的理窟を並べるか、科學的の説明を施す位のものてあらう。夫は藥の効能書の様なものてある。直覺的に道の根本に徹底する者は一人もない。佛法の中にも敎相學の上で、法理は十分に分つて居るが、そんなことては眞の事實に觸れない。我々が生命の根元といふか、生活の眞意義といふものを丸出しに出したといふものてはない。所が多くの人は字面通りの説明をして「宋儒一貫を釋いて曰く」程子朱子杯が、孔子の一貫に對して、曾子の答へて唯というのを解釋して、斯ういふ註釋をして居る。「應ずるの速にして疑なきの謂なり」と言て居る。字義はそれに違ひないが「是は則ち是」斯ういふ解釋をして居るのは、惡いことはないが、モウ一つの一隻眼を備へて見るといふことになると「蹉過了」である。それ丈けで孔子も肯はれまいし、曾子もそれ丈けて道統を傳へるといふ、そこ迄には至らぬであらう。「山野是より先き疑を蓄ふる此に年あり」これは先師の自傳を讀めば分りますが、先師は初め儒に入り、晩年に儒を捨て、禪に入つたので、我々の様に小さい時から、小僧となつた者とは經歴が違ふ。晩く迄修業されて、其修業中に、一とは何かといふ疑を抱かれて、頗る苦まれたが、漸く「三十一歳の時に這の妙處を徹底す」三十一歳の時に此の極處を發見し得ることが出來たといふのは、此時分に、一寸今擧げました趙州萬法歸一の則が、先師の手に入た。其力に依て類推して、孔子一貫の理を知られたのてあらう。そこに至つて「始めて曾參の腕頭拔山の力あるを識得す」只ハイと返事した丈けてあるが、其の唯といふ一字の中に、拔山の力がある。昔漢の高祖と天下を爭つた楚の項羽の如きは、力山を拔き氣世を蓋ふといふ、一大豪傑てあつたが、其の山を拔く力が唯と答へた中に歴々として備はつて居るといふことが、始めて痛快に分つた。「歡喜に禁へずして飲食の味を知らざること累日」眞に其一といふものに徹底した時の喜といふものは、

らざれば食へども其味を知らぬといふ言葉があるが、それと同じ事で、人間に最も急切な番始まりて、飲まず食はずして人間は贅澤は言はぬ、飲食があつて、それから色々贅か、飲まず食はずとなつては、色々の慾念は起るものでない。それ程急切な飲食だが其を知らぬことが累日であつた。「聖賢の機言寔に一語千金也」斯ういふ樣な有樣で、聖人賢

機言、機言といふは神機一轉した所から言へば突發した言句である。唯と答へた只一字丈けても千金の價がある。「後門人の間に至て輒ち只忠恕而已と答ふ」最初に里仁の篇の言葉を擧げた通りでありまして、孔子は吾道一以て之を貫せりと言はれたのに、曾子は唯と答へた丈けであつたから、外の弟子達には一向分らなかつた。そこで孔子が出られた後、門人が曾子に問うた。孔子樣のお言葉とあなたのお答とは、どういふ意味でありませうと言つたら、曾子が、夫子の道は忠恕而已と答へた。といふことが忠恕といふ樣な意味に見える、一といふことを曾子が忠恕とのみ解釋した樣であるが、こゝは所謂人みて法說けの手段でやられた。此の問答往來の有樣を、禪門公案の中で、モウ一つ類例を擧げて見ると、多少會得出來やう、或僧が趙州に尋ねて、狗子に還て佛性有りや、也た無やと尋ねたら、趙州は無と答へた。これは禪門で有名な難かしい公案で、此の一無字の公案を、古來幾多の英雄豪傑が、皆血の涙を流して研究をして、立派な人になつて居る、其の一則だ、問うた坊さんは、始から理窟を持つてをる。佛は一切衆生悉く佛性有りと言はれたのに、何ぜ狗子丈けには佛性がござらぬか。無といふ字を虛無又は滅無の意味に誤解した。こんなことでは迚も禪宗の眞意は分らぬ。此坊さんは只當り前の學問的の理窟で言た。無といふのは狗子に佛性が無いと受けたのであらう、其位の坊さんであつたから、趙州が再び彼れに業識性あるが爲なりと答へた。業識といふことを平たく言ふならば、迷の心だ、之を敎相的に解釋するならば餘程の言葉を費さなければならぬが、今は要がない。即ちあれには迷の心があるからサと言はれた。斯ういふことは文字や言語の表面からは迚も其眞意は分らぬ。分らぬが、其問答往來の樣子が、能く似て居る。一以て貫せり、唯と受けたが、それは孔子と曾子の間には通じて居る、門人には薩張り分らぬ分らなかつたから後に問うたら、曾子は、一といふ字を忠恕而已と答へた。これは又曾參の力であると、先師はそこを大變面白く見て居られる。忠恕といふことは、大事であるが、一貫といふことに付ては、忠恕と世間で解して居る位の意味ではまだ盡きない、ソコを曾子は問ひ手相應に忠恕と斯う答へた「彼と云ひ此と云ひ」始めは一貫といふ時には唯と言て居る。門人が尋ねた時には忠恕而已と言た。彼と云ひ此と云ひ「一放一收」忠恕而已と答へた樣な所は一放てある。唯と答へた所は一收てある、一方は許し一方は收めた。放の字は與へるといふ字に變へて宜い、收の字は奪の字に變へても宜い、一度びは與へ一度びは奪つて居る、活かしたり殺したり、其道を扱う自由といふものは「其美言ふ可らず」其手際の誠に奇麗なことは、言葉では言ひ難いが、强ひて言ふならば、斯うてもあらうか。「太掖の芙蓉未央の柳」あちら宮城の中に太掖池と

心此處に在らざれば食へども其味を知らぬといふ言葉があるが、それと同じ事て、人間に最も急切な物は飲食が一番始まりて、飲まず食はずして人間は贅澤は言はぬ、飲食があつて、それから色々贅澤を思ひ附くが、飲まず食はずとなつては、色々の慾念は起るものてない。それ程急切な飲食だが其飲食の味を知らぬことが累日てあつた。「聖賢の機言寔に一語千金也」斯ういふ樣な有樣て、聖人賢人の機言、機言といふは神機一轉した所から言へは突發した言句である。唯と答へた只一字丈けても千金の價がある。「後門人の間に至て輒ち只忠恕而已と答ふ」最初に里仁の篇の言葉を擧げた通りでありまして、孔子は吾道一以て之を貫せりと言はれたのに、曾子は唯と答へた丈けてあつたから、外の弟子達には一向分らなかつた。そこて孔子が出られた後、門人が曾子に問うた。孔子樣のお言葉とあなたのお答とは、どういふ意味てありませうと言つたら、曾子が、夫子の道は忠恕而已と答へた。といふことが忠恕といふ樣な意味に見える、一といふことを曾子が忠恕とのみ解釋した樣てあるが、こゝは所謂人みて法說けの手段てやられた。此の問答往來の有樣を、禪門公案の中て、モウ一つ類例を擧げて見ると、多少會得出來やう、或僧が趙州に尋ねて、狗子に還て佛性有りや、也た無やと尋ねたら、趙州は無と答へた。これは禪門て有名な難かしい公案て、此の一無字の公案を、古來幾多の英雄豪傑が、皆血の涙を流して研究をして、立派な人になつて居る、其の一則だ、問うた坊さんは、始から理窟を持つてをる。佛は一切衆生悉く佛性有りと言はれたのに、何ぜ狗子丈けには佛性がござらぬか。無といふ字を虛無又は滅無の意味に誤解した。こんなことては迚も禪宗の眞意は分らぬ。此坊さんは只當り前の學問的の理窟で言た。無といふのは狗子に佛性が無いと受けたのてあらう、其位の坊さんであつたから、趙州が再び彼れに業識性あるが爲なりと答へた。業識といふことを平たく言ふならば、迷の心だ、之を敎相的に解釋するならば餘程の言葉を費さなければならぬが、今は要がない。即ちあれには迷の心があるからサと言はれた。斯ういふことは文字や言語の表面からは迚も其眞意は分らぬ。分らぬが、其問答往來の樣子が、能く似て居る。一以て貫せり、唯と受けたが、それは孔子と曾子の間には通じて居る、門人には薩張り分らぬ分らなかつたかち後に問うたら、曾子は、一といふ字を忠恕而已と答へた。これは又曾參の力であると、先師はそこを大變面白く見て居られる。忠恕といふことは、大事てあるが、一貫といふことに付ては、忠恕と世間て解して居る位の意味ては まだ盡きない、ソコを曾子は問ひ手相應に忠恕と斯う答へた「彼と云ひ此と云ひ」始めは一貫といふ時には唯と言て居る。門人が尋ねた時には忠恕而已と言た。彼と云ひ此と云ひ「一放一收」忠恕而已と答へた樣な所は一放てある。唯と答へた所は一收てある、一方は許し一方は收めた。放の字は與へるといふ字に變へて宜い、收の字は奪の字に變へても宜い、一度びは與へ一度びは奪つて居る、活かした り殺したり、其道を扱う自由といふものは「其美言ふ可らず」其手際の誠に奇麗なことは、言葉では言ひ難いが、强ひて言ふならば、斯うてもあらうか。「太掖の芙蓉未央の柳」あちら宮城の中に太掖池と

いふ池があつて、其池の芙蓉といふ蓮に似た所の清麗な花が咲いて居るが、其の太掖の芙蓉の如く、今未央宮の柳の糸を垂れた如くで、丁度芙蓉は面の如く柳は眉の如し」其美しき顔色は、太掖池の芙蓉の花の如く、其の清楚なる眉目は、未央宮の柳の如き有様である。「顔回沒して後」顔回は亞聖と言はれた人だが、夭死てあつたから「道統の正脈を得る者曾參一人と爲す、是に於て觀る可し」道統の正脈を得た者は、曾參一人てあるといふが、成程さうてもあらう。其實際は、此の一則に於ても見ることが出來ると言はれた。

第三十二講　曾參（第五則）

曾參有疾。召門弟子曰。啓予足。啓予手。詩曰戰戰競競。如臨深淵。如履薄氷。而今而後。吾知免夫小子。

這翁臨生死代謝之際。警示門人。有此妙密之伎倆。古往今來。縫掖門中見一人矣。諸家以啻免乎毀傷之事見曾參。可惜未盡曾參在。學者不可不知也。

神訓　曾參疾あり、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け、詩に曰く、戰戰競競として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、今にして而して後吾が免るるを知るかな小子。

這の翁生死代謝の際に臨み、門人に警示す。此の妙密の伎倆あり、古往今來、縫掖門中一人を見る。諸家啻に毀傷を免かれるの事を以て曾參を見る。惜むべし未だ曾參を盡さゞることあり、學者知らずんばあるべからず。

【講話】　此則も皆さん御存知の通り『論語』の泰伯の篇に出て居る。字面は誠に易らかな字面であつて、「曾參、疾あり、門弟子を召して曰く、」字義上から言ふと、同じ病でも此の疾の字の書いてある時には最も大患で、モウ迚も此度は再び起たれないといふことを自覺せられた。そうして平生敎へ子たる所の門弟子を召して言はれた大抵人の死に際には、其の人の人格が赤裸々に露はれるもので、平生色々のもので飾り立て居つたものでも、其金箔が總て剝落して仕舞つて、其人の性格の有の儘が此の死に際に現はれてくる。勿論病に依ては色々樣々の現象が違うでありませうが、普通天壽を終へて死ぬといふ時は、其人の一生の性行を卜することが出來る。だから同じく『論語』の上に「鳥の將に死なんとする其の鳴くや哀し、人の將に死なんとする其の言や善し」といふ樣な言葉もある。私共も度々人の死に際に立會つて其れを實見したことがあります。左れば曾子も今其の臨終の際に、門弟子を召して斯ういふことを言はれた。「予が足を啓け、予が手を啓け」先づ世間並てあるならば子孫の爲めとか、家庭の爲めとか、財產分配の事とか、色々ありませうが、曾子の臨終には其れが少しもないのである。吾邦でも一寸芭蕉翁抔の臨終を見ると、仲々面白いことがあります。即ち芭蕉翁が臨終の時

に、門人共が翁に向ひ、凡そ勝れた人々には誰でも辭世の句といふものがありますが、先生にも此際是非辭世の句を咏んで置いて下さつたなら、吾等は實に有難う存じますと言うたら、芭蕉翁は忽ち色を嚴そかにして門人に言つた。今更さういふことを言ふのは後れ馳せてはないか、我當年始めて古池の一句を唱へ起してより今日幾十年の間、毎日吐き出だす幾多の句は一々遺言ならざるはないのである。今更此場に臨んで、改めて遺言などゝは迂濶千萬てあると警められた。曾子の臨終と少しく趣を異にすれど、爲人の手段は東西同風である。今曾子は予が足を啓け、予が手を啓けと言はれた丈けであつて、お主達、とつくりと我が身體を調べて呉れよと言うておいて、そうして『詩經』の言葉を引いた。これは『詩經』の小旻の章に出て居る、「戰戰競競として深淵に臨むが如く薄氷を履むが如し」、戰々といふのは恐懼の形、競々といふのは戒慎の形てある。我が此の身體を父母に受けてより、今日に至る迄日夜戰々競々として之を保持し、恰も深き淵に臨むが如く心持、或は薄氷を履む樣な心持で先づ〳〵今日迄て幸に大過なくして此處に至つた。「今にして而して後吾れ免るを知るかな小子」。罔極の大恩ある兩親よりして御預かりしたる大切なる品物即ち此身體に聊の傷も附けず、大なる過ちもなくして今日只今之をお返しすることが出來たぞよ。皆の衆も喜んでくれと、誠に親切の籠つた所の臨終の遺言てあります。それを先師が評せられたのてありますが大抵此章に就て儒者達の註釋を見るといふと、斯ういふ風に書いてある。「父母全くして之を生み子全くして、之を歸す」。言ふ迄も無く、我が身體髮膚は皆父母から受けたものて兎の毛一本でも皆我が物ではない、親から授かつたものてある、其の父母が全くして生んで呉れられたのを、其子たる我れがそれを全うして何一つ傷つけずして之を歸す」。といふのは、結構なことだ。「曾子終に臨んて手足を啓くは、是が爲の故なり」、斯ういふ註釋が多い。今予が足を啓け、予が手を啓けといふことは詰り傷つけずして今日只今お返へし申す、斯ういふことてある、此れは勿論惡るい註釋ではないけれども、併し先師洪川和尚の見る所は、其處に止らぬ。先師の說を此處へ一寸言うて見ると、凡そ孝を爲し忠を爲す形を以てせずして、心を以てするなり。縱令面上に大癜(おほきな)あるも、衷心に忠誠あるときは忠孝の人たるを失はず。肌膚玉の如く一點の瘢なしと雖も心中正しからず、道情を打失せば、此は是れ人にして人にあらず。正受老人言へることあり、曰く、設令七尺の身材あつて身子滿慈の辨智を巧にするも、正念工夫相續なきものは之を殞爛膨壞の死人と名づくと。今若し曾子、我か身體只瘢なきのみを以て、自ら身を全うして父母に還へすと言はゞ則ち是れ婦人小子の孝のみ、君子大人の見にあらず、未だ嘗つて孔門上足の翁と爲すに足らず、曾子末後の作用、吾知る免夫小子の一句を言及す、誠に甚深の意味あり、大に須らく子細にすべし(元漢)。此說の如く國家一旦緩急あるといふ樣な場合には死を見ること鴻毛の如く假令ひ身體に如何程の傷を負うとも決して避くる所ではない。殊に我々大和民族は此の精神が凜々として居らなければならぬ。今假りに孔子孟子が、支那四百餘州約四億の人民を率ゐて無名の軍を起し、吾邦に

來冠したりとせば、吾等は坊主頭に鉢卷してゝも眞先きに進んで、彼れ孔孟のソッ首を引拔かねばやまぬ。之が爲め。身體髮膚を毀傷する位のことは疊悟の前でなければならぬ。先師又曰く『戰戰〳〵句は大道を保重するの切意なり、含蓄甚深味ふべし。蓋し不睹不聞は大道の本體なり、睹ざる所の無形、聞かざる所の無聲に於て、之を戒慎して始めて大道を保重するの實行と謂ふべし。是れ曾子詩經の明言を引證するの微意なり、學者勤めて審細にすべし、詩の小雅小旻の卒章に曰く、敢て暴虎せず敢て馮河せず、人其一を知つて、其他を知ることなし。戰々競々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」。集註に衆人の慮は遠きに及ぶ能はず、暴虎馮河の患は近くして見易すし、則ち之を避くることを知る、喪國亡家の禍は、無形に隱るゝときは以て憂となすを知らざるなり、故に戰々競々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、其禍の及ぶことを懼るゝなり。』

「這の翁生死代謝の際に臨み門人に警示す」、生死代謝の際といふことは中々容易ならぬ場合で、平常無事の時とは大分違ふ、其一生の總勘定の秋に臨んで、「此の妙密の伎倆あり」水も洩さぬ深き所の考がある。「古往今來縫掖門中一人を見る」縫掖といふ字は、辭書で調べて見ますと、大衣なりとある。詰り儒者の被る衣物である。古に於ても今に於ても、儒者達の中に於て、斯の如き所の人は、實に只曾子一人斗りである。「諸家啻に毀傷を免かれるの事を以て曾參を見る」。然るに大抵の後世の儒者達は之を毀傷せずして、返へすといふとにのみ重を措てをる。勿論其註釋も惡るいことはないが、其れは

只一通りの見方である。我れ洪川の見る所では、それ丈けでは滿足が出來ぬ。「惜む可し未だ曾參を盡さざること在り」。それ丈けでは道統を受け得たるといふ曾參の奥の院迄て見屆けたといふことは出來ぬ。「學者知らずんばある可らざる也」、苟も道を知る所の者は、此處迄て考へて貰はなければならないといふ工合に評せられた。斯ういふ樣な有樣であつて、之を若し禪門に例を取ると、幾つも例がありますが一寸一つ擧げて見ると、昔百丈の惟政禪師といふは、法を慈明和尙に嗣がれた人で、其の惟政禪師が一日大衆に向つて、斯う言はれた。『汝等我が爲に田を開けよ、我れ汝等の爲に大義を說かん』斯ういふ垂示といふものは、我々修行者に取ては頗る有難い垂示である。大勢の大衆を捕まへて、お前達私の爲に開墾をして呉れ、此の百丈山は、斯ういふ大きな山であつて、未だ開けて居らぬが、何卒ぞ皆力を合せて荊を截り莽を闢いて此の荒れ山を立派な田地にしてくれ、若し其れが立派に出來あがつた曉には、我れ汝の爲に大義を說かん」。其骨を折た賞勞として、其方達に佛法の最も有難い悟りを說いて聞かせてやらうといふので、そこで一同力を合せて、汗水になつて、荒れた土地を開いて、サア田地が出來ましたから、これから大義をお示し下さいと申したら、其時百丈和尙が、どういふことを言はれたか、何んぞ六ケしい佛敎哲學の道理でも說くか、或は悟を開いた有難い話でもするかと思ふと何んだ、禪師はソレと曰つて、兩手を展開した。アヽ手に珊瑚の鞭を取て、驪龍頷下の玉を打ち碎ひた樣に見事である、それからモウ一つ日本の例を擧げて見ると、甲州鹽山の向嶽寺の開山、拔

隊和尚が(三光國師嗣子)正德四年二月二十日巳の刻に遷化される時に、端坐してさうして門人達に對して言はれるに『端的看よ、是什麼ぞ、與麼に看よ、必ず相錯らず』斯う高聲に唱へて、灯火の滅する如くに逝かれた。マア昔からして苟も法燈を相續した祖師方の末期は皆立派なことが書いてあるが、先師はこういふ禪の立場から今の如く此章を解釋せられた。併し儒者に言はせれば、そんなことは蛇足であると斥けるであらう。今一つ擧げて見るに、昔し宋の徑山の有名な大慧和尚が、曾子と顏回のことを四言の偈にせられたことがある。「五逆聞雷、曾參顏回、一粒豆子、爆出冷灰」、これも一寸禪錄を御覽にならぬと分らぬが、五逆罪といふのは、大罪惡で、例へば親を殺したとか、或は師匠を殺したとかいふことを、五通り算へて五逆罪といふが、さういふ惡人が雷鳴を聞くと、自己の良心が咎めて殆んどモウ自分の腸が引裂ける樣だといふことがある。そこから來た文字で、これは臨濟禪の惡辣な手段で、迷人の肝玉を奪ふことを形容したので、一粒の豆子冷灰より爆出すといふのは、冷めたい灰の中から、フト黑豆が爆出したといふ勢で、玆に味ふべき宗旨がある。これは大慧和尚の有名な偈であります。個樣に禪的に解釋して見ると、儒者達の解釋以外に更に趣味のあることがある(と言つて老師便ち下座された)。

第三十三講　愼獨　(第六則)

中庸曰。道也者。不可須臾離也。可離非道。是故君子戒愼乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子愼其獨也。

孔門三千徒。才明儁藝者。七十有二人。一陽之所驅。一雨之所霑。各自有所得。唯得大道之正統者。顏曾二人耳。顏回蚤世。故曾參獨得其宗。及孔伋受業於曾參。體究此一著。實學功夫。用力有年矣。竟通徹孔門玄旨。始唱出這語。此時去孔子稍遠。乃憂其愈久愈失其宗。遂著中庸。以授後學。其要在此數言。數言之眼目。在愼獨二字。蓋古人憐後學難入。諄諄如是。後世儒士。務徒辨釋聖賢語。未嘗務明覈聖賢心。故孔門傳授之心法墮如土。可痛可悲。學者苟欲爲孔子徒。先須依此語。强著精彩。反己觀照矣。觀照來觀照去。積歲月之久。念念不退。則忽然契當妙訣也。那時不覺不知拍掌大笑去在。於是平日山野所謂不玄之玄。不妙之妙者。果有自得焉。蓋於開入德要門。此外無更可撥轉者。

和訓　中庸に曰く、道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず。是の故に君子は其の睹ざる所

を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。隱れたるよりも見はれたるは莫く、微かなるよりも顯らかなるはなし。故に君子は其の獨を慎む。

孔門三千の徒、才明儁藝の者七十有二人、一陽の嘔むる所、一雨の霑す所、各自得る所あり、唯だ大道の正統を得たる者は、顏曾二人のみ、顏回蚤世す、故に曾參獨り其の宗を得、孔伋業を曾參に受くるに及んで此一著を體究す、實學功夫、力を用ふる年あり、竟に孔門の玄智に通徹し、始めて這の語を唱出す。此の時は孔子を去る稍遠く、乃ち其の愈久しくして愈其の宗を失ふを憂ひて遂に中庸を著して、以て後學に授く、其の要は此の數言に在り。敎言の眼目、慎獨の二字に在り蓋し古人後學の入り難きを憐んで、諄々として是の如し、後世の儒士、徒に聖賢の語を辨釋するのみに務めて、未だ嘗て聖賢の心を明覈するを務めず、故に孔門傳授の心法は、墮して土の如し、痛むべし悲しむべし。學者苟も孔子の徒たらむと欲せば、先づ須く此の語に依つて、强いて精彩を著け、己に反りて觀照すべし。觀照し來り觀照し去りて、歲月の久しきを積み、念々退かざれば則ち忽然として妙訣に契當せん。那時覺えず知らず、掌を拍つて、大笑し去るあらん。是に於て平日山野、所謂不玄の玄、不妙の妙、果して自得あらん。蓋し入德の要門を開くに於て、此の外更に撥轉すべき者無し。

【講話】　此の第六則は有名な『中庸』にある所の言葉で、御存じの通り、『中庸』一篇の眼目とも謂ふべきものは此一章に在る。是から後に十章程あるが、それは詰り皆此章を敷衍したというても宜しい位なもの、文字は例に依つて極く平易なものであります。「道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず」此本文に先つて、先師洪川和尙が又別錄に書遺されたことを、此處でちよつと御披露したい矢張り漢文で書いてあるのでありますから、寧ろくだ〳〵しく細かい辯を費すよりも、其漢文を一應讀んで見ます。『中庸』は性を盡すの書なり、首めに道といふは、性の名を表はすのみ、睹ざる聞かざる、是れ道の本體なり。戒慎恐懼は是れ道體を受用するの工夫なり。故に學者、時々刻々、常に其睹ざる所を睹て戒慎し、常に其聞かざる所を聞いて恐懼す。即ち工夫將に此實落の處あらむ。各成熟の後即ち力を盡すことを須ひずして、自ら獨を慎むの妙處を知らむ。豈外にあるの聞見を以て累と爲さんや。是を以て、未だ獨を見ざるときは則ち正に慎んで獨を見るを以て事と爲すべし。既に獨を見る時は、獨を慎むを以て事と爲すべし。故に貌言視聽必ず是に於てし、接物應事必ず是に於てし。貧賤富貴必ず是に於てし。死生壽夭必ず是に於てし。毀譽得喪必ず是に於てし。造次も必ず是に於てし。顚沛も必ず是に於てす。故に曰く、入るとして自得せざることなし』斯ういふ鹽梅に實錄に云うて居られます。是は顧ふに先師が最も精密に工夫せられた結果を、此通り載せて置かれた。之に辯を加へて、モット敷衍すれば、餘地がありますが、今回はそれを略して置きます。唯本文丈けは、あなた方が後に至つて翫味して下されたら宜しい。大體道といふものは、大抵な人が己を離れて外に在るもの

丶如く思ふのが常である。それ故に極く手近い所にあることを知らず識らず遠方に之を求めやうといふのが吾等の常であるけれども、道は須臾も離るべからずといふ。丁度我々が月夜の晩に人が二人居るとして、其中一人が西に行き、他の一人は、東に行くやうなもの、自分が東に向つて行くと、月影は恰も東に行く人に附き隨ふやうに見える、また西に行く人があると、其月影も亦西に走るやうに見える。それ位道は親しくて、我々に暫くも離れないものである。なぜと云ふと畢竟我々の道といふものは、我々自身が人々具足し、皎々圓照で圓かに成就して居るものなのである。今先師の立論をちよつと讀んだ通り、心の變名が、詰り道である。道といふものは則ち我が對して居る所のもの、道は須臾も離るべからざるものである。若しそれか暫くと雖も、我を離れて居るといふ道ならば、決して眞の道ではない。併しながら斯ういふことは、自分の身に體し、心に存して幾度か之れを翫味して始めて其道に副ふことが出來やうと思ふのである。故に餘り斯ういふ所には頗鑽なる理窟を申さぬ方が宜しいのである。「是の故に君子は其の睹ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。」最前申した通り、見ず聞かず、是れ道の本體といふ。まだ我々が眼を一つ明けざる所、耳を一つ欹てざる所、それが即ち大道の本體、其儘なのである。それから後に今の戒め慎みと云ひ、恐れ懼るゝといふのは、其大道の本體を日用に修養する所の工夫を述べたのである。それに照して此文面を眺めて見たならば、餘程親しいものが其處に現はれて來る。苟も君子たる所の者は、其未だ見ぬ所に於て戒め慎み、まだ其聞かぬ所に於て恐れ懼るゝと斯うある。古語にも「君子は晴天に對して懼る」と云ふことがある。俗に謂ふ日本晴のやうな好い天氣の時に恐れる。其代りに「雷霆を聞いて驚かず」大雷が玆に鳴り始めたというても、敢て驚かない。「平地を渡つて恐れ、風波を渉つて疑ず」といふ。平々坦々たる大道を歩きながら、常に恐れ慎んで居るが、併し如何に大なる波が起り、烈しい風が起つても、少しも疑はないと斯ういふやうな言葉もあります。それは即ち此意味であらうと思ふ。其睹ざる所に於て戒慎し、其聞ざるる所に於て恐懼す。言葉は至つて平易、解釋するまでもない位であるけれども、之を實行するといふことは、容易てない、それが即ち修養の最も大切なる所でありませう。斯んなことを段々と實例に就て考へて見ると、色々あるやうてあります。是はちよつとした話でありますけれども、或書物に斯ういふ話が一つ書いてあつた。それは餘程飾りを附けて書いてありましたが、其要領丈けを言うて見ると、盜人が二三人連れ立つて、極く田舍の或物持らしい家を襲うたことがある。所が其二三人の盜人が、初め戸の節穴から內を窺つて見ると、一人の二十か二十二三格好の若い女がタツタ獨り圍爐裡の傍に坐つて居る。誠に行儀正しく坐つて居る。何をして居るか知らんと思ふと、其婦人が粥を煮て居るらしい。大分時間を經て、最早御粥の能く煮えたか煮えぬかを試す爲めに、淨に鍋の蓋を取つて、さうして奇麗な箸を持て、其鍋の中の粥の粒を少しばかり蓋の上に載せて、さうして自分の軟かな指先で潰して見て居る所を、節穴から盜人が見て居つた。其處には誰も人は居らないのてあり

ます。ちやんと圍爐裡の側に行儀正しくして、さうして蓋を取り、今のやうにやる容子が、如何にも綿密で、少しも誰も見て居らぬというて無作法ではないのである。誰それ丈けを見て二三人の夜盗を働くやうな恐しいやうな人間が、大變感服した。其婦人の態度を見て、遂に其家を襲ひ掠めずして逃去つたといふ。斯ういふことが書いてあつた。何でもない話のやうであるけれども、餘程それは善いことであらうと思ふ。彼の『詩經』にもたしかあつたと思ふ、汝が室に在るを見れば、希くは屋漏にも耻ざらむと、斯ういふやうな言葉があつたと思ふ、屋漏てありますから、誰も人は居らない、唯獨り居る時に於ても、自ら心に於て疚しき所、耻づる所がないといふ。唯道を得たといふのと、得ぬといふのと、唯それ丈けが境目なのである。斯ういふ例はまだ外に想ひ起して居るが、それは略して置きます。其の見ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼するといふことを、一層精しく言ふと、「隱れたるよりも見はれたるは莫く、微かなるよりも顯らかなるはなし、故に君子は其の獨を慎む」といふことになる。之れに就ては先師は大層高尚に解釋を施して居られてあります。併ながら、それを幾ら か和らげて見ると、獨といふことは唯獨り室に居ると解するのが常であるが、詰り我心といふものは所謂獨立のものであつて、是ばかりはたとへ親子の間と雖も夫婦の間と雖も、決して他からは之を窺ひ知ることが出來ない。獨りは言換へれば自分の心、自分の心は自分獨り知つて居る、さういふ工合に獨りといふことを自分の物にして見たならば、親しいであらうと思ふ。それが初めの言葉にある通り

隱れたるよりあらはるゝは莫し、微かなるより顯かなるは莫し。我心といふものは實に隱して居るのではない。けれども自ら隱れて居る。なぜならば、外觀からは指一本差すことは出來ぬ筈のもの、人目からは決して窺ふことは出來ぬ。世の中の法律のやうなものが、細くなつて見ても、規則が如何に緻密になつても、どれ位形の上に於て其制度といふものが精しくなつても、決して我心を束縛するとか、我心を窺ふといふことは出來ない。それは決して政治だとか、法律だとか、其他のものに於ては、決してそれを動かすことは出來ない。宗教といふことになると、其處に這入つて行く。詰り我心といふものは、自ら隱れて居るけれども、其隱れて居るのが、實は眼に一杯物を見、耳に一杯聲を聞くが如く、あり〳〵と目前に現はれて居る。隱れてあるといふと、此姿を離れて居るとか思ふけれども、さうではない。隱れたる其儘が、實に明々地の儘である。隱れたるより見はれたるは莫く、微かなるより顯かなるはなし。我心の有樣といふものは、實に微妙である。實に微かなものである。肉眼を以て窺ふことの出來ぬものである。あるけれども其微かなるそれが、實に此位現れて居る所のものはないのである。斯ういふことを繰返して居つても、言葉數が多くなる丈けです。是も或書物で見た、飛彈の國あたりで、檜の版木板を造る所の人が、或日例に依つて山の中に入つて、さうしてそれを拵へやうと思ふ中に、向ふを見ると古い年を經た杉が一本ある、其後ろに何物か居るかと思うて、眼を注いで見ると、山伏の姿をした者が一人立つて居る。是が即ち世に謂ふ天狗といふものであらう、

此怪しい人間が即ち天狗であらうと心にさう思つて眺めたらば、其山伏らしい人間が聲を荒らげて、「おぬしはおれを捉へて、怪しい天狗ぢやと思うて居るな」、と斯う云うた。それから又其木挽が、こいつはどうも怪しい、是はぐづ〳〵して居つてはいけぬ、早く此仕事を片附けて、家に歸らうと、斯う心で思うたらば、又其山伏が直ぐに、「おぬしはおれが怪しいと斯う見て、早々此處を片附けて家に歸らうと思うて居るな」と斯ういうて、天狗らしい奴が、こつちの心で思ふ通り、向ふで答へた。それから早々日も暮れるし、斯んな所にぐず〳〵して居つてはいけぬと思つて、其版木板を片附けやうとして、何か繩で括らうとする拍子に、繩が切れて、一枚の版木板が山伏の鼻面に當つたと思うて見ると其怪し氣な人間が、又斯ういふことを言うた。「貴樣は一向氣の知れぬ奴ぢわい」斯う言うたかと思ふと、其山伏の姿は掻消すが如くに無くなつた。是は或は拵へた話であるかも知れぬが、なか〳〵面白い。初は心でさう思つた。其事が直きに自分の形の影法師の如くに向ふに現はれた處が、面白い事には結ばうとする繩が切れて、版木板が一枚飛んで、彼の鼻面に當つた。其時に木挽の心には、一向何にもなかつた。態々版木板を以て、向ふを打たうとも傷けやうとも、そんな心は少しも無かつた。不圖した拍子に當つた。當つた時には、我心を見ることが出來なかつた。山伏の心を見ることも出來ない。見ることが出來ぬ筈さ、何にも考へて居らぬ、實は心が隱れて居るのが常であるが、それよりあらはなことはない。其譬へ難き微細な心程愈々明かなことはないといふことは、日常公私の間に於て屢々何かの事に就て出會うて居ることがあらうと思ふ。前方のことを首を回らして見ると思ふ當ることがあらうと思ふ。故に君子は其獨を愼むと斯う云ふ唯人に對して愼む譯てはない、一つの何か掟に對して愼む譯でもない、自分自身の心を失はないといふ事で、言換へれば其獨を愼むといふことである。斯ういふことは修養次第で何とでも、まだ〳〵味ひを嚙み出すことが出來やうと思ひますが、一應の辯はそれ位のことに致して置きませう。之に就て又別錄を讀むと、先師が斯ういふ實例を引いて居る。是は今言うた卑近な例とは、立上つた話である。昔唐朝の時に、宰相の杜鴻漸といふ人がある。それが或時に白崖山の無住禪師を、自分の官邸に招待して、さうして法を聽いた、其時分に恰も庭の樹に鴉が留つて居つた。鴉が「カア」というて鳴いた。鳴いた時に今の宰相の杜鴻漸のいふやう、「あなたは鴉を御聽きになつたか」、「聞いた」、斯う答へたらば、宰相が言ふには「聽いた」と言はれるが、最前鳴いた鴉は最早何處かに飛んで行つた、「カア」といふ丈けで、もう何にも無い。それになぜ聽いたと仰しやる」。斯ういふ所は大に工夫を要する處、さうしたら無住禪師が大勢の大臣侍臣を顧みて曰く、正法聞き難し、各々宜しく諦聽すべし。聞と不聞と聞性に關るにあらず。本來不生、今亦不滅、有聲の時是聲塵自ら生ず、無聲の時是聲塵自ら滅す、而して此聞性、聲に隨て生ぜず、聲に隨て滅せず、此聞性を悟るときは聲塵の流轉を免れん。乃至香味觸も亦復た是の如し。まさに知るべし。聞に生滅なく、聞に去來なきことを正法聞き難し、各宜しく諦聽すべし」といふ、是は讀んて

文字の通り、明かに聽くべしというて置いて、「聞と不聞と聞性に關るに非ず」といふ、今鴉の聲なら聲を聽いたと聽かざるとは、聞くといふ心には與るのではない。唯是丈けの言葉では、ちよつと分りませぬが、聞性の性の字はいつでも佛教では不偏不黨の心の本體に名づけられてある。聞性といふ、今此處で聞いた音がした時と、音のせぬ時とは、一向見ない。畢竟聞くといふ心の本體には、一向音がしても、音がせんでも、其本性といふものに於て、少しも相關ずることではない。なぜといふならば、本來不生、今又不滅」聞性といふ聞く心、心の根本といふものは。本來生れたといふ心ではないつ其聞くといふ心が生れ出たといふことがないから、今まで無くなるといふことはない。斯ういふことは、大きに味はふべきて、本來不生、今又不滅、有聲之時是聲塵自生、」色、聲、香、味、觸、法之を六塵といふ。皆是は佛教の實語である。此六塵が動もすると、心を汚す所のものであるから、これに塵といふ名が附けてある。「聲ある時は、之れ聲塵自ら生ず」といふ、唯聲といふ外界の一つの響が生じた丈けて、「聲無きの時、之れ聲塵自ら滅す」。今鴉が飛んて行つた跡に、聲が無いといふのは一時的の影が消えた丈け、而して今の聞くといふ聞性は耳に從つても生ぜず、耳に從つても滅せず音のする時と音のせぬ時とに、ちよつとも變りはない。此聞性を悟る時は、今聞くといふ此本性を悟つた時に於ては、聲塵の流轉を免れ得るであらう。一時的の響に、我心に流轉せらるゝということを免るてあらふ。今是は只聲と云うことに就て言うたのだが、「乃至香味觸も亦復た此の如し」聞くといふ心に、生と滅とはない、聲がしたとせぬとには相關しない。聞くといふ本性には、去ることも來たることもない、斯ういふことは餘程味はうべきことだ。斯ういふ工合に無住禪師が說法されたに就て、宰相の杜鴻漸が、「屬僚とともに、喜躍して善と稱す」、喜び悟つて、「宜し」と稱したとある。さういふことに於ても、隱れたるより見はるゝは莫し。微かなるより顯かなるはなしといふことが、大に味へるてあらうと思ふ。詰り隱れたると、微かなるといふと、今云うた聞くといふ本性、見るといふ本性味はうといふ本性、其不生不滅、不去不來の本性を指した。斯う一つ明かに照して見たらば、最も親しいであらうと思ふ。故に君子たるべき者は、其獨慎むのである。

次は先師の評論であります。孔門三千の徒、一口の孔子の門下生は三千といふ。其中で才明儁藝の者七十有二人、其七十二人の中に於て、一陽の嘔むる所、一雨の霑す所、各自得る所あり、各一藝一能又得る所がある。唯だ大道の正統を得たる者は、顏曾二人のみ、顏回蚤世す、故に曾參獨り其宗を得、孔伋業を曾參に受くるに及んで、此の一著を體究す。唯其大道の正位を得たものは、顏回と曾子の二人のみであつた。處が其一人の顏回は、早くも死んて仕舞つた。故に、孔子が獨り其宗を得た。孔子の道を傳へた者は、唯曾參ばかりてある。曾子樣の御子に當る、伯魚といふ人、又其御子が孔伋て、字は子思というた有名な人である。其孔伋は、誰に道を學んだかといふと、業を曾參に受けた。さうして此一著といふのは、則ち獨を慎むといふ本文を指しても宜しい。實學功夫、力を用ふる年有

り、竟に孔門の玄智に通徹し始めて這の語を唱ふ。斯ういふ所は讀んだなりで宜しい。此時は孔子を去る稍遠しで、もう孔伋の時代になつては、大分年代が經つて居る。其の愈久しくして愈其の宗旨を失ふことを憂ひて、遂に中庸を著して、以て後學に授く。即ち孔子の宗旨を失ふてあらうといふことを心配して、彼の『中庸』といふものを著して、さうして以て後學に授けた。其『中庸』の中でも其の要此數言に在り、此の數言の眼目は、何處に在ると云うたならば、即ち慎獨の二字に在り、蓋し古人後學の入り難きを憐んで、諒々と鄭寧に是の如くに敎へた。然るに後世の儒士徒に、聖賢の語を釋するのみに務めて、殆ど儒學といふことは、一の文章學位になつて仕舞つた。未だ嘗て聖賢の心を明覈することを務めず、故に、孔門傳授の心法は墮して土の如し、痛むべく悲むべし、苟も孔子の徒たらむと欲して、我こそ儒敎の徒てあると云はんとするならば、先づ此語に依つて强いて精彩を著けたらば宜からう、己に反り、さうして覿照して見よ。斯ういふことも多少辯を挾む餘地があるが、今は略して置きます。兎に角外に向はずに、內に向つて覿照し去つて、さうして歲月の久しきを積み、愈々退かざれば、則ち忽然として妙訣に契當せむ。之を禪宗の最も本領として居る。是に至つて覺えず知らず手を拍つて大笑し去る在らん。此の快き一笑を發する時節が到來するてあらう。是に於て平日山野が所謂不玄の玄、不妙の妙、玄らしい玄は眞の玄てはない、妙らしい妙は妙の妙ではない、不妙の妙、禪宗の禪宗臭きは眞の禪てはない、悟の悟臭きは、眞の悟ではない。昔の色々の悟がある通り不玄の玄、不妙の妙といふものは、果して自得有らん。之を私が常に學者に向つて提唱して居る。蓋し入德の要門を開くに於て此外更に發轉すべき者無し。是てちよつと孔伋の如何なる人てあつたかといふことは、一例を擧げても分りますが、是は『說苑』といふ書物にあるのは、孔伋が衛といふ所に居る其時分に、褞袍表なしといふ、詰り着物に表のないものを着て居る。二旬にして九食すといふ。一口に言ふならば二十日間に二遍程しか食ふことが出來ぬ程貧てある。其時に田子方が、それと聞いて、人をして狐の皮衣を贈らしめた。さうして其使に斯ういふことを口傳へにしてやつた。大分あの人は堅い人てあるから、受けぬてあらうと思うて斯ういふことを言うた。『吾れ人に假せば、遂に之を忘る、吾れ人に與ふれば、之を捨つるが如し。』我は人に品物を貸しても忘れて仕舞ふ、何物を人にやつても捨てたやうに思ふ。てあるから狐の皮衣をお前さんに贈つても何とも思はぬと、斯ういふことを附添へてやつた、さうしたらば果して孔伋即ち子思が、それを辭退して受けなんだ。其時に田子方が言ふのに『我は有り、子は無し、何が故に受けざる』お前は着物が一枚もない、何が故に受けないかそれ位窮して居るならば受けたら宜からうと言うたら、子思か言ふのに、『伋之れを聞く、妄りに與ふるは物を溝壑に遺棄するに如かず。』なか〳〵昔の人は今の世の中に照すと、今更の如き感じを惹く。色々贈賄とか收賄とかいふ賤しいことが行はれて居りますが、孔伋は斯ういふことを言うた。妄に與ふるは、物を谷底に捨てるに如かず。滅茶苦茶に人に物をやるのは、丁度谷底に物を捨てると同じこ

とだ『伋貧なりと雖も、身を以て溝壑と爲すに忍びず』我は如何に窮し、且つ貧なりと雖も、此貴い身體を谷底同樣にすることは出來ませぬ。お前さんは物を捨てるといふが、我の身體を谷底にせよといふのか、無禮千萬なといふやうな言葉が見えて居る。爰を以て受けずというて、とう〳〵受取らかつた。斯ういふ一節を以ても、孔子樣の孫の孔伋といふ人が、如何なる人格の人であつたかといふことが、窺ひ知れる。長くなりますので今回は是だけにして置きます。

第三十四講　浩然（第七則）

孟軻曰。我善養吾浩然之氣。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞乎天地之間。

凡天下儒流。讀孟軻浩然章。恝乎過者。非眞儒人矣。山野疇昔逢此章。而根求道之志。故後來常歎云。當大敎未東來以前。有此卓見。孟軻可謂生而知之者。試問學者。正文二十九字。但一字有用生知之全力處。作麼生。那一字。

和訓　孟軻曰く、我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。其の氣たるや、至大至剛にして、直を以て養うて害ふ無ければ、則ち天地の間に塞がる。

凡そ天下の儒流、孟軻浩然の章を讀んで、恝乎として過ぐる者は、眞の儒人にあらず。山野疇昔、此章に逢うて、道を求むるの志を根す。故に後來常に歎じて云く、大敎未だ東來せざる以前に當つて、此の卓見あり。孟軻は謂つ可し、生れながらにして、之を知る者なり。試に學者に問ふ、正文二十九字、但一字、生知の全力を用ゆる處あり、作麼生か那の一字。

【講話】本則は『孟子』七篇中に於ける有名なる所の一章であります。それを取て以て此の三十則の一つとしたので、孟子が斯の如きことを述べられたる其時代といふものも、眺めて見ねばならぬ。矢張り孟子の背景には、其時代の色々の事情がある。それは孟子の傳を調ぶれば能く分つて居ますが、一寸其一端を擧げて見れば、其時分には聖を距る稍々遠しといふ樣な有樣で、最早孔子が歿くなられて餘程遠くなつて居る。依つて孟子は、業を子思の門人に受けた。御存じの通り孔子の道統は、孔子から曾子、それから孔伋即ち子思、其子思の門人に業を受けた。さういふ工合に道統が傳はつて來て居るのでありますが、一方には既に六國といふ樣なものがあつて秦に對して居る。所謂春秋戰國の時代になつて居る。秦の方の側に於ては、有名な商鞅といふ樣な人がある。それからそれへ對する楚の國魏の國に於ては、吳起といふ樣な人を用ひて居る。又齊の國に於ては孫子であるとか、田忌であるとかいふ樣な有名な人々を用ひて居る。それから又彼の有名なる蘇秦張儀といふ樣な者があつて、蘇秦は合縱を以て六國を合せて秦に向はうといふ樣な有樣。丁度目下歐羅巴の大戰亂の有樣が、或點に於

て少しく似て居る所がある。それから秦の方に於ては、張儀といふ者を用ひた。此張儀は即ち連衡といふ策を以て、六國を併呑しやうといふのである。詰り一方には大なる秦の國があり、それへ對する六國があり、所謂合縱連衡で以て、互に天下を爭はうといふ、さういふ時代だ。それ故に天下は攻伐を以て賢なりとするといふ有樣で、只自分の領土を廣めるとか、他の領分を侵略するとか、さういふ謀をする者を以て、それを賢なりとして居る樣な時代であつた、であるから獨り孟子が仁であるとか、義であるとか說いて廻つても、其れを時の人が迂遠なりとして、相手にする者がなかつた。大道は廢れて土の如し、昔から堯舜禹湯、文武周公、孔子と傳へて來た大道といふものは、土の如く、人の足に蹂躪されて仕舞つて居るといふ有樣で、其中で孟子は彼れが如くに、獨り道を唱へて居つたといふのは、皮相上から見ると、太た迂遠である。然し今日から之を見るといふと、其時代にあつて道を唱へたといふのは、孟子の一つの卓見である。優れた人は斯ういふ樣な者で、それと比較にはならぬかしらぬが、彼の維新の當時、上野の戰爭の時分に、福澤諭吉翁は、其頃芝の新錢座に居つて、塾を開いて居つたが、ドン〳〵大砲の音がする中で、何やらの經濟書を講じて居つたといふこともある。我々は自分の職分に向つて、忠實業に服するといふのが、矢張り一つの戰鬪である。昔から優れた人のやり方は同じだ。先づさういふ時代に於て、孟子はあの通りの仕事をした。其事が殘つて今日は『孟子』といふ書物になつて居るが、其『孟子』の七篇の中でも、此浩然の章は、最も有名なる一章である。此浩然の氣を唱へる以前に、例の告子との問答往來がある。其問答往來は、心を動かすも、若くは心を動かさないかといふ問答である。告子は斯の如くにして心を動かす、孟子は斯の如くにして心を動かさずといふ樣な議論が此前にあるのであります。そこで終ひに、孟子が『志は氣の帥なり。氣は體の充なり』と云うた。さういふ所から、段々論究した所で、孟子は遂に浩然の氣といふことを言うた。「我れ善く吾が浩然の氣を養ふ」斯ういふことを言うたのであります。然らば何をか浩然の氣といふと言うたらば、孟子は『曰く言ひ難し』、斯ういふ言葉が挾まれて居る。それから「其氣たるや至大至剛にして直を以て養うて害ふ無ければ則ち天地の間に塞がる」。此處に出て居る本文は、矢張り意味だけは十分現はれて居るけれども『孟子』に書いてある所から見ると、言葉が少し省略してある。さういふことは『孟子』の書物に就て見れば精しく分る。兎に角孟子の說では、志といふのが丁度軍隊で言ふならば、將帥みた樣なもので、氣といふものは、それに從屬して居る所の兵卒みた樣なものである。心と言ても、氣と言ても、大した違ひはないけれども、多くは氣といふ時は、身體に屬する。志は吾が心を快定した意思だ。斯ういふことを言うて置いてから之を唱へた。我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。此氣といふ字は、辯が附け憎い。孟子自身ですらも、曰く言ひ難しと言て居る。今此處で浩然といふのは、盛大流行の貌と朱熹は註釋をして居る。誠に盛大に流行して已まざる所のものを形容した文字で浩然の氣は何處にあるかと言へば、之を遠方に求め樣としても、そんな氣が何處にもあ

る譯ではない。詰り一章の主眼とする所は、此の養ふといふ所にある。此浩然の氣なるものは、盛大流行のものであるけれども、養ふことを知らざる人に在ては、此氣といふものは、此言葉の反對で、實に至小至柔であると云うてもよからう。初めより浩然と限られたものでない、其れが養はれる時は流行已まざる所のものであるが、養はぬ時は詰らぬものである。だから氣は斯ういふものであると言て、一定した註釋を下すならば、下すことが出來ませうが、それでは死んだ註釋だ。それだから孟子自身が、曰く言ひ難し、自分に修養して味う人に於て、始めて浩然の氣たるものは、何ものかといふことが、我物になると見て置いて宜からう、それは我が佛敎の言葉から見ると、玆に先師の說を一寸紹介するのでありますが、先師は『首楞嚴經』を引いて、斯ういふことを言はれた。『首楞嚴經』といふは、我が大乘佛敎では有名な經であつて、心理的に佛敎の蘊奧を說いた御經である。其經文中に斯ういふ言葉がある。色身より外山河虛空大地に洎るまで、咸く是れ妙明眞心中の物なり云々と。色身といふのは我が身體であります。之を始めとして外界一切の現象の代表を呼び出して虛空大地と云うたのである。其一切のものは何の現はれであるかと言へば、これは悉く妙明眞心の顯れである。此五官を以て總ての現象に對した所では、斯ういふ、一切のものが、我々よりも以前に現はれて居る如く思ひ爲すのであるが、今佛說に依るとさうでない、今眼に映じて居り、耳に響いて居る此一切の現象は悉く妙明眞心中のものである。佛敎の見方は、始終さうである。仰向いて見ると、日月星辰燦然と其處へ現はれて居る、俯向いて見ると山河大地人畜艸木、其處に雜然として現はれて居るが、これは外のものゝ現はれでない、皆我が本來持て居る妙明眞心中のものであるといふ思想が經文に出て居る。『楞嚴經』許りでない、大乘佛敎の思想は常に斯ういふものである。元來天地は、無形なり、無知なり、無靈なり、而して之に主宰なる者は即ち此妙明眞心である。此妙明の眞心といふ心を通じて、始めて一切萬物に其眉目あり、一切萬物に其心靈ありと言ひ得ることが出來ます。之を除いて仕舞へば、天地は無形無靈無知のものと言ふ外はない。斯ういふ立場から見ると、孟子の浩然の氣と唱へ始めた氣は、始めから良能があるのではない。彼の氣を主宰する所の妙明の眞心あつて、さうして良知良能といふものゝ働きを現はす。それを孟子は養ふと此處では言うた。此養の一字を以て活用するのである。學者能々右の理を熟察精思す可し。それは先師が言はれたことを、今鳥渡取次いたのである。斯ういふ立場から、そこで浩然の氣といふものを、如何に養ふか、是からは實行であります。若し其浩然の氣を養ひ得て、十分に鍛錬し、修養し得るかといふと其氣爲るや至大至剛である。至大至剛であるけれども、然れども養ふといふことを知らざれば、詰らぬものである。直を以て養つて害ふことなければ則ち天地の間に塞がる。此直の一字であります。此事も『維摩經』抔を見ると『直心是道場』などゝ云うてある。白隱禪師の師匠たる正受老人の言葉に、直を以て養ふといふ意味のことを、『正念工風、不斷相續』と云うて居る。總て修養といふことは、實行せざれば無味淡泊にして、無意味

なものであるが、一たび之を實行するといふことに至つて、愈々益々其意義の甚深なるを知るので、丁度大海に入るが如く、轉々入れば轉々深してある。それを今孟子は、直を以て養うて害ふなければ云云というた。然るに我々は常に人欲の私なるものゝ爲に之を害うて居る。朝から晩迄て我々の五官の機能から起る七情、即ち喜怒哀樂愛惡欲の情の爲に、常に盛大流行なる氣を傷だらけにして居る。然るに之れに反して、直を以て養うて害ふなきときは、天地の間に塞がる。これは世間的の言葉であるから、天地の間を言うたのであるけれども、別に何にも元來天地と云て、内ち外のあるのではない。詰り天に一杯、地に一杯、天地そのまゝに一杯に塞がつて居る。これは『孟子』といふ書物の言葉を讀んだ丈て措けばそれ丈けだが、此氣といふものは、何かといふことから、段々修養して行くと、其氣といふものが著しく力附いてくる。段々修養し得てくると、殆ど天地一體の間に充實するといふ境界に迄で至り得ることが出來る。これは修養の實行上に於て現はれてくるのであります。扨て初にも話した通り、先師洪川和尚が儒を出て禪に入た、其動機は何かといふと、或時に孟子浩然の章を講釋して居つて、突然として大聲を揚げて、門人に向つて孟子は浩然の氣を養ふといふが、我れは浩然の氣を行はんと言はれた。それもフイと思ひ附て叫んだ譯てはない。豫てより密々に工夫を凝らしてをられたのてある。それから遂に儒を捨て禪に入られた。其時の告別の詩は孔聖釋尊非ニ別人一、彼謂ニ見性一此謂レ仁、脱塵休レ怪吾蠭放、行ニ箇浩然一片眞一といふ七言絶句てある。箇樣な譯て此浩然の章といふものは、餘程先師と深き因緣のある章てあります。

「凡そ天下の儒流孟軻浩然の章を讀んて、恝乎として過る者は、眞の儒人に非ず」恝乎といふものは憂なき貌て、我れは儒者てあると言ても、此孟子の浩然の章を、殆と讀流して仕舞つて、只讀流的に講釋する位ては、眞の儒者と稱することが出來ない。「山野疇昔此の章に逢うて、道を求むる志を根す」疇昔といふのは、遠い昔といふことてはない、先きにといふことで、猶前日といふが如くてあります先きに此章に出逢つて、初めて求道の志といふものを立てられた、「故に後來常に歎じて云ふ」、これ位因緣のある一章だから、後に志を成して後、賞歎して言ふには「大敎未だ東來せざる以前に當つて」大敎といふものは言ふ迄もない佛敎て、佛敎が印度よりして東の方へ渡らざる前に於て「此の卓見あり」孔子一代には餘り斯ういふキッパリしたことを伸つしらぬ。そこは又孔子の味はう可き所だ。然るに孟子が未だ佛敎の渡らざる前に、此浩然の一句を唱へられるといふ、斯ういふ卓見を有せられたのは驚き入たことである。「孟軻は謂つ可し生れながらにして之を知る者なり。」同じ知るにしても、苦んて知る輩もあり、學んて知る輩もあり、又は生れ乍らにして知る者もある。知ると言ふも、色々あるが、どつちかと言へは、本當は苦んで知ると言ふことが、我々には爲になることて、次に學んて知るといふことも、大切である。而して此生れ乍らにして知るといふことは、十人が十人出來ることてない。これは千萬人中の一人てある。此點から言ふと、孟子は生れ乍らにして知る者といふことが

出來る。「試みに學者に問ふ」試みに學者修行者に、私が尋ねて見るが、「正文二十九字、但一字生知の全力を用ゆる處あり」此處に言ふ本文は、丁度二十九字程あります。此中でタッた一字といふと、大抵の人が早合點をして、養といふ一字であらうとか、又は直の一字であらうとか、アテ推量を仕樣とする。然るに先師洪川和尚の見て居る所は、さういふ字義上の沙汰ではない。大に仔細がある。これは講釋丈けでは濟んで居らぬ、「作麼生那の一字」如何なるかこの一字であらう。此二十九字の中から、苟そめに一字を捕へ來て、あれかこれかと言てる、こんな文字ではない。ソコハ孟子でないが、曰く言ひ難して、人々が修養錬磨した上で知ることで、其一字を筆先で書く譯ではない。書き現はせるものでない。天地に塞がるといふ境界を茲に實現しなければならぬ、禪の本領は此處にある。それなら何か神祕的のものか、不可思議のものがあつて、偶然に現はれ出るのかと言へば、決してさういふ譯のものでない。それは何の一字であるか、此洪川の目の前に突き附けて見ろ、作麻生那の一字。

第三十五講　無隱（第八則）

孔子曰。二三子。以我爲隱乎。吾無隱乎爾。
吾妙道。至簡至近。知之則尋常事也。決非高明者。決非幽遠者。而又莫高明焉者。又莫幽遠焉者。故其妙甚矣。孟軻曰。道在近。却求之遠。事在易。却求之難。是已。今如本則一語。孔子向學人面前。傾盡一栲栳。而當時十哲徒。各盡充分力量。而收得寶珍者稀。不亦奇乎。昔宋黃庭堅參黃龍晦堂。堂曰所公諳書中有一兩句。甚與吾門事恰好也。公知之麼。庭堅云。不知。時當暑退凉生。秋香滿院。堂乃曰。聞木犀香乎。庭堅云。聞。堂曰。吾無隱乎爾。庭堅欣然領解。後在黔州道中。晝臥。覺來忽然通徹本源。矣。便寄一偈。偈中有石工來劉鼻端塵。無手人來斧始親之句。（全偈。在羅湖野錄。可往見。）噫如庭堅。刻意斯道。如實盡力。如實徹見。可謂收得寶珍者。學者若激發大志。不懈則亦必有收得孔門寶珍之時節。吾亦無隱乎爾。

和訓　孔子曰く、二三子。我を以て隱せりと爲す乎、吾爾に隱すこと無し。
吾が妙道は至簡にして至近、之を知れば則ち尋常時なり。決して高明なる者に非ず、決して幽遠なる者に非ず、而して又焉より高明なる者莫く、又焉より幽遠なる者莫し、故に其の妙甚し。
孟軻曰く、道は近にあり、却て之を遠に求む、事は易きに在り、却て之を難きに求むと、是れなり。

今本則の一語の如き、孔子學人の面前に向つて、一栲栳を傾盡す。而も當時十哲の徒、各充分の力量を盡し而して寶珍を收得せる者稀なり、亦奇ならずや。昔宋の黄庭堅、黄龍の晦堂に參ず、堂曰く、公の諳んずる所の書中に一兩句あり、甚だ吾が門の事と恰好なり、公之れを知るや。庭堅云く知らず。時暑退き涼生ずるに當る、秋香院に滿つ。堂乃ち曰く、木犀の香を聞くや、庭云く聞く。堂曰く吾れ爾に隱すこと無し、庭堅欣然として領解す。後に黔州の道中に在つて、覺め書臥し來つて、忽然本源に通徹す。便ち一偈を寄す、偈中石工來り劉る鼻端の塵、無手の人來つて斧始めて親し、（全偈羅胡野錄に在り、往いて見るべし）の句あり、噫庭堅の如きは意を斯道に刻して、實の如く力を盡し、實の如く徹見す。謂つべし、寶珍を收得する者と、學者若し大志を激發して懈らざれば、則ち亦必ず孔門の寶珍を收め得るの時節あらん、吾れ亦爾に隱すこと無し。

【講話】本則は矢張り『論語』の述而篇に出て居るが、此處では幾らか略して出してあります。『論語』の本文に就て言ふと、「子曰く二三子我を以て隱せりと爲す乎、吾爾に隱すこと無し、吾行ふとして二三子に與しめずということ無し、是れ丘なり」と、斯ういう工合に出て居る、それを少し斗り略して此處に引いた。本文の文言は、解釋する迄もない。或時孔子が自分の門弟子に向つて言はれるに、お前達、我を以て隱せりとするか、我々も矢張りさうであります、自分が極見識が低い所から眺めると、そこに何か我等の爲に殊更に祕し匿して、一向示して呉れない。そこに殊更に何か祕密を持て居ると思ふてあらうが、そんな事はない。吾爾に隱すと無し。吾は元來爾等に向つて塵程も隱す所はない。隱す所ないという斗りではまだ言葉が至らないから、其次に吾行ふとして二三子に與らしめずということ無しと附けられた。吾は朝起きてから、晩に寢る迄で、其間行住坐臥、有ゆる行動の上に於て、一々爾等に示して居るのである。道というと、大層遠い所へ求める樣だが、實はさうでなくして我が毎日々々の此行動が、即ち爾等の爲に示して居るのである。斯ういう所の言葉といふものは、實に道を修める者から言ふと、有難い所のもので、一つ目を開て總ての宇宙間に放つて見ると天にある現象も、地に現はれて居る。總ての此の差別も、それが一種の無言の說法をして居るのである。佛法でも能く言ひますが、說法というものは、決して口の上で、彼是喋べる斗りではない。それは低い說法で、其上に、心に行ふ、それが大なる一つの說法であると、佛も申されて居る。孔子の立場から言ふと一切の者が我々に無言の說法を與へて居ると言ても宜い。無言の說法ということは、誠に大に味はうべきものである。今一寸想ひ起したが、須菩提といふ人は、釋尊十大弟子の一人であつて、解空第一と言はれた人で、所謂眞空無相の玄理を能く會得して居る。其須菩提が巖中に於て安坐して、深般若三昧に這入た。すると何處から出て來たものか、誰か花を雨ふらして讃美する所の人がある。須菩提が、今私が坐つて居る所へ華を散らして讃嘆するは誰かと尋ねると、吾は帝釋天で、尊者の說法を讃歎するのである、と答へた。須菩提曰く、吾はたゞ巖中に默然として、三昧に這入て居

る儘で、何一つも説法して居らぬのに、何を以て讃嘆するかというと、帝釋天はイヤあなたの一言も説かれぬ所、私がまだ一音も耳に聞かぬ、無聞無説の所、それが眞の般若波羅密の大説法である。それが有難いから、此通り花を雨ふらして、讃美いたすのであると答へた。斯ういうことが『碧巖』抔にも一寸出て居る。斯ういう意味から言ふと、例へば春風の中に鳥が歌ひ、花が舞うて居る。秋の霽れた空に月が冴えわたり、風が囁てをる、是が眞の説法で、所謂古松談二般若一、斷鳥弄二眞如一と云ふものである。此の立場から言ふならば、有情も無情も、常時説法で、經文には常説熾然説というてある。朝から晩迄て或る者が、大説法をして居る、所謂無言の説法おや、斯ういう工合の所に引當てゝ見ると、孔子の門人に示される所が深甚にして微妙なる趣があると思ふ。それを先師洪川禪師が評せられて左の如く云はれた。

「吾が妙道は至簡にして至近」眞の道といふ者は、さういう大袈裟なものではない、極簡にして極近い、「之を知るときは則ち尋常事なり」眞の道の本體を知り得た時に於ては何も餘り變つた譯のものではない。尋常事である。昔の人は未だ悟らぬ時は、山は是れ山、水は是れ水、既に悟れば水は是れ水に非ず、山是れ山に非ず、さうして其悟というものも、更に打破して仕舞つた所では相も變らず山は是れ山、水は是れ水なりで、所謂蘆山は烟雨、浙江は潮、斯ういう工合に東坡居士は悟つたのだが、それに違ひない。此の尋常事といふことが、極有難いことで、何かそこに隱し事がある、まだ祕密があるというならば、まだ眞に知り得たという譯にいかぬ。古人も佛法に不思議なしと云はれた。「決して高明なる者に非ず決して幽遠なる者に非ず」然かし時ありて人の爲にする時には殊更に高明なる所を示すこともあり、又幽遠なる所を示すこともある。餘り目を卑近な所に斗り付けて居る輩には、高遠な所を擧げ示す所があるが、畢竟之を看破つて仕舞つた時には、何にも不思議はない。「而して又焉より高明なる者莫く、又焉より幽遠なる者莫し」實は尋常一樣の事が其實至つて高く、至つて明かで、其尋常一樣の事が、實は能く幽に能く遠なる所の有樣である、それ故に決して其一端を捕へて、此處てある抔といふ、早合點をしては、迚も道の妙に及ぶことはない。故に其妙甚し、そこで此處に孟子の言葉を引いた。「孟軻曰く道は近きに在り却て之を遠きに求む、事は易きに在りて却て之を難きに求む」孟子は又別の所で斯ういうことを言はれた「君子の言は下帶せずして道存す」。極足下にあることて、道は近きに在るが、然るに多くの輩は之を遠方に求めて居る。事は易い所にあるものを、却て難きに求めて居る。世の中の事を眺めて見ると、往々さういふ嫌ひが澤山ある。今本則の一語の如きは、孔子學人の面前に向つて、一栲栳を傾盡す」斯ういう樣な有樣で、モウ一つ其前の實例を引ひて見ると、前後を言ふと少し長くなるから、略して置いて、六祖禪師が五祖禪師の法を嗣いて、衣鉢を受けて黄梅山を出られた時に、之れを爭はんとして明上座が跡から追駈けて、衣鉢を奪ひ返さうとした。所が六祖禪師はこれは衣鉢を取りに來たと思つて、自分は五祖禪師から傳授した所の鉢と袈裟を